

おっさん
美少女
暴れ旅

砂煙舞う朝もやのなか、歩くふたりの姿があった。

一人は、背が高くがっしりとした体軀に、毛深い二の腕をむき出しにした三十代半ばの男。背中には身の丈と同程度の大剣を斜めに背負っている。

もう一人は、押せばたやすく折れそうなほどほっそりとした、可憐なる美少女。といってもすでに二十代半ばであり、腰には丸めたウィップを提げていた。

「――おいユリス、やっぱり来るのが早すぎたんじゃないか？」

男が、隣を歩く女――ユリスに声をかけると、ユリスはちらりと男を一瞥してから答える。

「なに言ってるのよ。逆でしょ？ 出るのが遅すぎたの。あんたのせいでね、バラン」

ふたりが歩いている今、辺りはまだ薄暗い。陽が昇るまで、あと三時間はあるだろう。それなのにもう、目の前には目的地である町の看板が見えている。

責められた男――バランは、一瞬だけ「うっ」と言葉を詰まらせたあと、

「仕方ないだろ！ あの子がかわいかったのがいけないんだっ」

「まったく……いい歳して子どもの尻追いかけてんじゃないわよ。あんたのそれは犯罪にしか見えないんだから」

「そんな言いかたするからだろ!? 俺は追いかけて楽しんでただけだ〜っ！」

顔を真っ赤にしたバランの、悲痛な叫びが響き渡る。

町の外でよかったと、大きく息を吐き出したユリスに、

「だいいち、おまえだって楽しそうに邪魔をしていたじゃないか！ おまえにも責任がないなんて言わせないんだからなっ」

今度はバランが噛みついた。

ユリスが「はいはい」と軽く受け流すと、バランはやっと静かになる。いつもの流れだ。

――ふたりが予定どおり前の町を出られなかった理由。

それは、ふたりがともに旅をする理由に繋がっていた。

バランが、

(ユリスに先を越されるなんて、絶対許されん！)

そう思うとき、ユリスも、

(バランに先を越されるなんて、まっぴらごめんよ)

そう思っている。

ふたりはそれぞれに、『運命の人(ラーティフェン)』を探していた。一生自分と歩いてくれる人を。

そして賭けをしていた。先に見つけたほうが、見つけれなかったほうから新居と結婚式の費用を貰うこと。

そのため、互いに全力で邪魔をする。それがふたりのやりかただった。

流れの請負者(カーレリカ)として、様々な仕事を請け負いながら旅をするふたりの――

「クーフォシア国最南端、炭坑の町・ダウオン、か。ここが次の、恋の舞台ね」

翼を持った人間の姿があらわれた看板。それを読みあげたユリスの瞳は妖しく光り、隣のバランはしゃんと背を伸ばす。

新しい町での戦いの火蓋は、舞いあがる砂塵とともに切って落とされた。

請負者(カーレリカ)が仕事を貰う場所は、仕事屋(セトゥリカ)と呼ばれる商会の窓口だ。本当はとても長い正式名称があるのだが、長すぎて誰も覚えられないため、そう呼ばれていた。その窓口は、世界中どの国のどの町にも大抵存在しており、それぞれの土地に住む人々の暮らしや安全を陰から支えている。

旅する請負者である balan と yuris は、寄った先の仕事屋で仕事を貰い、それをこなすことで、次の旅費(と相手を口説くためのお金)を稼ぐという生活をしていた。そこで、新しい町に着くと最初に向かうのはいつも仕事屋であるのだが、あいにくと本日は着いた時間が早すぎた。

「あと何時間くらいだ？」

仕事屋の看板がかかった壁に背中を預けて、尋ねる balan。

yuris は少し首を傾げると、気のない返事をする。

「さあ……あんたが運動と妄想を終えた頃には、開くんじゃないの」

実はまだ眠いのだ。yuris は人の二倍は寝ないと、いつもの調子が出ない。

「じゃあ三時間くらいか」

一方の balan は、黙って待っているのが余程耐えられないのか、yuris の隣に背負っていた大剣を置くと、本当に運動を始めた。

こういう balan のバカ素直なところが、yuris は嫌いではない。

小さく笑いを漏らしてから、口を動かす。

「開いたら教えて、あたしはちょっと眠るわ」

どこでも、どんな体勢でも眠れるのが yuris の特技だった。

balan は伸びをした状態のまま身体をとめると、yuris を振り返った。

「ああ。だが、妄想に入っているときだと俺も気づかない可能性が……」

「妄想に入る前に起こしてちょうだい！」

思わず大声を出した yuris に、balan は肩をすくめて応える。

「はいよ」

yuris が安心して目をつむったのを確認してから、balan は再び運動を始めた。

腕が宙を切るときも、土の地面に足をつけるときも、決して音を立てないように注意深く動かす。balan の体格では本来ならば困難であろうそれも、balan にとってはたやすいことだった。

そもそも、請負者という職業はそう簡単になれるものではない。特殊な許可証が必要で、それを貰うためには多くの試験を受けなければならないのだ。なかには当然、戦闘に関する試験もある。balan はそれを最良の成績で合格していた。もっとも、筆記試験は最低の成績だったのだが。

ある程度の準備運動を終えると、balan は次に置いていた大剣を手にとった。それで素振り始める。

(師匠から貰ったこの大剣も、やっと手に馴染んできたな)

最初はこうして振ることさえできなかった、幼い自分を思い出して口もとが緩む。

そうして一時間ほど大剣を振りつづけた頃、町がにわかに動き出した。あちこちからカーテンを開く音が聞こえ、玄関のドアが開け閉めされる。鳥の声に交じって、人の声も聞こえてくる。なかには、旅人だろうか、町の出口へと向かって歩く人の姿もあった。

(おっと)

そのときにはさすがにバランも手をとめ、邪魔にならないよう道を譲った。相手はやけに髪の毛の長い男性で、バランが自分のために素振りをやめたのだと気づいたのか、機敏な動作で小さく頭をさげた。

(こんな朝早くから、みな動き出すのか)

なんとなくその後ろ姿を見送ったバランは、次に空を見あげた。明るくなってはきたものの、山の向こうにまだ太陽は見えていない。どうやらこの町の朝は、他の町よりも早いらしい。

(たっぷり二時間妄想できると思ったのに……)

残念ではあったが、今は仕事を受けるほうが先だ。

ふたりとも恋にはお金をケチらない性格のため、懐は常に寂しいのだ。少しでも稼いでおかなければ、いざというときに後悔することになるだろう。

バランはすっかり寝入っているユリスに目をやると、起こす前にじいっと見入る。

恋の相手には絶対になりえない存在ではあるが、ユリスの美しさはバランも十分に認めていた。大きな瞳に長いまつげ、余計な主張をしない鼻の下に、花の如く可憐な唇が座っている。黙っていれば男の恋人なら簡単にできそうなものなのに、これでいて熟女好きというから困ってしまう。

(おかげで俺は、好きでもない熟女を相手に邪魔しないといけないからな)

まるで拷問のようだった。

おもむろに大剣を振りあげたバランは、半分くらい憎しみをこめて振りおろす。壁際で眠っているユリスへと向かって。

「――む」

その剣先がユリスの端正な顔立ちを醜く変えてしまう前に、ユリスは目をつむったまま一歩横にずれると、それをよけた。剣先は少しだけ壁に当たり、チッと火花が散る、その瞬間。

「危ないじゃないのっ。もっとマシな起こしかたしなさいよ」

おしとやかな美少女は眠りにつき、口の悪い女王さまが目を覚ます。その手は腰のウィップにあてられていた。バランが敵であったなら、完全に仕留められていたことだろう。

「これくらいしないと、おまえは起きないじゃないか」

降参するように両手をあげたバランが応えると、ユリスは「ふん」と少し顔を赤らめそっぽを向く。

こういうユリスのたまに素直なところが、バランは嫌いではない。

「この町、炭坑があるから朝は早いみたいだぞ。おそらくここもそろそろ開く」

バランが流して告げると、ユリスはやっと辺りを見まわした。あちこちから聞こえる生活音は、先ほどまでよりもさらに増えている。

不意に、ユリスが背を預けていた壁のすぐ隣にあるドアも、ごとりと鳴った。間をおかず、開

かれる。

「おや？」

なかから顔を出したのは、五十歳前後のやさしげな男性だった。ふたりを見るなり外に飛び出してきて、観察するようにじろじろと視線を這わせてくる。

「もしかしてきみたち、請負者かい!？」

その瞳に浮かんでいるものは、期待の色だ。

なにかあったのだろうか、バランとユリスは目を合わせた。

「そうだ、仕事を貰いに来たんだ」

代表して、バランが答える。

こういうときに相手をするのは、バランの役目だ。ユリスではまず、見た目で舐められてしまう。ユリス自身もそれをよくわかっていたし、それでバランまで舐められるのはごめんだったから、一歩引くようにしていたのだ。自分の変なプライドで、請負者としての評価を落とすたくはなかった。

「そうか！ よかった……っ」

男性は飛びあがって喜ぶと、「さあさあ、なかに入ってくれ」とバランの手を取って連れてゆく。この町に請負者が訪れるのを、だいぶ待ち焦がれていたようだ。

ユリスも、バランに続いてなかに入っていく。

(いくらバランが男好きといっても、この男性じゃ対象外でしょうね)

隣に並んでちらりと顔を覗きこんだら、バランの顔にはやはり苦笑が浮かんでいた。

バランは強くてたくましい男だ。見た目はともかく、中身はそれなりに紳士でもある。それはユリスも認めていた。ユリスだって普通の女であったなら、バランに惚れていたかもしれない。しかしバランは、困ったことに男——それも、美少年が好きだった。

(お互い、本当に苦労するわね)

背中に語りかけてから、ユリスは仕事屋のドアを閉める。

ふたりの『運命の人(ラーティフェン)』探しが常に難航しているのには、そういう理由があった。

小さな町の仕事屋(セトゥリカ)だけあって、店のなかはかなり狭かった。まるでカウンター席しかない酒場のようだ、ぐるり見まわした balan は思う。カウンターの上には小さなネームプレートが載っていて、『ダウオン窓口担当:エクラル=イーラティン』と書いてあった。

そのエクラルはカウンター内に飛びこんでいくと、棚から一枚の依頼書を取り出してくる。「詳細はこれに書いてある。このクーフォシア国内では、他の町でも同様の事件が起きていて、なかなか請負者(カーレリカ)が流れてこなくて困っていたんだ」

ふたりは一度顔を見合わせてから、あいだに置かれた紙に目を落とした。

「ひと月前から、昼夜問わず多数の少年が何者かによってさらわれている……ね」

正直に言ってしまうと、ありがちな事件だ。

しかし受けざるをえないことを、ユリスはその内容を口にした瞬間に気づいていた。

「な、なんだって？ 美少年がさらわれているだと!? 許せんっ！」

案の定こぶしを握りしめる balan に、面倒だと思いつつもこみを入れる。

「美少年だなんてどこにも書いてないじゃない」

「さらうくらいなら俺に――うぐっ」

balan がさらに口を開いたところを、肘で塞いでユリスは確認する。

「報酬は十万シヨタか、悪くないわね」

「あの、大丈夫なのかい？ そっちの人……」

怯えた様子のエクラルに、ユリスは得意のつくり笑顔で答えた。

「ええ、この人はバカみたいに頑丈ですから、気にしないでください」

「は、はあ」

「そんなことより、この仕事お受けしますわ。登録のほう、お願いしますね」

ユリスは首に提げていた許可証を外すと、エクラルに手渡した。

仕事屋で仕事を請け負うときはまず、許可証の発行番号を登録する必要がある。それは、請負者でない者が仕事を請け負うことを防ぐためと、依頼が達成された際に発生する報酬の行方を明確化するため。そして、請け負う請負者の人数を限定する場合があるためだった。万が一請負者でない者、または登録していない者が達成した場合には、その時点で登録している請負者全員で報酬を山分けすることになっている。

今回は他の請負者がいないようだから、のんびりとしていても平気そうだ。

(仕事はほどほどにして、恋のお相手でも探そうかしら)

そんなことを考えながらユリスは、まだ口に手をあてている balan の胸もとから、許可証をむしり取った。

「一応、こちらをお願いします」

笑顔で差し出すとまた、エクラルの顔は balan をほうを向いている。

「あ、あの、そっちの人、首をおさえているけど……」

「大丈夫です。この人、慢性的な鞭打ち症患者ですから」

「嘘を言うな嘘をっ！」

必死に訴えるバランから、ユリスの本性をやっと理解したのだろう、エクラルは二枚の許可証を素早く手に取ると、

「しょ、少々お待ちを……っ」

うわずった声で逃げるように奥の部屋へと入っていった。

「おいユリスっ、仕事屋のおっさん脅してどうするよ」

呆れ声で告げたバランに、ユリスは腕組みをして応える。

「おかしいわね、こんなに笑顔で対応してるのに」

本気で悩んでいるのだ。首まで傾げて。

バランは笑った。

「おまえの場合は、目が笑っていないんだよ」

そこに、先ほど逃げていったばかりのエクラルが戻ってくる。去ったときと同じくらいの速さで。

「あんたたち、SSランクの請負者なのかいっ!？」

SSランクは、請負者の最高位。そうそう簡単になれるものではないことを、他の誰よりもよくわかっているのは、このふたり。

「そうだ。だから美少年のことは任せてくれ！」

力強く胸を叩いたバランに、

「あ、ああ」

せっかく尊敬の眼差しを向けていたエクラルの瞳が曇っていくのは、明らかに「美少年」のくだりのせいだろう。

それでもエクラルは、ふるふると首を振ったあと、ふたりに向かって改めて懇願する。

「本当に、頼んだよ。報酬は町のみんなで貯めたお金だ、どうか無駄にしないでおくれ」

登録の終わった許可証を受け取りながら、ふたりは深く頷いた。

どんな仕事であれ、登録したにも関わらず達成できない場合、それが請負者ランクに大きく響いてくる。特にSSランクのふたりの場合は、仕事をひとつ失敗しただけでもランクをひとつさげられてしまうのだ。ランクがさがれば、優先的にまわされるはずの重要な仕事も減り、その分だけ報酬も減ってしまう。恋にお金をかけたいふたりにとって、それは大問題なのだった。

「じゃあ早速、聞きこみにでも行ってこようかね」

許可証を掲げなおして呟いたバランに、エクラルは素早く別の紙を二枚差し出す。

「これが、現在までに行方不明となっている少年たちのリストと、この町の地図だ」

「なにっ？ 美少年リストだと!？」

バランが食い入るように見つめるどころか、本当に食ってしまいそうだったので、ユリスはどちらも素早く取りあげた。

「あ〜っ、まだスリーサイズメモってないのに！」

「あんたは美少年に一体なにを求めているのよ」

そもそもこのリストに、スリーサイズなど載っていない。当然だ。

「ではこれ、借りていきますわね」

ユリスはなるべく穏便な目をして微笑んだつもりだったが、やはり無理があったようだ。

「は、はい、お願いします……」

笑顔で応えてくれた、エクラルの顔は引きつっていた。

店から出たユリスは早速、貰ったばかりの地図を広げてみる。

「とりあえず、どこか広場にでも行くわよ」

こういうときはまず、座ってちゃんと考えてから動くべしというのが、ユリスの信条だった。

一方の balan は、

「別に考えなくても、一件ずつ家族をあたっていけばいいんじゃないのか？」

考えるよりも動く派だった。そのため、意見が対立することもしばしばある。

「だから、効率よくまわるために考えるのよ。それに、なにか共通点を見つけられたらまわる必要もないかもしれないじゃない」

「ふむ……まあそうか」

もっとも、大抵の場合は balan がすぐに折れるので、ケンカになることはほとんどないのだった。

「この道を真っ直ぐ行くと広場があるみたい。行きましょ」

地図を確認して指差すユリス。

背の高い balan には、同じ位置からでも並び立つ木々が見えた。

「ああ」

balan の頷きを合図に、ふたりして歩き出す。

空はだいぶ明るくなってきていて、すれ違う町人も女性より男性——つまり坑夫のほうが増えてきた。この時間からもう炭坑に行くらしい。

「坑夫ってずいぶん朝が早いよね」

あくびをしながら告げるユリスの横で、balan がポンと手を叩く。

「お、わかったぞ！ 昼すぎになると気温があがってきて暑いから、その前に終わらせるんじゃないか？」

「あー……なるほど、あんたも暑さに弱いもんね」

「てへ★」

「星がついててもまったくかわいくないのが、逆にすごいわ」

「褒めてんのかよそれ」

「ううん、けなしてる」

「ぐう」

しかしそれも、本当に一理あるのだろう。

「おっ、兄ちゃん旅の人かい？ いい身体してんなあ、坑夫にならないか」

通りを歩いていると、何度もスカウトされるのだ。しかし、

「こいつ、氷並みに暑さには弱いわよ。溶けたあとまったく役に立たないことを考えると、むしろ氷より劣るわ」

「それじゃあ本当に役に立たないなあ、もったいない」

ユリスが笑顔で説明すると、みな納得して去っていくのだった。

結果、残ったのは道の中央で小さくなっている大男がひとり。

「みんなして俺のこと役立たず扱いしやがって……こんな歳になってまで、そんなこと言われる人間の気持ちを考えたことがあるのかっ!？」

まったく、世話の焼ける大人である。

「 balan! そんなとこ座ってたら、粗大ゴミとして捨てられちゃうわよっ」

「いっそ捨てられて焼却処分でもされれば、地上のためになるんじゃないのかなあ？」

下を向き、愛おしそうに地面を撫ではじめた。重症だ。

「あっそ、じゃあこれいらないのね」

それでも、ユリスが顔の前で紙を揺らすと、balanは恐ろしい勢いで顔をあげる。

「そうだ! ※(ピー)少年リストっ」

「いいわよもう別に、美少年って言っても」

「美少年リスト!」

手を伸ばして取ろうとするbalanを、ユリスは素早く一歩さがってよけた。

「むっ？」

「ほら、あんたにはあんたの役目があるでしょ。いい加減立ちなさいよ。広場に着くのがあたしより遅かったら、これ見せないからね？」

言いおわるやいなや、駆け出すユリス。

慌てて立ちあがったbalanは、よろけながらも追いかける。

ふたりとも、本気だ。

本気で競争している。

そしてそんなとき、必ず勝つのはbalanだということを、ユリスはよくわかっていた。だからこそ本気で走らせたのだ。

一本の巨木を囲んで、いくつかのベンチが備えつけられている広場の中央で。

先に待っていたbalanに、ユリスはバトンのようにリストを手渡した。

balanは笑う。

「おまえは本当に、よくできた相棒だよ」

「なによそれ、褒めてるの？」

「もちろんだ」

負けを認めて顔を赤らめたユリスは、倒れこむようにしてベンチに座った。

「……まあいいわ。それじゃあbalan、リストに載ってる子たちの住所、読みあげてくれる？」

そう促しながらユリスは、自分の横に地図を広げて、腰に提げた道具袋からペンを取り出す。

balanは嬉々として頷くと、弾んだ声でひとりずつ、どうでもいい情報まで勝手につけ加えて読みあげていった。

真っさらだった地図に、次々と印が記される。

事件が起こりはじめたのは、ちょうどひと月前。それから二・三日ごとにひとりずつ、行方不明になる少年が出ているらしい。最後の日付は一昨日で、十人目である。

ユリスは冷静に分析する。

(また事件が起こるとするなら、今日か明日か、ね)

ここでなにか共通点がわかれば、事件を未然に防ぐことができるかもしれない。

しかし、地図上に記された印の位置は見事にばらばらで、とても法則性がありそうには見えなかった。

上から覗きこんでいたバランも首を傾げる。

「なんだそりゃ？ 点を繋いでいったら、魔術に使うような方陣になったりするのかな？」

笑いながら告げたのは、そう口にしたバラン自身、魔術というものの存在をまったく認めていないからであった。それはユリスも同様で、魔術や魔法といった不可思議な現象の裏には、必ず物理的な要素が絡んでいると信じている。ふたりがそうした現実的な考えを持っていたからこそ、解決できた事件も少なくはないのだ。

「どうも場所は関係なさそうね」

今まで狙われていない場所、と判断するのは簡単だが、それでは範囲が広すぎて意味がない。

「じゃあなあ、名前に関係しているというのはどうだ？」

バランは手にしていたリストを、地図の上に置く。

「そうね、考えてみましょ」

それからふたりして、あれこれと知恵を出しあってみたものの、やはりピンと来る答えは見つからない。

やがて考えることに飽きたバランが、そわそわとしはじめた。

「なあ、やはり無作為なんじゃないか？ 俺が聞きこみに行ってくるから、おまえはそこで寝ていていいぞ」

あまりにも顔の締まりがなく、なにを考えているのかばればれだ。

ユリスはバランをきつく睨みあげると、ペンをしまいこんで立ちあがる。

「あんただけだとロクなこと訊かなそうなもの、あたしも行くわよ」

「チッ」

「舌打ち一回で、報酬一割移動ね」

言いおわると、ユリスはさっさと歩き出した。

「へっ!? そりゃあ勘弁してくれっ、おいユリス！」

慌てて追っていくバランの顔が、それでも緩みっぱなしだったのは――

「お願いしますっ、兄さんを捜してください！」

三軒目に、とうとう行きあたってしまった。

ユリスは咄嗟に、バランがそれ以上近づかないよう服の裾をつかむ。

こちらを見あげている少年は、数日前に連れ去られた子の弟だ。

そしてバランが、全然密かにではなく期待していたもの。

母親は買いものに行っているということで、家の前で待ちながら話を聞かせてもらうことにしたのだが――少年にうるうる瞳で見あげられ、バランは年甲斐なくあたふたしたあとぴんと胸を張る。

「お、おう！ 俺たちに任せておけば大丈夫さ、なにせSSランクの請負者(カーレリカ)だからな。はっはっは」

さすがのバランも、泣きそうな子どもを前に顔を緩ませることはしなかった。人目があつたせいもあるかもしれない。

ユリスは少し安心して、

(基本的には、ちゃんとやさしいのよね)

ちょっと変だけど、と、心のなかでつけ足しながら手を放した。そのまま少年とバランのあいだに割って入ると、少年の頭を撫でながら話を聞き出そうと試みる。

「ねえ坊や、お兄さんがいなくなったとき、お兄さんと一緒にいたの？」

身を屈めてやさしく尋ねると、少年はほっとしたのかこくと頷き、答えてくれた。

「はい……僕、兄さんとかくれんぼをしていて、兄さんがオニをやっていたんです」

「いいなあ、おじさんも一緒にかくれんぼしたいなあ」

茶々を入れてきたバランを、素早く振り返ったユリスが睨みつける。

バランは縮みあがった。

(ユリスのやつ、いずれ視線で人が殺せるんじゃないか!?)

そう思ってしまうほど、ユリスの眼力は言葉よりも強くバランを制するのだ。

コクコクと必死に頷くバランをやっと信用し、前に向きなおったユリスは続きを促す。

「……それで？」

今この瞬間どんな顔をしているのか、バランには想像もできなかった。

もっとも、少年はなにも気づかなかつたようで、あたりまえに言葉が続ける。

「僕がいたところからは、兄さんが見えていて、でも兄さんはまだ僕を見つけていなくて。捜しているときに、知らない男の人が兄さんに話しかけて……」

「そのまま、連れていっちゃったの？」

もう一度、少年は頷いた。

ユリスは振り返り、今度は穏便にバランと目を合わせる。

「なるほどな、だから連れ去りだと言っているのか」

納得したように呟いたバランに、ユリスも頷いた。

先に訪れた二軒では、どちらも「子どもが帰ってこなかった」という話であった。しかし、本来ならばそれだけでは「連れ去られた」ことにはならないのだ。こうした目撃証言がなければ。
「――ちょっとあなたたちっ、一体何者ですか!？」

不意に横から声が飛びこんできて、ユリスは反射的に一步退いた。

後ろにいた balan は気配に気づいていたから、ユリスの背中を受けとめ、声とともに飛びこんできた人物の手もとに目を向ける。

ナイフが握られていた。

ユリスはそれをよけたのだ。

女性は見るからに、少年の母親のようだった。

ユリスは一瞬だけ、

(あらっ、熟女!?)

と瞳を輝かせたが、すぐもとどおりになったのは、その人があまりにもやつれていたので。そして、目つきが尋常ではなかった。

通りがかった人々も、それを感じてか少し離れた位置から見守っている。

「上の子だけでは飽きたらず、下の子まで連れていこうっていうのっ？」

「母さん違うよっ、この人たちは……」

錯乱状態の母親を、なんとかなだめようとする少年。

しかし母親は耳を貸さずに、ひとり喋りつづける。

「この町では男児がいなければ生きていけないの！ 炭坑に女は入れないのよっ。なんなの？ そんなに私に死んでほしいの!？」

ちらりと、balan がユリスに目配せをする。

軽く頷いたユリスは一度 balan の後ろにさがると、

「落ちついてくれよ、奥さん」

喋り出した balan が注意を惹きつけているあいだに、そっと母親の後ろ側へとまわりこんだ。

「俺たちはあんたの子どもを奪いに来たのではない。取り返すために、話を訊きに来たんだ」

「嘘よっ、そうやって騙すつもりでしょう!？ そんなに大きな武器を背負って……っ」

母親はすっかり balan の策にはまっていて、ユリスの動きには気づいていない。

しかし、母親のすぐ傍にいる少年は、母親を心配そうに見あげながらも、ユリスにも不思議そうな視線を向けていた。それがユリスの狙いであった。

ユリスは身振り手振りで、母親に気づかれずにこっそり自分の傍に来るよう、指示を送る。賢い少年はすぐに理解し、小さく頷くと、balan から隠れる振りをして母親の後ろにまわりこんだ。

ユリスは心のなかで褒めてやる。

(うまいうまい！)

立ちまわりは balan よりもうまいくらいだ。

逆側から少年の動きを確認していた balan は、次の言葉へと進んだ。

「嘘じゃない。俺たちは請負者だ。だからこの大剣は、俺の商売道具みたいなものさ。許可証を

見せようか？ 今朝仕事を受けたばかりだ、なんなら仕事屋(セトゥリカ)のおっさんに確認を取ってもらってもいい」

「えっ……？」

バランの態度があまりにも堂々としているからか、頭から疑っていた母親の顔色が少し変わった。

少年を腕のなかに収めたユリスが合図を送ると、バランは首に提げていた許可証を外して、母親の足もとへ投げてやる。

様子を見守るユリスは、口もとに自嘲気味な笑みを浮かべた。

(普通の請負者なら、あの人拾う隙に取り押さえるところなんだけどね)

しかしバランとユリスは、決してそのような方法を選ばない。

信じているのは、人の心根。

なるべく傷を残したくなかった。

母親が許可証を拾いあげるのを、辛抱強く見守る。

(さあ、どう出る？)

バランとユリスの視線が、ちょうど母親の上で交わる。

そのなかで――

「こっ、こんなの偽物だわ！ どうせ、私たちが本物を見たことないからって、それらしい物を用意してあるのよっ」

ふんと、母親は手のなかのナイフを振りまわした。こうなったときのために、少年を避難させておいたのだった。

バランは「まいった」と肩をすくめるが、それでも余裕の表情をしているのは、勝算があるからだ。

(早く来いよ、精神安定剤さん)

心のなかで呼びかける。

時間稼ぎは、人を待っているため。他人の声は届かなくても、届く声は必ずある。

次の展開に向けて、どの反応がきてもすぐ返せるよう、つま先に力をこめた。バランの耳に、「――おーいっ」

やっと、飛びこんできた声があった。

それが待ち望んでいたものであったから、バランはそっと息を吐く。

「そのふたりは本物の請負者だ！ みんな協力してやってくれ～」

みな顔に向けた視線の先に、見えたのは仕事屋のエクラルだ。

バランは気づいていたのだ。先ほどの自分の言葉を聞いて、呼びに向かってくれた町人がいたことを。見ていた者たちもみな、この母親の気持ちをよく理解していることを。

「あ……」

全力疾走してきたせいかわで息をするエクラルの顔を見て、母親もやっと信用したのだろう。手からナイフが滑り落ち、乾いた音を立て地面に転がる。

バランが素早い動作でそれを拾いあげるのと、ユリスが少年を抱きしめていた手を放したのは

、ほとんど同時のことだった。

「お母さん！」

走り出した少年が母親に抱きついていくと、母親の表情に光が戻る。まだ希望は残されていることを、思い出したのかもしれない。

バランとユリスはエクラルの傍まで行くと、駆けつけてくれたことにお礼を述べた。それから、

「あんたも、ありがとう。助かったよ」

バランが顔を向けたのは、さらにあとからやってきたひとりの青年だ。仕事屋を呼びに行ってくれた者だった。

ユリスと同じくらいの歳だろうか、青年は気恥ずかしそうに頭を掻いたあと、すぐに表情を戻して訴えてくる。

「みんな、気持ちは同じなんだ。将来この町を支えることになる子どもたちが、わけもわからず奪われていくのは本当に困る。どうか、なるべく早く解決してほしい」

それを聞いていた周りの者たちも、口々に声を発した。

「そうだ！ 俺たちの宝を取り返してくれ」

「石炭があっても掘り手がいないんじゃ、話にならねえんだっ」

みな必死さが伝わってきて、バランとユリスは圧倒されてしまう。

(これは、のんびりなんて言ってられないわね)

(みんな美少年が大好きなんだな！)

顔を見合わせて、頷いた。

そこに、やっと息を整えたエクラルが声を張りあげる。

「そうだみんな！ このふたりはとても優秀なSSランクの請負者だ。きちんとした情報を伝えれば、必ず事件を解決してくれる！ なにか情報を持っている者はここに集まってくれ!!」

町を支える仕事屋の、その一声は効果絶大で、おかげでふたりはそれ以降移動しなくてもすんだ。まだ話を聞いていなかった他の被害者家族も、この場に集まってくれたのだ。わざわざ呼びに行ってくれた者までいた。もちろん、この騒ぎのきっかけをつくった母親も、落ちついたあと謝罪し、話を聞かせてくれたのだった。

夕方、ふたりは町の中心部にある宿屋にいた。

宿代節約のため、ふたりはいつも同じ部屋に泊まる。しかもベッドはひとつだ。お互い、恋愛対象にはならないという絶対の自信があるからこそ、可能な節約方法だった。

いつもどおり部屋の前にユリスを待たせて、バランだけが先になかへと入り、備えつけてあるものを確認する。こぢんまりとした部屋のなかには、ベッドと小さな丸テーブル、そして壁に掛けられた一枚の絵画以外はなにもなかった。

(――いや、絵があれば充分か)

バランはベッドのそばにある絵画に近づいていくと、そっと外してベッドの下に隠した。

そう、バランがいつも先に部屋に入るのは、絵画をユリスに見せないようにするためだった。ユリスは重度の絵画アレルギーなのだ。

(まったく、セルトがアホなことばかりするから、こんな面倒なことになるんだ)

今さらと思いながらも、バランは心のなかで愚痴を言った。

セルトーセルト＝テックスとは、ふたりと同じように世界を放浪している画家の名である。美しいものが大好きで、美しいもののためなら犯罪だろうがなんだろうが気にせずおこなってしまう、ちょっと困った性分の変人だ。そんな彼が特に気に入っているのがユリスの外見で、一時期は絵のモデルをしてほしいとユリスを散々追いかけてまわしていた。それでも最近はおとなしくなったのだが、ユリスの絵を勝手に描いては人にあげたりしているようで、そのせいで事件に巻きこまれたことも何度かあるのだ。

(おかげでユリスは、絵画を見ると拒否反応を起こすようになっちゃった)

どんな絵画でも、見るととりあえず燃やしたがる。

だが当然、それを弁償するにもお金がかかるのだ。だからバランは、先手を打って絵画がユリスの目に触れないよう、いつも気を使っていた。

少し離れた位置からベッドを見て、絵画も額縁も完全に見えないことを確認したバランは、
「ユリス！ 入っていいぞ」

やっとユリスを呼び入れる。

待ちかねたとばかりに飛びこんできたユリスは、ベッドに直行するとすぐに、地図やメモ紙をその上に広げた。そして自分は、本来座る場所ではないテーブルの上に、脚まであげて器用に座りこむ。ベッドの残りのスペースは、バラン用だからだ。かといって、床に座るのはプライドが許さないため、大抵はこういう位置取りになるのだった。

バランが大剣を壁に立てかけ、予定どおりベッドの隅に寝っ転がったのを確認してから、ユリスは情報を整理するために口を開いた。

「結局、いなくなった子どもの共通点って、『十二歳前後の健康な男児である』ってことだけだったわね」

残念そうに告げるユリスを見あげて、バランは大真面目に頷く。

「そうだな。全員が美少年だと確認できなかったのは、本当に残念だ」

バランの手もとにある行方不明の少年リストには、『○』『×』『?』と三種類の記号が踊っていた。

「あんたが真剣な表情で『お子さんは美少年ですか!?』って訊くから、みんな戸惑いつつも真面目に答えちゃってたじゃない。かわいそうに……」

それでもユリスがとめなかったのは、それを乗り越えないと話が進まなかったからだ。

「むしろかわいそうなのは俺のほうだ！」

「そうね、あんたの頭はかわいそうよね」

否定するのも面倒になったユリスが告げると、バランは「むむう」と押し黙った。打つ手がなく少しイライラしているユリスを、見抜いているのだ。

バランはベッドの上でむくり身体を起こすと。

「明日は、無事な子どもたちの様子を調べてみたらどうだ？ いざとなったら俺が全員まとめて保護してもいい。事件を早期解決するのはもちろん大事だが、これ以上被害を広げないことも大事だろう？」

ふたりの脳裏に、昼間見た人々のすがるような瞳が浮かびあがる。

「――そうね」

バランの下心は気になるが、言うことはもっともだ。

「次に狙われる可能性のある子だって、当然そのなかにいるんだものね」

ユリスは改めて頷くと、テーブルからおりてベッドの上の紙類を片づけはじめる。

「そうと決まれば、さっさと寝るわよ。あたしはいくら寝たって足りないんだから」

苦笑しながらバランもそれを手伝うと、一度ベッドからおりてユリスを奥に行かせた。壁際にベッドがある場合、いつも壁に近い側がユリスの定位置だった。なぜなら、ユリスのほうが早寝遅起きだからだ。

寝る気になったあとのユリスは、かなり早い。

バランが枕もとの電灯をつけたり、部屋の電灯を消したりしているうちに、もう寝息が聞こえてきた。

(こいつはもし槍が降ってきていても、平気で寝ていられるんじゃないか)

本気でそう思う。

あるいは、好みの熟女が大量に空から降ってきても。

本当に眠いなら寝ていられるのだろう。

ひとり想像して、バランは笑ってしまった。

「……俺にはきっと、無理な話だな」

呟いてから、ベッドのあいている場所に収まる。

(もし美少年が大量に降ってきたら――)

寝入るまでの妄想は、バランの大事なストレス解消タイムであった。

脳裏に大量の美少年を思い浮かべて、バランは心のなかで飛びあがる。

(俺はきっと、近づけないな)

口ではなんとでも言えるが、実際にそうになったら。

自分は遠くから眺めるだけで、精一杯なのではないかと思った。

男が好きだ。少年はもっと好きだ。美少年ならなおさら大好きだ。

しかしその感情の行き着く先はあくまで、愛でたいというものであって、触れたい、触れてほしいという類のものではなかった。言ってしまうえば、それは愛ではないのだろう。

(だから、探している)

それ以上に愛しく思える『運命の人(ラーティフェン)』を。

(だから、許せない)

そうなるかもしれない美少年たちを、さらっているやつら。

(一体なんのために?)

考えてみても、 balan にはろくな理由が浮かばなかった。奴隷として売り払われるか、はたまた大人のおもちゃとして弄ばれるか……

(ううっ)

妄想すればするほど、深みにはまってゆく。

どうやら今日は、簡単には眠れなさそうだ。

balan はそっと身体を起こし、眠れて羨ましいビームをユリスに送ってから、念のため起こさないよう慎重にベッドを出た。下手なことをして、『身の危険』だと勘違いされては困るからだ。

鍵を手に取り、そのまま部屋の外へと向かう。

小さな町にある宿屋は、それだけでは稼ぎが足りないため、一階で酒場を開いているところが多い。今回ふたりが泊まっている宿屋も同様で、balan はそこに向かったのだった。

(酒場はいい)

気が楽になる。

もし酒に酔って正気でなくなったとしても、そこに少年や美少年が現れることはまずないからだ。

balan は酒に弱かった。弱いからこそ、もしそんなことが起こったら醜態をさらしてしまうだろう自分を、よくわかっていたのだ。

階段をおりると、誰もいない受付カウンターの前を歩いて奥の扉へと向かう。宿屋側の入り口はもう閉めているようだった。

店の名前だろうか、『アスティナ』と書かれた扉を押し開けると、強い酒の匂いが balan の鼻にも届いた。

「――おや？ いらっしゃい」

カウンターのなかには、部屋を借りるときに対応してくれた初老の男性がいた。宿屋の店主が酒場のマスターも兼任しているらしい。一瞬だけ眼鏡の奥の目を細めたのは、balan がユリスと同じ部屋に泊まっていたからだろう。

(ケンカして部屋を追い出されたとでも、思われたか)

勘違いされるのはいつものことであつたから、balan は心のなかでだけ笑うと、店内をぐるりと見まわした。カウンター以外には丸テーブルが四つあるだけの小さな店だが、雰囲気は悪く

ない。すでに酔っばらっている客たちもみな、顔見知りであるのかテーブルの別なく騒いでいた。

(もっとなにか話が聞ければと思ったが……俺の入る隙はなさそうだな)

夕方での調子なら、朝が早い分夜も早いのだろうと諦める。

balan は、カウンター席のいちばん奥に座った。

(ん?)

すると、カウンターの奥の壁に貼られていた、翼を持った人間を描いた大きな絵画が目飛びこんでくる。

(そういえば、町の看板にもいたな。翼を持った人間)

そして今、ユリスがぐーすか寝ている部屋のなかにあった絵も、思い返してみれば同じ絵だった。

(この町の守り神かなにか?)

balan がぼんやりと考えているあいだに、マスターが近づいてくる。

「なににしますか？」

声をかけられたら、絵のことなど一瞬で忘れてしまった。

「そうだな……」

カウンター上の小さなメニュー表に、子どものように光らせた目を落とす。

(思い切り酔って寝てしまいたいところだが――)

この事件が解決するまでは、やはり自粛するべきだろう。また、ユリスは酒が嫌いで、翌朝も匂いが抜けていないと取りあってくれないから、それも困るのだ。

あれこれ考えると、結局は選びきれずに。

「なんでもいいから、軽いのをつくってくれないかな」

balan はそうお願いした。

マスターは愛想よく頷くと、慣れた手さばきでグラスに液体を注いでゆく。

「はい、どうぞ」

出てきたグラスには、無色の液体が入っていた。

balan が思わず鼻を近づけると、酒以外の匂いはしないようだった。

「そんなに警戒しないで、飲んでみてくださいよ」

まだ balan の前にいたマスターに笑われて、グラスを傾ける。

「……あまっ」

その酒は甘かった。確かに酒の味もするのだが、砂糖でも入っているのか甘みのほうが強い。

「それは私からの奢りです。疲れを取るには甘さがいいと聞きましたので」

マスターはそうにこりと笑ったあと、つけ加えた。

「あ、もし甘いのが苦手でしたら別のものと取り替えますが……」

明らかに、 balan の顔色を窺いながら。

(そういうことか)

balan は納得すると、素早く後ろを振り返ってみる。

みな騒ぎながらもやはりバランのほうを見ていたのか、不自然に身を正したのがおかしかった

そう、昼間の騒ぎのおかげで、バランとユリスはすっかり有名になってしまっていた。本来ならば旅人に絡みたい酔っぱらいたちが我慢しているのも、捜査の邪魔をしないため。ふたりにそれほどの期待を寄せているからなのだ。

マスターのほうに向きなおったバランは、笑顔を返す。

「いや、これはこれで美味しいよ、ありがとう。――あと、俺とユリスはケンカしたわけではなくて、ユリスが先に寝てしまっただけだから安心してくれ」

言ってみたら、前からだけではなく後ろからも安堵の息が聞こえ、バランはどうしても浮かんでしまう笑みをグラスで隠した。

「そ、それはよかった……実は少し、心配してしまいました」

マスターは正直に告げると、心から安心したのかやっとバランの前を離れる。酔っぱらいたちも次々に注文を言い出し、途端に忙しそうだ。

その様子をぼんやりと眺めながら、バランはちびりちびりと酒を口に運んだ。

(人は、本当にあたたかい)

ユリスと旅をするようになって、バランはそう思えることが増えた。ひとりで旅をしていた頃には、気づかなかった感情だ。

「あんたってさ、本当はやさしくせに、なんでやさしくない振りしてんの？」

初めて出会ったそのとき、ひと目で見抜いたユリスが、バランを自由にした。

正直に生きて、傷つきそうになっても、なんとかしてくれる相棒ができた。性別も年齢も超越した、大事な存在である。

(ちゃんとわかっているさ、ユリス)

たとえさらわれたのが美少年でなくても。ことの大きさは、よくわかっている。これだけ多くの人を苦しめ、町の未来までも脅かしているのだから、許されるはずがない。

(このあたたかさを、無駄にはしない)

手もとのグラスを傾けて、氷を鳴らした。

――同時に、外に続いているほうの扉が鳴った。誰かが入ってきたのだ。

バランは特に気にせず飲んでいたのだが、周囲の雰囲気が変わったことに気づいて振り返る。

(おっ?)

扉のところに立っていたのは、こんな場所には来ないはずの子どもであった。だからみな固まっていたのだ。

「どうしたんだい？」

マスターがカウンターを飛び出し、相手をしに行く。未成年を店に入れると問題になるのは、この国も同じらしかった。

みなそちらを向いているのをいいことに、バランもその子どもを観察する。

歳は十二・三だろうか、背は小さく顔も幼いが、その瞳だけはなぜか妙に大人びて見えた。頭には大きな帽子をかぶり、男ものの服を着ている。

(おっ、なかなかかわいいじゃないか)

思わずやましいことを考えてしまったバランの耳に、少年の言葉が届く。

「あの、人を捜しているんです」

遠慮がちな小さな声だった。それから少年はキョロキョロと店のなかを見まわす。

一瞬だけ、バランと目が合った。

(ん?)

その瞬間、バランはあることに気づいてしまった。

「ここにはいないようです。失礼しました」

少年もバランを見てなにか感じ取ったのか、慌ててマスターに頭をさげると逃げるように出ていく。

バランはすぐに立ちあがると、まだ扉の前にいるマスターに問いかけた。

「今の子は、この町の子かい？」

「いやあ、あんなきれいな顔立ちの男の子は初めて見ましたよ」

「わかった。――ちょっと出かけてくる」

それだけ告げると、マスターの返事は訊かずに酒場を飛び出した。

(酔っていないくて、よかったな)

逃げた少年の後ろ姿を捜しながら、 balan は自嘲気味に笑う。

もし酔っていたら、気づかなかったかもしれない。いや、こうして気づいたところで、それが事件解決の鍵になるのか、本当のところは balan もわからなかった。

それでも、なにもしないよりはマシだと思ったのだ。

いつも背負っている大剣がないせいか、背中に寒さを感じながらもあちこち走りまわって、 balan はやっと目的の少年を見つけた。どうやら向こうもまだ、人を捜しているようだった。

(さて、どうするか)

いきなり声をかけたら不審人物だと思われそうだが、だからと言っていきなり捕まえるわけにもいかない。ここはやはり、正面から行くしかないだろう。さいわい人影のない路地裏だ、騒がれてもさほど害はない。

心を決めた balan は、わざと道のまんなかになら飛び出すと少年に呼びかけた。

「おい坊主！ 最近起きている事件のことは知っているだろ？ あまりうろうろしていると危ないぞっ」

背中を向けていた少年は一度びっくりと飛びあがると、おそろおそろ振り返る。その表情には、恐怖の色が見て取れた。

balan は一歩ずつゆっくりと近づきながら、笑顔を浮かべて近づいてゆく。

「逃げるなよ。おじさんは悪い人じゃない、その事件を解決しに来たんだ」

少年の脚はガタガタと震えていて、逃げるどころではないようだった。

(そんなに怖いか？ 俺の顔)

ショックを受けつつも、歩くことはやめない。どうしても確かめたいことがあったのだ。

やがて少年の瞳に、気を取りなおしたかのような色が見えた。そして向こうからも、こちらに向かって歩いてくる。

(わかってくれたのか？)

balan がそう疑った瞬間に、少年が駆けこんでくる。

「おいっ！」

キラリと光る手もと。

少年は小さなナイフを手にしていた。

(まったく、なんだよ！ あの母親もこいつも)

まさか一日に二度ナイフで襲われるとは思わなかった。

仕方なく balan は、ナイフを持つ少年の手首をうまく捕まえると、身体を入れ替え後ろにまわりこむ。

「えっ……!？」

声をあげたのは少年だ。だが、咄嗟だったから声をつくる暇がなかったのだろう、それは明らかに少女のものであった。

(やっぱりな)

それがバランの確かめたかったこと。少年好きを豪語するバランだからこそ、目が合っただけで見抜けてしまった。この少年は少女であり、声が小さかったのもつくり声だったからなのだと。

そして、なぜ男装をして町をうろついているのか、考えてみれば答えはすぐに出た。

「いいか、もう一度言うぞ？」

ナイフを振りまわせないよう少女の手首をつかんだまま、バランは冷静に少女を説得する。

「俺は子どもをさらっている犯人ではない。おまえが犯人を捕まえようとそんな格好をしているのなら、俺とおまえは仲間同士のはずだ。違うか？」

「あー」

バランの言葉から、男装が見破られていることを悟ったのだろう、身をよじった少女は躊躇いがちにバランの顔を見あげた。

(なるほど、少女だと思って見ればずいぶん整った顔をしているな)

その瞳がやけに大人びて見えたのは、きっとそのせいだ。

バランがそんなことを考えているうちに、少女の手からナイフが落ちた。

ひとつ息を吐いて、バランは手を放してやる。

それでも少女は、バランのほうを向いたまま動こうとはしなかった。

(なんだ?)

視線が気になる。

代わりにナイフを拾いあげたバランは、それが折りたたみ式のものであると気づき、刃の部分を柄側に折ってしまいこむと、少女の手に握らせてやった。

「ほらよ」

少女は素直に受け取ったが、まだ視線は外さない。子ども特有の、まるで遠慮のない見方だった。

「おい、俺の顔になにかついているのか？」

美少年に見つめられるならともかく、耐えきれなくなったバランは口を開いた。

すると少女は、まだ鋭さの残る声で、

「あなた、本当に犯人ではないのね？」

「ああ」

「城の者でもないのね？」

「はあ？ あたりまえだろ！」

なぜここに『城』などという単語が出てくるのか、思い至らなかったバランは思わず声を荒げてしまった。また怖がらせたかと自分の口を塞いだが、少女はきょとんとした顔をしてバランを見あげただけだった。

(だ、大丈夫か……)

むしろ少女は、そのことによってバランのことを認めたらしい。

「いきなり襲ったりして、申し訳ありませんでした」

これまでの態度から一変して、丁寧に頭をさげてきたのだ。

「先ほど酒場でお見かけしたときも、他のかたとは雰囲気はまったく違っていたものですかから……」

「余計に勘違いした、ってわけか」

「はい、すみません」

何度も頭をさげるその少女の仕草は、今日会った他のどの子どもともまるで違う、やんちゃさの欠片もない優雅なものだった。

(一体どこのお嬢さまだ?)

もしや鉱山の持ち主辺りだろうか。

色々と考えをめぐらせながらも、バルンは厳しく言い放つ。

「囷になって犯人を捕まえるつもりだったんだろうが、あんたみたいなお嬢さんには無理だ。危険すぎる。子どもはおとなしく家に帰って寝てな」

少女は悔しそうに唇を噛む。

しかしバルンに、譲る気はまったくなかった。誰だって余計な犠牲は出したくない。

それからバルンはおもむろに振り向くと、路地裏の陰に向かって声をかけた。

「おいユリス! どうせ来てんだろ? こいつを家まで送ってやれ」

そこから、ひょいとユリスが顔を出す。

バルンの性格からして、おそらく眠れないだろうと予想していたユリスは、バルンが勝手に無茶をしないようこっそりと見張っていたのだった。

どこか恥ずかしそうに出てきながらも、悪態は忘れずにつくユリス。

「嫌よ面倒くさい。あたしが熟女好きなの知ってるでしょ。なんでそんなガキなんか」

「だから頼んでんだろうが」

相手が本当に熟女だったら、あとが怖くて頼めない。なにせ、戻ってこないかもしれないのだ。逆にバルンが行くのも、世間的に見れば怪しくて仕方がないだろう。だからユリスに頼むしかない。

バルンが苦笑しながら告げると、ユリスはその意図を正確に取り、

「じゃああたしが戻ってくるまでに、ひとり引っかけといてよ」

仕方ないと呟きながらも、了承したのだった。

――しかし。

「すみません。わたくしの家はここからでは遠いのですから、すぐには戻ってこれないと思いますよ」

待ったをかけたのは、意外にも少女自身。

「え?」

声をそろえて訊き返したふたりに、少女は軽く頭をさげる。それは謝罪のためのお辞儀ではなく、あいさつのためのお辞儀だった。

「わたくし、アスティナ＝クーフォシアと申します。城から参りました」

(ああ――)

途端に、バランは納得した。

宿屋の下の酒場には、この国の姫の名前がつけられていたのだと。

ふたりがアスティナを連れて酒場に戻ると、マスターは気を利かせて他の客を帰してくれた。

「悪いね、マスター」

恐縮して頭をさげたバランに、

「どうかお気になさらずに。事件の解決に繋がることならば、我々はなんでもしますよ」

笑顔で返してくるマスターは、心強い。

そこでバランは、アスティナをマスターの前に立たせると、頭の上に載っている大きな帽子を外してやる。

するとアスティナの豊かな金髪が、閉じこめられていた帽子から惜しげもなくこぼれ落ち、どこか中性的に見えていた性別を確かなものに変えた。

「マスター、この顔に見覚えは？」

「えっ？」

バランの問いが予想外だったのか、マスターはまず目を丸くする。それから、しっかりと眼鏡を掛けなおすような仕草をして、アスティナを見おろした。レンズを隔てた目が、ますます大きくなる。

「まっ、まさか……アスティナ姫!？」

「はい、わたくしはアスティナ＝クーフォシアです」

「こりゃ驚いた！ この酒場は姫さまが生まれた年に改装して、『アスティナ』と名を改めたのです。まさか、まさか姫さまご自身に来ていただけるとは……っ」

余程感激したのだろう、マスターは眼鏡を上の方によけて泣き出してしまった。

「あらら」

酒場の名前に気づいていなかったユリスは、肩をすくめ手をあげたあと、

「喜びに浸りたいところ悪いのだけど、マスター？ この子、今日はここの宿屋に泊まることになると思いますの。部屋の準備をお願いできないかしら？」

仕事屋(セトゥリカ)のエクラルを震えあがらせた笑顔で促した。

(ほら、また目が笑っていない)

きっと内心苛ついているのだろうと、バランにはわかる。それでもユリスがそれなりに丁寧な対応をしているのは、少なからず世話になる相手だからだ。逆に、世話をかけられる相手には手厳しい。

マスターが宿屋の店主の顔になり、上等の部屋を用意するため酒場を出て行くと、

「さてと。それじゃあ世間知らずなお姫さま？ なんてこんなところをうろうろしてるのか、話を聞かせてもらおうじゃないの」

ユリスはいち早く傍にあった椅子に座りこむと、睨むようにしてアスティナを見あげた。

しかし意外にもアスティナは、怖がることなく頷くと、ユリスの隣の席に座りこむ。

「あなたがたが協力してくださるのであれば、なんでもお話しいたします」

(ほう……)

バルンは思わず胸の内で感心した。

なかなかどうして、肝が据わっているらしい。たったひとりで人さらい犯を捕まえようとしただけはあるようだ。

「そういえばあんた、城がどうか言っていたが、今回のことで城は動いているのか？ 美少年が行方不明になる事件は、なにもこの町だけではなく国中で起こっていると聞いたが」

ふたりと向かい合うように座りながら、バルンは口を開く。

それはエクラルが言っていたことだ。だからなかなか請負者(カーレリカ)が流れてこないのだと。

「はい、各地に調査員を派遣して、被害状況を調べております。城内には対策室も設けられています――」

アスティナはそう淡々と答えたものの、様子がどうもおかしい。急に俯いて、唇を震わせているのだ。

バルンとユリスは一度目を合わせた。

この違和感は、一体なんなのか？

眉間をよせて、ユリスは考える。

(バルンに捕まったとき、この子が訊いたことはふたつ)

『あなた、本当に犯人ではないのね？』

『城の者でもないのね？』

あのときは、陰で聞いていたユリスにも意味がよくわからなかった。バルンと一緒に心のなかで声をあげていたほどだ。だが今、アスティナ自身が城から来たのだとわかると、事情は変わってくる。

「ねえ、あんたもしかして、事件に城が関わってると思ってるの？」

「あ……っ」

ユリスの問いに、アスティナは大きく身を震わせた。答えは明らかだった。

バルンは納得する。

(なるほど、それで確かめようと思ったわけか)

これがただの事件なら、解決は人任せでいいのかもしれない。しかし、身内が関わっているかもしれないとなれば、気になるのは当然と言えた。どんなに信じていても――いや、信じているからこそ、自らの手で確かめたくなるだろう。

(相手がユリスなら、俺だってそうしている)

(バルンだったら拷問して吐かせてやるわ)

ふたりはそれぞれに思っ、もう一度目を合わせた。

ユリスはさらに、アスティナの真実に切りこんでゆく。

「それだけの行動力を見せるってことはどうせ、城というよりも家族そのものが絡んでるんでしょ？」

普段は城から一步も出なそうな姫が、ひとりでこんな遠くまでやってきているのだ、余程の理由があるのだろう。

そう予想したユリスは、見事に当たっていた。

アスティナは不思議なものを見るような目でユリスを、そしてバランを見る。

「どうして……なぜそんなにもわかるのです？ あなたがたは、本当に城から来たのではないのですか？」

「違うって言ってるでしょ！」

「俺たちは請負者だ。いろんな場所へ行きいろんな人と出会い、いろんな経験をしている。洞察力がなければ騙されて終わりなんだよ、姫さん」

城の外に広がる厳しい現実を突きつけられて、アスティナは小さく息を呑みこんだ。

それを見てユリスは、心のなかで呟く。

(ま、無理もないわね)

こんな言葉を浴びせる人間が、『姫』の傍にいるとは到底思えなかったのだ。自分たちと出会えたのは、アスティナにとって幸運なことだったのではないかと、勝手に考える。

「それで？ 誰が問題なのよ。今起こってる事件に繋がりそうなら手伝ってあげるから、正直に話さないよ」

「は、はいっ」

一体どちらが姫なのかと、苦笑しながらもバランは耳を澄ませた。

「わたくしには十二歳になる弟――ヴェクフィルがいるのですが、実はそのヴェクが、原因不明の病に冒されているのです」

「へっ？」

次に驚いたのは、ふたりのほうだった。

アスティナはテーブルの上で両手を合わせ、強く握りしめている。

「通りすがった魔術師(フェセレン)が、それは心臓に掛けられた呪いだと言いました。ヴェクが城の祭壇にあった有翼の実(ソアリナ)を、誤って割ってしまったから」

アスティナの言葉は、予想外に難解であった。一体なにがどう繋がっているのか、この国の出身ではないふたりにはよくわからないのだ。おまけに魔術師なんて言葉が出てきて、ますますふたりをげんなりとさせる。

それでも、

(ん……待てよ?)

『有翼の(ソア)』という言葉から、バランは思い出す。この町に来てから、何度も翼を持った人間の絵を見たこと。

「おい姫さん。もしかしてこの国の神さんは、翼を持った人間の姿をしているのか？」

姫であるアスティナもそれを語るなら、町の神ではなく国の神なのだろう。

バランのその予想は当たっていたようで、アスティナはこくりと頷いた。

「そうです。そして有翼の実は、神の心臓。ですから、それを壊してしまったヴェクは……」

呪われた。

アスティナはそう言っているのだ。

しかしユリスにとってそれは、あまりにもバカバカしい話に感じられた。テーブルの上に頬杖

をついてから応える。

「それで？ 王が代わりの心臓を手に入れるために、この事件を起こしてるかもしれないと疑って、こんなところまで来たわけ？」

やる気のなさそうな態度を取っていても、言葉は的確だ。

「ええ……お父さまもお母さまも、世継ぎであるヴェクを大変かわいがっておりました。このひと月もずっとヴェクにつきっきりで。わたくしがこうして城を抜け出している、まったく気づかないような状態です」

だいぶ落ちついてきたのか、アスティナは淡々と語る。口ぶりを見るに、そのことを恨んでいるわけではなく、純粹に弟のことを心配しているようだった。

「なるほど、だったらそれくらいしかねないな……」

納得の言葉を吐きながら、バランは考える。

(嫌な話だな)

綺麗事など言うつもりはさらさらしない。しかし、それが本当であれば許しがたい行為だと感じてしまう。ましてや、健康な心臓を手に入れたところで、ヴェクフィルの病気が治る保証はどこにもないのだ。他人の心臓を完璧に移植できるほど、この国の医療が進んでいるとは到底思えなかった。また、それが万一本当に呪いであるのなら、そんなことをしても無駄かもしれない。

(そんな不確実なものに、俺の美少年たちの心臓を使うなんて、許せんっ！)

心のなかで憤るバランを知ってか知らずか、別の方向から思考を巡らせていたユリスが口を挟む。

「けどさ、だったらそんなにたくさんの心臓はいらないんじゃないの？ いろんな町で似たような事件が起こってるんでしょ？ あたしはどうも違う気がするけどなあ」

あまり頻繁に試していたら、それこそヴェクフィルの身体が持たないのではないか。

ユリスはそう考えたのだ。

それにはアスティナも同意して、

「ええ、わたくしとて、絶対にそうだと思っているわけではございません。だからこそ、ちゃんと確かめたかったのです」

真剣な瞳から、ひと筋の光が落ちた。

「あっ、すみません……」

まったく無意識のことであったのか、慌てて顔を拭うアスティナ。

——そこに、外から声が聞こえてくる。

「ティナさまー、どこにいらっしゃいますか～？」

「まあ！ テフシャだわっ」

ひとりごとのように小さく叫んだアスティナは、突然立ちあがると扉のほうに向かっていった。

「テフシャ！ ここよっ、こっち！」

どうやら従者がいたらしい。

そこでふと、バランは気づく。

(なるほど、人を捜していたというのは本当だったのか)

どうりで酒場になど顔を出したはずだ。ただ囿になりたいだけならば、あの行為はまったく不要だった。むしろ正体がばれる可能性がある分、危険だったのだ。

やがて、開け放たれたままの扉から、ひとりの長身女性が姿を現す。四十代前半くらいだろうか、真っ直ぐに長い黒髪が印象的な、きつい目をした美女だった。

「あ」

その姿をひと目見た瞬間、バランの口から思わず言葉が漏れたのは――

「――っお姉さまと呼んでもいいですか!？」

(ああ、やっぱり.....)

恐ろしいほどの反応速度で女性に近づいたユリスが、その両手を握りしめている。

そう、その女性はいくらにも、ユリスの好みであったのだ。

「はっ? なんだおぬしは.....」

酒場に入るなり突然食いつかれて、目を白黒させる女性。

ユリスはその場で一回転してポーズを決めると、自己紹介を始めた。

「あたしはユリス＝ネーロディア! 旅の請負者です。で、あっちにいるのは下僕のバラン＝バラメン」

「誰が下僕だ、誰が」

指を差されたバランは文句を言いつつも、小さく頭をさげた。

それを見届けた女性は、戸惑いながら横のアスティナに視線を向ける。

「大丈夫よテフシャ。彼らにはわたくしが姫だとばれているの」

その説明に一瞬だけ目を見開いた女性――テフシャだったが、すぐに表情を隠して、

「私はアスティナさまのお目付役をしておる、テフシャじゃ」

堂々とした言葉遣いとは裏腹に、深く礼をした。光沢のある美しい黒髪が揺れ、熟女だけが持つ独特の色香をまき散らす。その優雅な仕草は、アスティナと違(たが)わぬほど洗練されていた。

(まずいな、ますますユリス好みだ)

案の定、「きゃあーっ」と語尾にハートマークがついていそうなユリスの声が聞こえた。

ユリスはもう一度テフシャの手を取ると、

「テフシャお姉さまも、事件の真相を確かめに来たんのですの？」

アスティナに対するものとはまるで違った態度で接する。普段はサド傾向が強いユリスだったが、好きになった相手に対してはマゾになるのだ。

「いや、私は危険じゃと反対して.....と、おぬしはなんなのじゃ! いちいち私にくっついてくるな!」

そんな怒声も、ユリスにとってはご馳走で、

(この素直な反応がたまらないわ～)

心のなかでにやつきながらも、おとなしく手を放した。それから改めてテフシャを見あげる。どうしてこうして、見れば見るほど好みなのだ。

(こんなちんちくりんな子より、テフシャお姉さまのほうがずっと姫っぽいわね)

いや、姫というよりは王妃——それよりも、女王か。

ある程度歳を重ねているからこそ醸し出される気品と、すべてを見通すような鋭い瞳は、ユリス自身とても憧れているものだった。

そんなユリスの熱烈な視線の先で、あからさまに嫌そうな顔をつくるテフシャ。

どちらの機嫌も損ねてはならないと思ったのか、アスティナがふたりのあいだに飛びこむ。

「あ、あのっ、テフシャ！ このおふたりは、わたくしに協力してくれると言っているの。どうか一緒に話を聞いてちょうだい」

「アスティナさま!? まだお帰りにならぬおつもりかっ？」

頭上から怒鳴られてもアスティナは怯まず、テフシャの手を取ると、バランだけが残っているテーブルのほうへと引っぱっていく。

その姿を見て、ユリスは納得した。

(なるほどねえ)

アスティナが自分の睨みにも動じないのは、日頃から鍛えられていたからなのだろう。テフシャを相手に。……それが少し悔しい。

ユリスは急いでテーブルに戻ってくると、テフシャの隣の席を確保しようとする。

そこで——バランが動いた。

「あっ、ちょっとバラン！ なにしてんの、邪魔よ邪魔っ！」

もちろんわざとやったのだ。

(相手の反応を見るに平気そうだが、話が進まないと困るからな)

「いいから、そっち座れよユリス。正面から好きなだけ見つめればいいだろ」

そのほうが、目の前でベタベタベタベタされるよりもずっとマシだった。

バランの促しに、ユリスは「それもそうね！」と手を叩くと、喜んでバランとアスティナのあいだに座る。

「アスティナさま、この女、どこか変ではありませぬか？」

「わ、わたくしには普通ですが……」

こそこそと話す声は当然聞こえていたが、バランもユリスも聞こえない振りをした。バランは平穏な話し合いのために。ユリスは自分を変だとは思っていないから。

そこに、今度は宿屋の主人が戻ってくる。

「——おや？ またおひとり増えて？」

テーブルを囲んでいる人数を見て、首を傾げた。

バランはテフシャに、短く事情を話す。

「宿を頼んであるんだが、あんたの部屋は姫さんと一緒にいいのか？」

「ああ、むしろそのほうが都合がいい」

テフシャもすぐにそれを呑みこんで、返事をした。

「だそうだ。何度も悪いが、用意を頼むよ」

「とんでもない！ かしこまりました」

バランの言葉に、主人は嬉しそうな笑みを見せると再び酒場を出て行く。アスティナがひとり

でなかったことに、安心したのだろう。

その様子を見ていたテフシャは、目を細めてバランを見やると、

「おぬしのほうは、常識人のようじゃな」

ほっとしたような吐息で告げた。

「あらテフシャお姉さま、まるであたしが常識人じゃないみたいなのを仰るのね」

会話に割りこむユリスは、怖いぐらいの笑顔だ。――いや、本当に喜んでいるのだが。

「おぬしは目つきが変じゃ！」

「そこがあたしのいちばん魅力的なところですよ～」

ふたりの噛み合わないやりとりを聞いて、アスティナが笑っている。

放っておくと長く続きそうだったから、今度はバランが割って入った。

「いいえ、テフシャさん。俺も変態だ。なにせ俺たちは、変態コンビとして売り出し中の請負者だからな」

「なに……？」

顔を引きつらせたまま、動きをとめるテフシャ。

「言うじゃないバラン。せいぜい美少年たちが生き残ってるって信じて頑張りましょ！」

ユリスが『美少年たち』に力をこめて告げたのは当然わざとで、それはちゃんとテフシャにも通じたようだった。

テフシャの視線は鋭さを増し、品定めをするようにバランとユリスのあいだを行ったり来たりする。

「失礼じゃが、おぬしらのランクは？」

さすがに、テフシャのほうは請負者についてある程度知っているようだ。

ユリスは自慢げにあまりない胸を張り、声も張りあげる。

「最高ランクですわ！ テフシャお姉さま!!」

「えっ？」

テフシャが驚くのも無理はないのだ。ユリスは、見た目だけならアスティナとさして変わらない、非力そうな少女なのである。

そこで当然、視線はバランのほうに向いた。

「嘘じゃないぞ？ 俺たちはふたりともSSランクさ。だからこそ町人たちには期待されているし、この事件は絶対に解決しなければならない」

そちらが協力してもしなくても、自分たちはどうせやるのだと、そういう意味をこめてバランは告げた。

「そうか――」

その言葉が効いたのか、テフシャはやっと納得してくれたようだ。大きく頷くと、しみじみと噛みしめるよう口を動かす。

「わかった。いいじゃろう、こちらが協力させてもらう。正直なところ、私とアスティナさまだけでは、犯人を捕まえることも無理じゃろうと思っておった。戦力が足りなすぎるからな。それなのにアスティナさまを見失ってしもうて、先ほどまでは本当に翼を切り落とされるような気

分じゃった」

すると今度は隣のアスティナが、突然頭をさげはじめた。

「あっ、ごめんなさい！ せっかくこんなに遠くの町の、すぐ近くまでやってきたのに、なかなか自由にしてもらえなかったから、わたくし……」

あとを続けたのは、バラんだ。

「ひとりで町のなかにやってきたものの、やっぱり心細くなってテフシャを捜していた、というわけか？」

恥じらうように顔を赤らめ、俯いたアスティナはやはり、まだ幼く見えた。

「はい。一度戻ってみたら、テフシャがいなかったのです」

「必死に捜しておりましたからね。私と犯人、どちらが先かといった気分で」

「本当にごめんなさいっ！」

どれほどの心配をかけたのか、アスティナ自身自覚があったのだろう。何度もテフシャに謝り、そのたびにテフシャから、やさしさの含まれた苦笑を貰っていた。

その様子を羨ましく眺めているのは、やはりユリスだ。

(最大のライバルは、アスティナね！)

自分にはまだ向けてもらえない、テフシャの気を許した表情。出会ったばかりなのだから当然といえば当然なのだが、ユリスはとても悔しかった。

「――そんなに悪いと思うならさ、アスティナ姫」

「はい？」

だから少し、いじめてみたくなった。

「あんたの作戦どおり、そのまま罠をやらしてもらおうと思うんだけど、どう？」

ユリスの挑戦的な視線の先で、アスティナの大きな瞳がさらに大きくなる。

「そんなん、危険じゃ！」

すぐに声をあげたのはテフシャだ。

それでもユリスが動じないのは、当然わかっているから。そして、それしかないとも思っていた。

バランはちらりと、そんなユリスのほうを盗み見る。

ユリスの意図も、感情も、ほぼ完璧に読み取れていたのだが、口は開かなかった。なぜなら、ユリスの私情を抜きにしても、その方法が最良であるように思えたからだ。

(姫さんがひとりで罠作戦をするのは無茶な話だが、俺たちが補助につくなら話は別だ)

さらわれて、なにか危害を加えられる前に、助ける自信はあった。万が一自分には無理でも、小まわりの利くユリスなら、うまくやってくれるだろうと。

それに、物理的に考えても、このなかで少年に化けられるのはアスティナしかいないのだ。いくらユリスが若く見えるといっても、やはり無理がある。

(町人に頼めば、誰かの子どもを貸してくれるかもしれないが――)

信頼されきっているだけに、逆に頼みづらかったのだ。子どもが嫌がっても無理やりやらせようとするかもしれない。しかし、たいした覚悟なくそんな役をやらされたら、子どもの心には確

実に、大きな傷が残ってしまうだろう。それだけは避けたかった。

(やはり姫さんが、最適なんだよなあ)

なによりも、覚悟がある。『みんなのため』という漠然とした想いではなく、『家族のため』という、他のなにものにも代えがたい想いが。

意見を変えるつもりのないバランとユリスの顔を見て、テフシャの視線もアスティナのもとへと移った。

テーブルの上に置かれたままのアスティナの手が、少し震えている。唇も。

しかし、一度閉じられた目が再び世界を映したとき、それらはぴたりとやんでいた。

「――やります」

決意のこめられた強い瞳に、さすがのテフシャもとめる言葉を呑みこんだようだった。

翌日は朝から四人で、積極的に外へ出てまわった。それも、昨夜話し合って決めた作戦なのだ。

今日も男装しているアスティナは、こうして自由に外を歩いていることが嬉しいのか、道端になにかものを見つけては、近づいて行ってしきりに眺めていた。ひと晩眠ったことで、どうやら恐怖は完璧に吹っ切れたようだった。

その様子を後ろから眺めてユリスは、心のなかで毒づく。

(いい気なもんよね)

昨日町人たちから話を聞いて、人さらいが時間帯に関係なく現れることは確認済み。そして、事件が二・三日おきに起こっていることは、リストを見ただけでわかっていた。つまり、昨日にも起きなかった以上、今日中に起こる可能性が高いのだ。

(いいえ、起きてもらわなきゃ困るわ)

そのためにユリスたちは、適度にアスティナを守りつつ、ある程度隙を見せなければならなかった。自由に動けるアスティナと違い、これがなかなか難しい。しかしそうしなければ、怪しすぎて引っかからない可能性があった。これだけ事件が起きていたら、男児は保護されて当然なのだ。昨夜だって、あんなに無防備でいたアスティナが無事だったのは、犯人が罠だと勘違いしてくれたせいかもしれなかった。

(度胸は認めてあげるけど、女はもっと頭を使わなきゃ！)

そう考えながら、ユリスは隣を歩くテフシャの腕に自分の腕を絡めようとした。

が、華麗に躲される。

「ベタベタするなと言っておろうが！」

どうも警戒されているらしい。

「ちえっ」

舌打ちをしたら、いちばん後ろを歩いていたバランが、嬉しそうに笑った。

「よし、これで報酬は五分五分に戻ったな！」

前に言った「舌打ち一回で報酬一割移動」を、まだ憶えていたのだ。

「なーに言ってんのよ。あんたに対するものじゃないんだから、数えないに決まってるでしょ！」

「いいじゃないか。おまえはそうやって『運命の人(ラーティフェン)』候補に会えてんだから、それくらい譲歩しろよ。俺なんてまだ美少年に会えていないんだぞ……っ」

必死に訴えるバランを振り返ったら、あまりにも羨ましそうな目をしていたから、さすがのユリスもちょっとだけ心を動かされ、

「……わかったわよ、じゃあ〇・五割ね」

ユリスなりの譲歩をする。

するとバランは、今度はテフシャに向かって懇願を始めた。

「テフシャさん！ ユリスがもっと舌打ちをするように、思い切り期待させてから突き落として

くれ!!」

「バカなことを言うなっ」

目ではしっかりとアスティナの姿を追いながら、テフシャは頭を抱えるよう眉間に手をやった。それから、心底呆れたように呟く。

「本当になんなのじゃ、おぬしらは……」

ユリスはその視界を遮るように、後ろ向きに歩きながらテフシャの前に移動した。

「なんなのって言われてもですね。あたしたちはいつもこんな感じですよ！ テフシャお姉さまがあたしの『運命の人』なら、お姉さまももれなく仲間入りですよ？」

「さっきからなんじゃ、その『運命の人』というのは」

アスティナの姿を確認できなくなったテフシャは、一瞬だけ眉を顰めたものの、バランが代わりのように素早く前に出たため、任せることにしたのかそのまま会話を繋げてきた。

(いい補助よ！ バラン)

ユリスは心のなかで感謝しながら、テフシャのきりりとした顔を見あげる。

「もちろん、この広い世界にたったひとりだけいるはずの、愛を語らうお相手ですよ！ あたしとバランは賭けをしているんです。先にその相手を見つけたら、見つけられなかったほうから新居と結婚式の費用を貰うという」

「ほう？」

テフシャの表情が、意外にも興味深げな色に変わった。

「あら、興味あります!？」

ユリスは抱きつきたい衝動をぐっところえて、テフシャの続きを待つ。

テフシャが次に浮かべたのは、どこかさみしそうな笑みであった。

「おぬしに興味はないが、な。発想が自由で羨ましいとは思う」

「テフシャお姉さま……？」

(もしや愛についてなにかお悩みかしら!?)

そんな意味をこめて名を呼んだが、テフシャの思うところは全然違っていった。

「アスティナさまにも、そのように自由な恋愛をしてもらいたいとは思えど……お立場を思えば、限りなく不可能に近いじゃろうて」

テフシャが考えていたのは、アスティナのことだった。

(く……っ)

相手はなかなか手強い。

つい唇を噛みこんだユリスを悟って、バランが声をかけてくる。

「ハハっ、俺が邪魔するまでもないな」

「バランは黙ってて！」

ユリスが振り返って文句を言ったら、バランはまだ背中で笑っていた。

しかし不意に、足をとめる。

「ん？ どうしたティナ」

バランが呼びかけたのは、アスティナのあだ名だ。姫とばれると面倒になるため、外で呼ぶと

きはそうしようと決めていたのだった。

なにかあったのかとユリスも、いちばん前を歩いていたアスティナを視界に入れる。

アスティナは二十歩ほど先で立ちどまり、ぼんやりとこちらを眺めていた。

「――ずるいなあ」

「へっ？」

少しくつった低い声で、アスティナは続けた。

「三人だけ、仲良さそうにしてさ」

ぎこちない部分はあるが、ちゃんと砕けた言葉遣いだった。

テフシャがバランとユリスを見やり、大真面目な顔で訊き返す。

「……仲良さそうに見えますか？ これが」

嫌そうな声で。

それでもアスティナは思い切り頷くと、答えた。

「見える。だってテフシャのそういう顔って、あんまり見たことない、よ」

「そりゃあ、ティナさまは変なことを仰りませんからね」

遠まわしに「バランとユリスは変だ」と言い放ったテフシャ。

アスティナは一度、きょとんとした目でテフシャを見返してから、なにを思ったのか突然走り出した。他でもなく、テフシャに向かって。

「テフシャ、だ〜い好き！」

そうして抱きついたのだ。

さすがのバランとユリスも、横から啞然とその様子を見つめていた。

しかしテフシャが照れたような顔でその背中に手をまわすと、「はっ」と我に返ったユリスが騒ぎ出す。

「ちょっと！ あたしのテフシャお姉さまから離れなさいよっ」

「変なこと、言ってみたかったんだもん」

「『だもん』じゃない！ お姉さまも酷いわっ、あたしにはまったく触らせてくれないくせにーっ！」

「なにを言っておる、どさくさにまぎれて今、散々触っておるではないか」

「……ばれたか」

悪びれもなく舌を出したユリスに、くすくすと周囲から笑いが漏れる。道に行く町人たちに、いつの間にか注目されていたのだった。例の事件のせいで警戒しなければならなくなり、こんなふう道端で盛りあがる人の姿も見られなくなったからかもしれない。

注目されていることに気づいたアスティナは、ユリスと違い恥ずかしく思ったのか、パッとテフシャから身体を離れた。

代わりにユリスが抱きつこうとしたが、素早い反応速度でやはりよけられる。

「く……っ」

「ティナさま、向こうに大きな広場があるようです。行ってみましょう」

「行く行く！」

仲良く肩を並べて歩き出したふたりの背中を、恨めしそうに眺めるユリスの隣に、すすっとバランが近づいて、

「どう？ いる？」

ユリスはすぐに、バランにしか聞こえないほど小さな声で尋ねた。バランが会話に交じらず一歩引いて見ていたのは、周囲の様子を探るためだったのだとわかっていたからだ。

「俺たちも行こう」

バランはわざと大きめの声でそう促してから、

「いるな、ひとりだけ視線の意味が違うやつが」

呟くように続ける。

「だが、意外と用心深いらしい。なるほど、ずっと逃げつづけているだけあるな」

「感心してる場合じゃないでしょー？」

「そりゃそうだが、ユリス。テフシャは手強そうさぞ。今はこっちに集中しておけよ」

それはユリスにとってありがたい忠告であった。

が、ひとつ気になることが。

「なによ～、助けたなかに理想の美少年がいるかも！ なんて期待してるくせにっ」

「……ばれたか」

バランはわざと先ほどのユリスの真似をして、ごまかした。

ふたりして、笑う。

それも一応、作戦だ。

バランはぐるりと、辺りに視線を送った。

(油断していると思わせたほうが、得だからな)

せいぜい早めに手を出してくれ、と。

――しかし意外にも、夕方になっても四人はまだ一緒に。

広場で遊んだり、露店のものを食べたり、相変わらずくだらない話をしたり、唐突に追いかけてこしてみたりと、色々なことをやってみたが、相手は動かない。

結局はもう一度広場へと向かい、さすがに疲れた様子のアスティナをベンチに座らせ、休ませていた。

「テフシャお姉さま！ あたしも座りますから膝枕してください！」

「はあ!? おぬしにするくらいなら、ティナさまにいたす。さあどうぞ、ティナさま」

「えっ？ あ、ありがとう、テフシャ」

「ぎゃーっ、墓穴掘った～！」

三人は相変わらずだ。

傍にある木の幹に背を預け、口もとに苦笑を浮かべながらもバランは考える。

(このままでは、まずいな)

事件が起こるなら、できれば夜でないほうがいい。囿であるアスティナの姿を追いやすいからだ。夜の闇は姿を隠すのに都合がよすぎるため、万が一のことを考えても暗くなる前に終わらせておきたかった。もしかしたら相手も、それを狙って手を出してこないのかもしれないが。

(……ユリスに訊いてみるか)

いくらバランが、考えるより動くタイプだといっても、相手が動いてくれなければ話にならないのだ。

バランがじいとベンチのほうを見ていると、視線を感じ取ったユリスが振り返る。

「あんたも座ったら？ バラン。その剣重いでしょ」

「ああ」

実際は重くもないし、疲れてもいない。だが、自然に話をするために誘われたのだとすぐにわかったから、バランはおとなしく頷き三人の傍に寄っていった。

するとなぜか、話をする相手であるはずのユリスが、ベンチから立ちあがる。

「じゃあバラン、ここに座っていいよ。あたしもう、眠くて眠くて駄目みたい。先に宿戻って寝てるわ」

そういえば今日は、ずっとテフシャと一緒にいるせいか、ユリスはほとんどあくびをしていなかった。眠気を必死に抑えていたのだ。

もちろんバランは、それだけが理由ではないことにも、気づいている。

(やはりユリスも、同じことを考えていた、か)

なにか行動を起こすつもりなのだろう。

「えっ？ こんなに早い時間から寝るの？」

首を傾げたアスティナの額を、ユリスはピンと弾いてやる。

「痛っ」

「あたしはねえ～、あんたと違って常に色々なことを考えているわけ。だから頭の疲労度も段違いなのよ！ 夜に寝たくらいじゃ全然足りないのっ」

その『色々なこと』の大半が、テフシャに関するものであることは、誰の目にも明らかだった。

テフシャはアスティナの額をさすってやりながら、しかしバランに視線を向ける。おそらく「本当なのか？」と訊いているのだ。

バランは背中の大剣をおろし、あいた席に座りながら口を開いた。

「睡眠時間が人よりも多いというのは、本当だ。昨日この町に来たときも、仕事屋(セトゥリカ)の前で立ったまま寝ていたくらいだからな」

「早く来すぎたせいよ！ どうもまだその影響が残ってる気がするの」

ユリスは言いながら、大きなあくびをする。本心と演技、半分ずつだった。

信用したアスティナが、「ふふ」と声を漏らして笑う。

「わかったわかった。じゃあ先に戻っている。どうせしばらくしたら、俺たちも戻る」

バランが送り出す言葉を告げると、ユリスは待ってましたとばかりに手をあげた。

「ありがとー、あとはよろしくね！」

そうしてあっさりとして走ってゆく。

「――大丈夫なのか？」

その後ろ姿を見ながら、小さく呟いたのはテフシャ。

「ああ、少し話をしたら、俺たちも戻ろう」

アスティナを安心させるような答えを、 balan は選んだ。

テフシャは物足りなさそうに眉を顰めたが、意図を悟ったのかそれ以上は言わなかった。

「あのっ、 balan さん？ その大剣を触らせてもらっても、いい？」

ベンチに座るため、背もたれに立てかけておいた大剣を、アスティナが興味津々の目で見やる

。

「構わないが、あんたには持てないと思うぞ」

「そんなに重いの!？」

アスティナは立ちあがると、ベンチの後ろ側にまわりこみ大剣に手をかけた。

「うわ、本当だ！」

柄を両手で握りしめ、両足で踏んばり持ちあげようとするものの、大剣はぴくりとも動かない

。

それでテフシャも興味を持ったのか、座ったまま手を伸ばすと、アスティナの手の傍をつかむ

。

今度はほんの少しだけ、持ちあがった。

balan は目を見開く。

「ほお！ テフシャさん、なかなか力があるなあ」

心から驚いたのだ。これまで女でこの剣を持てた者は、ユリスしか知らなかった。座った状態で動かせるなら、立ったらちゃんと持つことができるだろう。

しかし同様に、テフシャのほうも驚いたらしく、半分は呆れたように言い放つ。

「そういうおぬしは、これを振りまわすわけじゃろう？ まったく、信じられんな」

「見てみたいな、振りまわすところ」

対照的に、キラキラと輝かせた瞳を balan に向けるアスティナ。

balan は心のなかで苦笑する。

(もう少しすれば、嫌でも見ることになるかもしれないがな)

それに応えるよう、遠くのほうで夜の訪れを告げる鳥が鳴いた。

「だんだん暗くなってきたな。そろそろ宿に戻るか」

「ああ」

「ユリスさんをひとりにしておくの、やっぱりかわいそうだもんね」

今日一日中砕けた口調で話していて、すっかり慣れたのか、気に入ったのか、アスティナは無防備な顔で笑う。

「ティナさま……」

小さく名を呼んだテフシャの口もとに苦笑が浮かんでいたのは、そのまま幸せにはしておけないことを、哀しんでいるからだろうか。

balan と目が合ったら、テフシャは困ったように視線をさげた。

広場から真っ直ぐに続いている、宿屋のある道をとぼとぼと戻る。前を歩いているのが balan で、その後ろにふたりが続いていた。

昨日もそうであったが、この時間、町はすでに静かであった。人どおりはほとんどなく、道に沿って並ぶ家からは少しずつの灯りが漏れている。盛りあがっているのはおそらく、酒場や遊び場だけなのだろう。

そんなことを考えながら歩いていたバランが、ちょうど宿まで半分辺りにさしかかったときだった。

「おいみんなっ、大変だ!!」

前方から大きな声がした。町が静かだったからこそ響き渡り、家々の窓からみなが顔を出す。

「なんだ？」

「どうした！」

アスティナとテフシャも、バランの傍に駆けつけた。

そこに再び、届く声は――

「またひとりさらわれたぞ〜っ!!」

その聞き覚えのある声に、バランは大きく息を呑んだ。

(そう来たか！)

頭のなかで手を叩いたバランはすぐに、アスティナとテフシャを振り返ると、
「様子を見に行ってくる！」

告げて走り出した。

緊急事態だからか、ふたりも特に引きとめたりはせず、ショックを受けたような顔で立ちつくしていた。

「なんだって？」

「大変だ!!」

「今度は誰だっ？」

走るバランの後ろ姿を隠してくれるのは、両脇の家から同じように飛び出してくる人々。

バランはその騒ぎにまぎれて、道を真っ直ぐには行かず横道に入った。それからぐるりとまわって、つい先ほどふたりと別れた場所まで戻る。

(さて――ユリスもどこかにいるか?)

そうして建物の陰に隠れたまま、周囲の様子を窺った。

バランには、それがユリスの仕業であるとわかっていた。なぜなら、叫んでいた男の声が宿屋の主人のものであったからだ。犯人を油断させるためには、自然な形で自分たちがもっと離れる必要があると考え、協力を頼んだのだろう。

ユリスの姿は、道を隔てた反対側にあった。バランと同じように建物の隙間から、道のまんなかでうろたえているふたりを見つめている。

ユリスからも当然バランの姿が見え、安心してその瞬間を待つことができた。

(さあ、どこからでも来なさい！)

やがてますます、道の上に人が増えてくる。みな声がした宿屋のほうに向かっているようだ。

その人並みに押されて、アスティナとテフシャの距離が徐々にあいていく。テフシャは慌てて手を伸ばそうとしたが、他の町人に遮られ届かない。

アスティナのまだ華奢な身体は、少しずつ流されてゆく。

「ティナさま……っ」

騒ぐ人々の隙間から、テフシャの声が聞こえたそのとき。

(来た！)

バランとユリスは同時に心のなかで叫び、そして動き出した。

町人の振りをした誰かが、アスティナを捕まえたのだ。まるで保護をするように、後ろから抱きあげて。それから素早く、建物の陰に入っていった。町に向かっている人々は、まさか一日に二度起きるとはまるで思っていないからか、誰も気にしない。

ユリスは口もとに笑みを浮かべながら、犯人とアスティナのあとを追う。

(計画は成功ね)

あとは犯人がどこまで逃げるのか、だ。可能ならば、潜伏場所まで案内してもらいたい。もし

まだ生きている少年たちがいるのなら、助けたかった。

バランの姿も確認しつつ追っていくと、犯人は町外れに箱馬車を用意していた。

(あらら)

馬車に乗られたら、ユリスはともかくバランが直接追うのはきつくなる。

薄暗いなかユリスは、バランに「先に行く」と視線を送ると、犯人の背後に限界まで近づいて、馬車が動き出す前に箱の上に飛び乗った。身を低くしていれば、御者が振り返ってもそうそうばれることはない。ここまで近い位置にいれば、闇は敵ではなく味方になるのだ。

バランがあとから追ってこられるよう、太もものホルダーに隠してある小刀を傍の木に投げつけながら、ユリスは箱のなかの気配を窺う。

「騒ぐなよ？ 騒いだら即殺すからな！」

若い男の音がする。アスティナが声をあげなかったのは、脅されていたからか。

音を立てないように身じろぎしてユリスは、次に馬を操る御者の後ろ姿に目をやった。

目立たないようにだろう、黒い服に全身を包んでいる相手は、どうやら女のようなのだ。

(ウィップさばきは、あたしの勝ちね)

と、どうでもいいことを考えながら、振り落とされないように気をつけて到着を待つ。

箱馬車は、十五分ほど走ったところで停まった。

町から少し離れた位置にある、小さな林のなかだ。前には小屋のようなものがあるが、大きさから見てとても誰かを閉じこめているようには見えなかった。

(なかが、どこかに繋がってるのかしら?)

過去に解決した事件などを思い出しながら、ユリスはさらにふたりの動向を窺う。

「よし、降りろ！ なかでおまえの仲間が待っているぞ」

アスティナを捕まえている男が、そんなことを言いながら箱から降りてきた。男があいている手に灯りを持っていたから、それに照らされアスティナの表情も見える。

(さすがに怯えてるか)

それでも諦めていないことは、目を見ればわかった。

(まったく、本当に肝が据わったお姫さまね)

いじめたいと思って名指ししたが、人選は間違いでなかったらしい。さすがテフシャのお姫さまだと、ユリスは少し見直した。

そうこうしているうちに、男の怒声が飛ぶ。

「おいおまえ！ さっさとなかに入って扉をあけておけ」

一瞬ユリスは、自分に言われたのかと錯覚して身を揺らした。

「は、はいっ」

しかし返事をしたのは御者の女で、馬から落ちるようにして降りたあと、慌てて小屋へと向かってゆく。

(ふうん)

力関係は、どうやら男のほうがかなり上らしい。

女の動きを追って、ユリスは改めて小屋に目をやる。

だいぶ暗くなってしまったおかげでちゃんとは見えないが、ずいぶんと古そうな建物に思えた。壁にはびっしりと緑がくっついているし、かろうじて残っているガラス窓は半分しかない。

そのなかに、立てかけられていた戸をよけて女が入っていく。

ユリスはその、小屋のなかにあるらしい『扉』が開けられる瞬間を、見たいと思った。だが今女を追いかけたのでは、男のほうに間違いなく見つかってしまうから、その場でじっと我慢する。踏みこむにしても、バルンの到着を待つべきかどうか、考えねばならないことはたくさんあるのだ。

(—もうちょっと、様子を見たほうがよさそうね)

女に続いて、男とアスティナも小屋のほうへと向かって歩きはじめたから、ユリスは箱から降りるとその陰に身を隠した。そしてみなが小屋のなかに完全に入りこんだのを確認したあと、近づいて窓から覗きこむ。

小屋のなかも暗いが、男が持っている灯りのおかげでその周囲だけは見えた。部屋の中央、床板が大きく開かれていて、そこに入っていく姿を捉える。

(やっぱり地下ね)

やがて頭まで完全に見えなくなると、扉はゆっくりと閉められた。同時に光がなくなり、完全に暗くなる。

(やっかいだわ)

地下に逃げ場はない。楽観的に考えれば、それは敵を追いつめることができたということなのだが、現実にはそう簡単にいかない。逆に地下にいる全員を、人質に取られているとも言えるのだから。

なかの様子は気になるが、バルンの到着を待ったほうがよさそうだ。それにユリスには、どうせすぐには殺されないだろうという考えがあった。

(子どもの死体が欲しいだけなら、それこそ戦場に行って拾ってくればいいのよ)

様々な国と町を旅してきたユリスは、知っていた。一般的には、仕事屋(セトゥリカ)と請負者(カ一レリカ)の活躍により、平和を取り戻す国が増えてきたと言われているが、それはあくまでも大規模な戦いが減っただけであって、中規模・小規模な戦いはさほど減ったわけではなかったのだ。当然今もどこかで、領土や資源をかけた醜い戦いが行われている。そして、戦いがある場所には必ず、死体が転がっている。ユリスとて、仕事として頼まれ、実際に戦ったこともある。当然ながら一般人を傷つけるようなことはしなかったが、転がっている死体は山ほど見てきたのだ。踏まずに歩くのが大変なくらいの場所もあった。

(この国はもうだいぶ平和みただけど、世界的に見れば死体は不自由していない)

信じたくはないが、それが現実だ。

そんななかでわざわざ生きた子どもをさらっているのだから、『生きている』ことに価値を見出しているのだと考えるほうが妥当だろう。すぐに殺したのでは、わざわざさらう意味がないというわけだ。

ユリスは一度小屋から離れると、馬車のところまで戻り、腰につけていたウィップを取り出した。

(まずは、相手の逃走手段を消しておかなくちゃね)

数回空中で振りまわしたあと、馬の急所に向けてひと振り。鋭い衝撃を受けた馬は、鳴き声をあげる暇もなくその場に崩れた。

ユリスのメイン武器はこのウィップ。相手の急所を確実に刺激し、気絶に追いこむことができる。相手の動きを封じたり、痛みを与えたりすることも当然できるが、不殺を信条としているユリスにとっては、気絶させるのがいちばん楽だった。ちなみに、 balan も同じ不殺派で、それゆえに気が合ったというのが、旅の始まりでもある。

(あとは罨か)

外に誘い出すとしたら、必ず通るのは出入り口。さいわいその戸は開けっ放しであったし、この薄暗さなら足もとにロープを張っておくだけでも効果がありそうだ。

そう踏んだユリスは、箱馬車のほうに近づいていくと、勝手に乗りこんでいく。この手の馬車の椅子の下には、いざという時のために様々な道具が積まれていることが多い。

馬車のなかも暗く、椅子の長板を外してもなかがよく見えなかった。そこでユリスは一度降りると、馬車の向きを変え、主張しはじめた月光が入るように調節する。邪魔なカーテンは切り取ってしまった。

(これでいいわね)

それから再び乗りこみ、案の定入っていたロープと釘、そして金槌を手に、小屋の出入り口へと戻る。

膝よりも少し低い位置に、ロープをセットしていった。金槌の音は静かな闇のなかに響きはしたものの、地下までは届かなかっただけでまだ動く気配はない。

そこまで準備した頃、やっと balan が姿を現した。

ユリスが堂々と準備を進めていたせいか、 balan も隠れることなく近づいてくる。

「ユリス？ なにをしているんだ」

走ってきただろうに、息が切れていないところはさすがだ。

「やつらをおびき出す準備よ。地下にいるんだ」

ユリスが簡単に説明すると、 balan はすぐに頷く。

「それで俺を待っていたのか」

「ええ、その大剣をね」

「ハハッ」

balan は小さく笑いながら、手のなかのものをユリスに差し出す。それは、ユリスが道しるべにと置いてきた小刀だった。 balan はご丁寧に、すべて回収しながら来たのだ。

「そんなこと言うと、返してやらないぞ」

「いいわよ？ その分あなたの報酬から引かせてもらうから」

ユリスはしっかりと受け取って、それを太もものホルダーにしまった。

言葉と態度が伴わないのも、いつものことだ。ふたりにとって、それは心地よいことであった。

「そんじゃ、やるか」

バルンの言葉に頷いて、ユリスは建物の横にまわりこむ。

「窓のガラスを全部割ってね。あたしらはそこから出入りするんだから」

「ああ」

言われたとおり窓の前に立ったバルンは、背中の大剣を思い切り振りあげた。

そう、ユリスがバルンに頼みたかったのは、大きな音を出して地下のふたりをおびき出すことだった。バルンが大剣で小屋を破壊すれば、嫌でも地下まで響き渡るだろう。

勢いよくおろされた大剣は、一部だけ残っていたガラス窓を完全に打ち砕き、高い音を立てる。これでもバルンは力を抜いているのだ。本気で振りおろしたら、小屋ごと破壊しかねないから。

バルンが大剣を背中に戻して少し待っていると、小屋のなかから足音が聞こえてきた。ちゃんと地下まで聞こえたようだ。

バルンもユリスとは逆の側面に避難し、敵の出方を窺う。

「――しっ、静かにしろ！ 敵がいるかもしれないんだぞっ」

男の聲がして、扉が開かれる音とする。

「おい、おまえが行って見てこい！」

「えっ？ わ、私がですか!？」

「なんだ？ 文句があるのか？」

「……あっ、あります！」

(おっ?)

意外な展開に、バルンとユリスはそれぞれ息を呑む。

「私のほうがか弱いじゃないですか！」

「今そんなこと言ってる場合じゃないだろっ？」

「いいえ！ 言わせてもらいます!! だってあなた、私を捨てる気なんですよ!？」

「はあ!? 一体なにを言ってるんだ！」

こんなときに、まさかの修羅場だ。

壁につけている耳にも力が入る。

「だって……だって……あの子、女の子じゃないですか〜〜〜っ！」

(あ、ばれてる)

ふたりがそう思った瞬間に、どうやら女は走り出したらしい。

「あっ、おい待て！」

呼ぶ声が聞こえて、そして、

「きゃあああっ!？」

ものすごい勢いで出ようとしたからだろう、左右どちらからも、視界の端に宙を舞っている女の姿が見えた。さらにどさりと、落ちる音。

それにはさすがの男も慌てて、小屋のなかから出てくる。――転んだ。

(今!)

ふたりは両側から素早く飛び出すと、男女をそれぞれ捕らえる。

「なっ、なんだおまえたちは!？」

「放してくださいっ！」

反応からもわかるとおり、相手は完全な素人のようだった。

バランとユリスは目を合わせて、

「今まで捕まらなかったのは、本当に『請負者が来なかったから』って理由だけだったんだな」

「そうみたいね」

ひとつ大きな息を吐いた。

余っていたロープでふたりを縛りつけてから、地下へと入っていく。

仲間がいる可能性も考え用心して入っていったものの、がらんとした部屋の四隅に灯りがあるだけで、揺らめく光以外に動くものは存在しなかった。その奥には鉄格子に遮られた部屋が見え、捕まっている少年たちの姿を捉える。

そしてアスティナも――

「バランさん！ ユリスさん！」

他の少年たちと一緒に、その部屋に入れられていた。意外にも、帽子はちゃんとかぶったままだ。

「鍵はそこの棚の、下から二段目に入れてありますっ」

上の小屋よりも、はるかに広い部屋の一角を、アスティナは指差す。閉じこめられたあともしっかりと見ていたようだ。

ユリスは言われたとおりの場所から鍵を取り出すと、鉄格子の前で待ちかまえているバランのもとへと向かった。

アスティナと一緒にそこにいたのは、五人だ。半分はここにいない。

(どこにやったのか、あのふたりから聞き出さなきゃね)

そう考えるユリスには他にも、心配事があった。

「バラン！ 邪魔だからどいて。そんでそこから一步も動かないで」

「そんなっ、酷い！」

「酷くない！」

五人はみなそれぞれにかわいらしい少年であったが、そのなかにひとり、かなりバランの好みに近い少年がいたのだった。

バランとユリスはそれぞれの好みを当人よりも熟知していたから、妨害はたやすい。

そんなふたりの会話を聞いて、アスティナも悟ったのか、

「みんな聞いてっ。ここから出たら、あのお姉さんのほうに行くのよ？ 間違っても男の人のほうに行っちゃ駄目よ！」

素敵な助言をしてくれる。

それを聞いた少年たちは、バランが恐ろしい人物だと勘違いしたのだろう、

「こら姫さん！」

バランがかけた声に、怯えてアスティナの後ろに隠れてしまった。

それにはさすがのバランも「うう……」と凹み、階段のほうへと戻っていく。

「じゃあ俺は先に、拷問の準備でもしておくさ」

「そうして」

ユリスはさらっと流すと、やっと鉄格子の鍵を開けてやる。

すると先に出てきたのは、少年たちのほうだった。みな長いあいだ緊張状態にあったせいか、泣きわめきながらユリスに抱きついてくる。

「おやおや……」

(あたしはバランと違って、どちらかという子どもは苦手なんだけどな)

どうもそうは言っていないようだ。

最後に出てきたアスティナは、きつくとめていた帽子を外すと髪を自由にした。

「助けてくださって、ありがとうございます」

もうすっかり姫モードに戻ったのか、深々と頭をさげてる。さらにアスティナは、少年たちの頭をやさしく撫でてやりながら続けた。

「あなたがたも、よく頑張りましたね。生きていてくれて、ありがとうございます」

するとユリスに抱きついていた少年たちが、みなアスティナのほうへと対象を変えてくれる。

「……まいったわね」

聞かれないように、ユリスは小さく呟いた。

(やるじゃないの、このお姫さま)

ただの世間知らずではない、芯の強さ。どんなにテフシャの指導がよかったとしても、本人に資質がなければこうはなれない。

癪だと思いながらも感心していたユリスに、顔をあげたアスティナが問う。

「あの、ユリスさん？ 犯人のふたりはどうしました？」

「上でバランが拷問の準備をしてるわよ。――ああ、そっか。城の者でないか確認するんだっけ？」

「はい、わたくしも上に参ります」

そこで、子どもたちにはもうしばらく地下にいてもらうことにして、ユリスとアスティナは階段へと向かった。

「ところでアスティナ、あんた女だっていつばれたの？」

ユリスが前を歩きながら尋ねると、

「えっ？ ばれていたのですか？」

アスティナがそんな返事をしたから、ユリスは階段の途中で足をとめて振り返った。

「気づかなかった？」

それはおかしい話だ。犯人の女がそれに気づいていたからこそ、あんな場面で痴話ゲンカになり、結果ふたりとも楽に捕まえられたのだ。もしあそこで本当に女だけが様子を見に来ていたら、出入り口のロープに足を引っかけた時点で、男は地下に引きこもってしまっていたかもしれない。それほど、予想外に軟弱な男だった。

アスティナは一度ユリスを見あげてから、「はっ」となにか思い出したように息を吸う。

「そういえば――女性のかたが、なぜかずっとわたくしのほうを睨んでいた気がします」

「ああ、なるほど」

(つまり女の勘だったのね)

ユリスはあっさりと納得した。

それはときに、どんなに綿密な計算や測定よりも、圧倒的な鋭さを発揮する。

犯人の女は、男がさらってきたアスティナを見て、おそらくすぐに女だと気づいたのだ。そして当然男も気づいているのだろうと、思いこんでしまった。だからこそ手籠めにするために連れてきたのだと勝手に勘違いをして、ああいうことになったのだろう。つまり、たまたま囷となったアスティナが女性であったから、相手の隙をつくことができたのだと言える。

(運も味方した、か)

この姫は、有翼の神に祝福されているのかもしれない。

ユリス自身は神の存在すら信じていないが、ふとそんなことを思った。

その後階段をのぼりおえ、そのまま小屋をあとにすると、近くの木の前で立ちつくしているバランの後ろ姿が見えた。その視線の先には、ロープで木に吊り下げられている犯人たちの姿がある。

「バラン！ お疲れ～」

ユリスが声をかけると、振り返ったバランの表情は、月明かりに照らされてどこか寂しそうだった。いや、理由はわかっているのだ。

「そんな顔しなくても、少しくらいなら話させてあげるわよ」

「えっ!？」

途端にバランの顔が光り出す。本当にわかりやすい男だ。

「その前に、アスティナの用事をすませたらね」

「ああ、そうか」

美少年のことばかり考えていて、そのことをすっかり忘れていたバランは、その場をユリスの後ろにいたアスティナに譲る。

前に進み出たアスティナは、両手を頭の上にして吊されているふたりを見あげた。

「ほらっ、やっぱり女だったじゃない！」

「くそう、囷だったのか……っ」

発言するたびに揺れるふたりを、なおも見つづけるアスティナ。その顔に見覚えがないことを、もう一度確認しているのかもしれない。

「――あなたがたは、城の者ではありませんね？」

やがて、その若い見た目にはそぐわない、凜とした声音で尋ねた。

それにはさすがの犯人たちも驚いたようで、大きく目を見開いたあと、

「なんだ……？ あんた城の関係者なのか？ 俺らに城に勤められるような学があったら、そもそもこんな仕事してねえよ！ 俺たちは『業者』に頼まれただけだっ」

「ねえ！ よかったら私を城で雇ってもらえませんか？ もうこの人にはついていけません!!」

「おいこらっ、俺の目の前で堂々と裏切るんじゃないよ！」

「なによ、あなただって堂々と裏切ろうとしたくせに……っ」

「だからそれは誤解だって言ってんだろー!!」

犯人たちは、まだまだ元気があり余っているようだった。

アスティナはひとつ大きく息を吐いて、バランとユリスのほうを振り返る。

「気がすみました。ありがとうございます」

「疑いは晴れたのか？」

バランが尋ねると、アスティナは苦笑を浮かべて、

「ええ……わたくしの両親ならば、もっと賢い相手を選ぶと思いました」

それから少し顔を赤らめ、はにかんで笑って見せた。

「少しでも疑ってしまった自分を、情けなく思います」

それはこれまで見たなかで、最も子どもらしい笑顔だった。

バランはその強さに、感心して笑い出す。

「言うねえ、姫さん」

「え……ひ、姫!？」

「まさかっ、こんな場所にいるはずが――」

それに反応して、再び騒ぎ出した犯人たちをとめたのは、

「静かにおし！ この腐れ外道がっ！」

「ひいっ」

ユリスの怒声としなるウィップの音。

「あんたたちがいかにバカなことをしたのか、その身体にたっぷりと知らしめてやるから、ちょっと黙ってなさいよ」

あまりの迫力に、犯人たちは完全に口を閉ざした。

「さて、バラン！」

「な、なんだ？」

そのままの調子で振られ、バランは思わずうろたえる。いくら見慣れているとはいえ、拷問モードのユリスは怖い。

「アスティナ同伴のもと、美少年との面談を許す！ 時間は拷問が終わるまで。あ、お触りはなしよ？ アスティナの言うことをちゃんと聞くこと。それでいい？」

「い、いい！ 充分だっ!!」

答えるやいなや、走り出すバラン。

「あっ、待ってください！」

自分の役目がいかに大事か自覚があるのだろう、アスティナも慌ててあとを追っていった。

「頼んだわよ！」

その背中にユリスが声をかけたら、一瞬だけ振り返って手を振ってくる。

(大丈夫そうね)

なんだかんだ言って、アスティナは話のわかる姫だ。

ユリスはそう思った。

これまでいろんな国の王族に会う機会があったが、これほど請負者を見くださない王族は珍

しい。

(――それだけに、やっぱり気になるのよねえ)

できれば敵にまわしたくない。

ユリスは真相が知りたかった。

とっくに怯えはじめているふたりに向かって、まずはウィップをひと振り。

「ひiiiiiiiiっ」

「さあ、知ってることは全部吐いてもらうわよ！」

月明かりに照らされた暗闇のなか、ユリスの瞳も妖しく光っていた。

少年たちをさらっていた犯人は、城の者でも城から命令を受けた者でもなかった。

その事實は、町で三人の帰りを待っていたテフシャにも知らされ、姫と従者の無謀な旅は終わりを迎える。

「本当に、世話になったな。心から礼を言う、ありがとう」

翌朝、宿屋の前で別れるとき、テフシャはそう言いながらバランとユリスに握手を求めた。最後だからか、ユリスが握手を無視して抱きついて、追い払ったりはしなかった。

そのあいだに、

「わたくしにも、もう一度言わせてください。本当にありがとうございました」

アスティナも頭をさげ、バランに握手を求める。その頬が少し赤みを帯びていることに、バランは気づいてしまったが気づかない振りをした。

「いや……俺たちは俺たちの目的を達しただけだからな。あんまり感謝されても困る」

それは正直な感想だ。なにせバランにとっては、犯人を捕まえることよりも美少年を助けることのほうが重要だったのだから。

ぼりぼりとあいている手で頭の後ろを搔いていると、思考を読み取られたのかアスティナが笑い出す。

「それでも、おかげでこちらが助かったことも事実です。感謝させてください」

「アスティナさま、あまり言うと彼らが凶に乘りますから、ほどほどに」

さすがに我慢の限界なのか、ユリスをその身から引きはがしながらテフシャが言った。

「も～、テフシャお姉さまったら、あたしをいじめるのがうまいんですからあ」

「喜ぶな！」

怒鳴られて、ユリスはやっと手を放した。

(寂しいんだって、少しくらいわかってくれてもいいのに)

心のなかで、そっと唇を尖らす。

出会いと別れは、何度経験しても寂しい。それが好みの相手であればなおさらだ。普段は強気なユリスにだって、少女らしい気持ちはちゃんとあった。

横顔からそれを読み取れているバランは、「元気を出せ」という意味をこめて、ポンと肩を叩いてやる。

「あの、もし近くまで来ることがありましたら、ぜひ城に寄ってくださいね。おふたりなら歓迎いたします」

やや渋い顔をしているテフシャの横で、アスティナが口にした。どうやらアスティナも気を遣ってくれたらしい。

「ええ！ ぜひ寄らせてもらおうわっ」

途端に鼻息を荒くしたユリスに苦笑しながら、ふたりは去っていった。

その姿を見えなくなるまで眺めてから、こちらのふたりも動き出す。

町のみなから感謝されることも、報酬を受け取ることも、昨夜のうちにすませてあった。助け

られなかった五人の少年たちの家族はやはり哀しんでいたが、それでも事件そのものを解決したふたりには感謝してくれた。

――ゆえに、ふたりは立ちどまることなどできない。

事件の根っこはまだ、解決されていないからだ。

「少し北上して、グサラという町に行くわよ」

歩き出しながら、ユリスが口にする。

実は昨夜、ふたりはろくに打ち合わせもできずに眠ったのだった。というのも、 balan は町人たちの感謝を受けるので精一杯であったし、ユリスは拷問で疲れ果て、宿について即眠ってしまったからだ。

「なにか面白いことでもわかったのか？」

後ろを歩く balan の口もととは、すでに笑っていた。

「とっくに気づいてるくせに」

「ハハッ」

ふたりが気にしていたのは、昨日犯人の男が口にしていた言葉。

『俺たちは「業者」に頼まれただけだっ』

それを聞いてアスティナは、この事件は城が頼んだものではないと判断していたが、ふたりは違っていた。

(ではその『業者』とやらに、頼んだのは誰だ？)

そこが引っかけたのだ。それが万一城であったなら、アスティナの心配ごとはいよいよ的中してしまうことになる。

だからこそユリスは、もっと詳しく訊いてみようと、balan をダシにしてアスティナを遠ざけた。アスティナがそこまで知る必要はないと思ったからだ。

「あの男は、グサラであの黒仕事を請け負ったらしいわよ」

黒仕事とは、簡単に言ってしまうえば犯罪になるような仕事のことだ。逆に、請負者(カーレリカ)たちが通常仕事屋(セトゥリカ)から請け負うような仕事は、裏の世界では白仕事と呼ばれている。

「なに……？」

犯人が超軟弱男ただだけに意外で、balan は眉毛をぴくりと動かした。それでも、道を歩いていると町人たちに感謝の声をかけられるから、笑顔だけは絶やさずに。緊迫した雰囲気を感じられないよう、ユリスの傍に寄り囁く。

「つまり、その業者が黒仕事屋(リズ・セトゥリカ)に仕事を頼んでいた、ということか？」

黒仕事はそこでしか受けられないのだ。仕事屋商会とはなんの関係もない、裏の窓口。

「そう。だからね、それを受ければ黒仕事屋と業者の両方から報酬を得られる、実に美味しい仕事だったってわけ」

だから無理をしてでも仕事を受けたのだろうと、ユリスは語る。現に、五人の少年たちは早々に取り引きされていたのだ。業者の手に渡ったあと、どうなったのかは男も知らないらしい。

お金のために、簡単に罪を犯してしまう。自分や他人の人生を狂わせてしまう。

balan にはそれが、心からバカなことだと思えた。

(金が絡めば、人はとんでもないことをしでかすが)

いざというときその身を救うのは、きっと金ではなく愛なのに――。

今頃町人たちに責められているだろう彼らは、それに気づくだろうか、空を見あげた。

そう、犯人のふたりはユリスがウィップで散々いたぶったあと、町人たちに引き渡されたのだ。そもそもこの町には、城からの警備隊は配置されておらず、だからこそ事件の調査も請負者待ちになっていたのだ。そのため、犯人たちをどうするかは町人たちにすべて委ねられているから、バランにもユリスにも行方はわからない。

それに、ふたりが今すべきことは他にあった。

「それでグサラに行って、黒仕事屋に会うのか。探しかたは？」

各町に窓口があり、完璧に情報網が確立されている仕事屋と違い、黒仕事屋はあくまで個人商売だ。どこの誰がやっているのかわからないし、そこに横の繋がりはない。つまり、もともと黒仕事屋を知っている者に紹介してもらうのでなければ、探すのは困難なのであった。だからこそそんな仕事をしていても、犯罪者として検挙されることはほとんどない。彼らの隠れかたは実に巧妙なのだ。

ユリスはちらりとバランに意味深な視線を向けると、困ったように口を開いた。

「『翼のない神』の、翼のところにいるんだってさ」

「……はあ？」

なんともわかりづらい表現だ。

「翼がないなら、翼のところってのもないだろ？ なんだそりゃ」

「なんかねえ、あの男も結局わからなくて、堂々と人に訊いてまわっていたら、迷惑がって相手のほうから出てきたらしいわよ」

「とことん軟弱者なんだな……」

しみじみと呟いたバランがおかしくて、ユリスは小さく笑った。

「あんたも人のこと言えないじゃないのさ。例の美少年とは結局どうなったのよ？」

ユリスが嬉々としてウィップを振るっているあいだ、バランはアスティナを伴って少年たちと会話をしていたはずだった。しかし拷問が終わって迎えに行ったとき、少年たちのバランに対する恐怖は確かにやわらいでいたようだったものの、さして仲良くなったふうでもなかったのだ。

するとバランは「ああ……」と呟いてから、

「こっちはそれどころじゃなかったんだ。あそこの部屋で嫌なもん発見しちゃってな」

「へっ？」

「多分、おまえのほうはずっと嫌だと思うけどな。訊きたいか？」

もったいぶって訊いてくるバランに、ユリスは、

「あ、待って。なんとなく予想ついたかも……」

頭を抱えるようにして、ひとつ長い息を吐いた。

「もしかして、セールト＝テックスの絵!？」

「ご名答。しかも日付はひと月くらい前だった」

「近っ、近すぎる！」

ユリスを絵画アレルギーにしたセールトは、ユリスにとって最も会いたくない相手であった。そしてバランにとっても、大事な相棒を振りまわされたり一緒に巻きこまれたりするの是不本意で、苦手な相手なのだ。それなのに行く先々でよく遭遇してしまうのは、一体誰のいたずらなのか。

黒仕事屋を必ず探し出してやると、意気こんでいたユリスのテンションは一気にさがってしまった。

「これだから神なんて信じられないのよ……っ」

恨めしそうに呟いたユリスを、慰めるようにバランは告げる。

「まあまあ、いきなり遭遇しなかっただけでもマシじゃないか。あいつが絡むと本当にろくなことがないからな」

「ああ、あんたの大好きな美少年も盗られちゃうもんね」

「く……っ」

そう、セールトは見た目だけなら温厚な優男、しかもそこそこ美形なので、大抵の少年たちはセールトのほうに近づいていく。そんな屈辱的なことも、何度かあったのだった。

「で？ どんな絵だったのよ。あいつらがあたしを見ても気づかなかったってことは、あたしの絵じゃなかったんでしょ？」

絵があったことにすら気づかなかったユリスは、気になって訊いてみた。しかしすぐに訊いたことを後悔したのは、バランが「よくぞ訊いてくれた！」という顔をしたからだ。

「それがなあ、もうすごい美しい少年の絵だったんだよな……さすがの俺もセールトと握手しなくなった。いや、美しいというよりもむしろ、うちゆくしいといった感じか？」

「……悪いけど、全っ然わからないわ……」

どうりで気づかなかったはずだと、ユリスは心のなかで呟く。

――そんなふうには他愛のない会話をしながら、ふたりは次の町・グサラを目指した。

バランの胸のうちには、すでに業者に引き渡されていて行方のわからない五人への心配心が根つき。ユリスの胸のうちには、まだテフシャへの恋心がくすぶっていた。

グサラに辿り着いたのは、ちょうど陽が落ちはじめた頃だった。

「暗くなる前に着いてよかったな」

「ええ。走らなきゃいけなくなったら、どうしようかと思ったわ」

ユリスは balan ほど体力があるわけではない。

町の門をくぐりながらぼやくと、balan は笑って、

「ま、いざとなったら通りすがりの馬車に乗せてもらえばいいのさ。それくらいなら俺が払ってやる」

そう、ふたりの移動が常に徒歩なのは、ひとえに節約のためであった。あいだに海峡があるなら、泳いで渡るほどだ。

ユリスは近くにあった大きな地図看板に、目を走らせながら応える。

「嫌よ、あんた絶対あとから見返り要求するじゃない」

「良心的じゃないか」

「どこがよ。美少年を捕まえてくるなんて、あたしにとっては苦行もいいところなの！」

自分がときおり熟女を探させていることは、完全に棚の上だった。

「とにかく、さっさと仕事屋(セトゥリカ)に行って町の地図だけでも貰っておくわよ。なにかいい仕事があったら、受けたっていいんだし」

「そうだな」

ユリスの促しに、balan は苦笑を浮かべながらもおとなしく頷いて、肩を並べ歩き出す。

今回の目的はこの町にいる黒仕事屋(リズ・セトゥリカ)を探すことではあったが、どの町でも請負者(カーレリカ)は不足しがちであり、仕事が貯まっていることも少なくない。もし片手間でもできるような仕事があるならば、受けておくのもやぶさかではなかった。

先ほど地図を確認していたユリスが、道案内するように前を歩いていく。

グサラはダウオンとは違い、この時間でもまだ道端には多くの人が見えた。開いている店もたくさんあったし、なにより活気にあふれている。

「ずいぶんと明るい町だな」

辺りを見まわしながら、balan が感心したように告げると、

「見たところ商人が多いみたいね。商業の拠点になってるのかしら」

balan とはまた違う視点で見ていたユリスも、さらりと感想を述べた。

しかし、このように人の多い場所に来ると、ふたりが周囲を見るのと同様に、ふたりを見てくる視線も多かった。なにしろ、長身の balan は身の丈と同じくらい大きな剣を背負っているし、ユリスは黙っていればなにもしなくても生きていけそうなほどの美貌である。並んで歩いていると、嫌でも人目を惹くのだ。もっとも、ふたりはそんな視線にも慣れていて、さして気にもとめないのだが。――美少年や熟女の熱い視線でない限りは。

「あっ、balan、あったわよ。仕事屋の看板」

ユリスが遠くに見えてきた看板を指差す。

ここでもダウオンの町とは違い、仕事屋が二階建てであったおかげで、遠くからでもその看板を見ることができた。

「町の規模が全然違うな」

「城に近いからかしらね」

「ああ、なるほど」

言われて、バランは納得した。近いといっても、今日歩いてきた分と同じくらいはあるのだが、それでもダウオンに比べれば近いに違いはない。

(これだけ人がいれば、美少年がいる可能性も高そうだな……)

バランはユリスにばれないよう、そっと心のなかで口もとを緩ませた。

――のだが。

「先に言っておくけど、バラン」

やっとなつた仕事屋の前で、たちどまったユリスが急に振り返る。

「あんたはとりあえず、いなくなった五人のことだけ考えてなさいよ？ そうしないとあんたは、どんどん注意力散漫になっていくんだから」

ユリスは完璧に見透かしていた。

「うっ」

返す言葉もないバランは、人形のようにこくこくと何度も首を振る。実際、気の多い性格のせいで幾度となく迷惑を掛けてきたのだから、文句は言えない。

(ユリスのやつは、意外と一途だからなあ)

ユリスがまだテフシャのことを考えているだろうことは、バランもわかっていた。ときおり、そんなふうにとりづつを強く想うことのできるユリスを、羨ましく思うこともある。しかし、そのせいで酷く傷つくことがあることもまた知っているから、ユリスと同じようにはなれなかった。

(俺たちはきっと、違うからちょうどいいんだ)

そんな気がしていた。同じようになってしまうたら、お互いを支えきれないと。

「なによバラン、あたしの顔になにかついてる？」

思わずじっと見つめてしまっていたバランは、問い返され慌てて手を振る。

「いや、相変わらずおまえは、顔だけなら美人だと思ってただけだ」

「そりゃどうも！」

いつもバランの褒め言葉を本気にしないユリスは、ドアのほうに向きなおるとそのノブに手をかけた。そしてガチャリとまわしてから、

「あんただって、黙ってりゃそこそこのよ」

傍にいたバラんにしか聞こえないほど小さな声で、呟いたのだった。

「そりゃどうも」

苦笑いを浮かべつつ、バランも同じ言葉を返す。

こういう会話をすると、お互いある程度認め合っていることをちゃんと確認できるから、バランは嫌いではなかった。

もちろん、ユリスも。

(バランったら、どうせあたしとテフシャのこと、考えてくれてたんだろうな)

わかっているから、会話は繋がる。簡単に、バカにできるのだ。

「いらっしやいませ。遅い到着ですね」

ふたりが入っていくと、長いカウンターのなかにいた青年と老人のうち、手前にいた青年のほうから声をかけてきた。ユリスと同じくらいの年齢だろうか、結構若そうな人だった。

「ええ、隣町のダウオンから、歩いてきたものですから」

ユリスはまた、世話になる相手限定のつくり笑顔を向ける。

その瞬間青年の頬にさっと朱が走ったのを、バランは見逃さない。

(こら、相手の様子を見て笑えよユリス)

あとで面倒なことになっても知らないぞと、咄嗟に考えてしまうバランは、我に返ったあとでいつも、猛烈な自己嫌悪に陥るのだった。

(娘を心配する親父の気分って、こんな感じなんだろうな.....)

「ん？ なに四つん這いになってるの、バラン。そんなにあたしに踏んでほしい？」

ユリスの言葉に、カウンター内の青年はぎょっとして一歩退く。

そう、どうせユリスが口を開けばすべての幻想は崩れるのだから、本来ならばそうそう気にする必要もないことなのだ。

バランはその体勢のまま大きく息を吐き出したあと、むっくと立ちあがり、適当にごまかした。

「違うんだ、その辺に美少年が落ちているような気がしてな」

ユリスは当然首を傾げて、バランに訝しげな視線を向ける。

「はあ？ 美少年は希少価値が高いんでしょ？ あんたいつも言ってるじゃない。こんなところに落ちているはずがー」

「あ、いえ、さっきまで確かにありましたよ。他の請負者のかたが保護して連れていかれましたが」

「えええーっ!？」

あまりにも予想外な青年の言葉に、ふたりは揃って声をあげた。

(そんな町にいたら、バランが犯罪者になっちゃうじゃない!?)

(俺も美少年拾いたあぁっい!)

心のなかでも叫び声をあげるなか、青年は丁寧に言葉を紡ぐ。

「まあ滅多にないことではありますけどね。――それで、おふたりはどうしました？ 仕事をお探しですか？」

さすが、人の多い町の仕事屋だけあって、きちんとしているようだ。

ユリスは、それならよかったと心から安心して、答えようと息を吸った。

のだが、

「いや、今日は時間も遅いし、とりあえずこの町の地図だけ貰えれば」

バランがあいだに入って代わりに答えた。多くの仕事屋は夕方に閉まるため、気を遣ったのだ

。 割りこまれたユリスは一瞬むっとした顔をつくったものの、バランにもなにか考えがあるのだろうと、そのまま口を閉ざす。

「わかりました。ではこれをどうぞ」

差し出された地図を受け取りながら、バランはさらに口を開いた。

「ついでに、おすすめの宿があれば教えてほしいのだが。部屋のランクは特に問わないから、なるべく安いほうが助かる」

「わかりました。ではこちらで予約を入れておきましょう」

(ずいぶんとサービスがいいな)

バランはそう感謝しながらも、心のなかでニヤリと笑っていた。

「二部屋でよろしいですか？」

訊いてきた青年に、満面の笑みで答える。

「いや、一部屋だ」

「え——」

その瞬間の、相手の驚いた表情を見るのが、バランの密かなお楽しみであった。相手が年頃であればあるほど、わかりやすい反応をしてくれるから面白いのだ。

そんなバランに、ユリスは当然気づいていて、

(まあ、バランにはそれくらいしか楽しみがないしね……)

という同情心から、好きにさせている。それに、バランがいるおかげで変な男が寄ってくることも滅多にないため、助かっている面も確実にあった。

「あっ、かしこまりました。少々お待ちください！」

余程衝撃を受けたのか、青年はぎくしゃくした様子で奥の部屋へと駆けこんでいった。同じカウンター内の奥にいた老人が、笑いを噛み殺しきれずに口もとを抑えている。

「なんだ？」

バランがじろりと睨んでやると、

「本当は、そういう関係じゃないのだろう？ おふたりさん」

限界まで細められた糸のような目をして、老人はさらりと言う。

バランが思わずユリスのほうを見やったら、ユリスはあくびの途中で動きをとめていた。

「こんな場所に何年も座っていると、顔を見ただけで関係がわかるようになるのだよ」

冗談か本気かもわからない口調。どうやら相手のほうが一枚うわ手のようだ。

「ちなみにわしもな、昔々この町に落ちていた子どもだったよ」

「えっ？」

身を乗り出して食いついたのは、もちろんバラン。

「この町は見てのとおり、広さの割に人が多くてね。迷子になる子どもも多く、それに便乗して捨てに来る輩もいる」

「ああ——」

息を呑んだバランの手もとには、いつの間にかこぶしができている。

「ここはそういう町なのだ、請負者さん。もしも時間ができたら、この町が少しでもよくなるよう、手伝ってくれるとありがたい」

老人は最後に、人懐っこい笑顔を浮かべた。

物腰穏やかに話しているが、なにかつらい過去があったのかもしれないと、バランには感じられて、

「明日また来るよ」

頭を掻きながら応えたところに、最初の青年が戻ってきた。そしてバランに、一枚の紙を差し出してくる。

「お待たせしました。この紹介状を持って宿に行ってください。場所は……先ほどの地図を貸していただけますか？」

バランが地図と交換するようにして紙を受け取ると、青年は地図を広げ印を書きこんでいく。

「ここです。前の道を真っ直ぐに歩いて行って、右・左・右と曲がれば着きますので」

さほど遠くはないらしい。

「ありがとう、助かったよ」

もう一度地図を受け取ると、バランは愛想よく礼を言った。

するとなぜか、青年の顔がまた赤くなる。

「い、いえっ、お疲れさまです！」

(おや?)

たんに人見知りなのか、赤面症なのか。

どちらにしてもあまり気にする必要はないようで、バランは安堵の息を吐いた。

「行くぞユリス」

「ええ」

先に出たバランに続いて、今度こそあくびを浮かべながらユリスも出る。ドアを閉める前に、カウンターのふたりに軽く手を振った。振り返したのは、先に声をかけてきた青年のほうだけだった。

指定された宿への道を、また肩を並べて歩いてゆく。

「老人のほうは、なにか色々知ってそうな感じだったわね」

夕陽に照らされたユリスの横顔が、そうぽつり呟いた。

「ああ、そうだな。人間観察が上手そうだったし」

「昔美少年だった面影もあるし？」

「まあ、否定はしないが」

老人と言っても、いかにも年寄りという感じはしなかった。今でこそ、同年代の女性にはモテそうさ。

肩をすくめて両手をあげたバランに、ユリスは笑った。

「明日、訊けそうだったら訊いてみる？ 『翼のない神』のこと」

黒仕事屋は、『翼のない神』の翼のところにいる。まずはその神を探さなければならない。

「訊けそうだったらな」

頷いたバランの手から、ユリスは素早くホテルの紹介状を奪い取る。

「ユリス？」

「あたし、先に行って寝てるわ。悪いけど、もう結構限界なのよ。あんたは夕飯食べに行くでしょ？」

「行くのは行くが、おまえもちょっとくらい食べろよ。いつも思っていたが、食事が不規則すぎるぞ？」

「仕方ないでしょ、食欲より睡眠欲！ なんだもの。どうせ朝にたっぷり食べるから、なんか買ってきといて。心配しなくても、部屋のなかにある絵画はちゃんと外してもらってから入るからさ」

ユリスはそこまで告げると、さっさと走り出した。そして最初の曲がり角のところまで来ると、バランのほうを振り返り、

「五人の美少年があんたを待ってるんだからねー、変に他の子に手を出しちゃ駄目よ！」

人目もはばからずそう叫んでから、怒られる前に角を曲がり姿を隠す。

おかげで通りを歩いていた人々が、何事かとバランのほうを注目しはじめた。

いたたまれなくなったバランは、逆方向へと走り出す。

(ユリスのやつめえ～)

いつもながら見事な釘刺しだ。

こういう視線に慣れているとはいえ、やはり痛いものは痛い。

やっと振り切って立ちどまった頃には、だいぶ道の端まで戻ってきてしまっていた。

(さて、どうするか)

バランは地図を開いて現在地を確認すると、これから行くべき場所を考える。

酒場はいくつかあったし、ユリスもそれを考えて先に宿へと向かったのだろうが、今のバランは酒場でのんびりと酒を飲めるような気分ではなかった。

(なんか、落ちつかないんだよな)

座ってぐちゃぐちゃ考えるより、身体を動かすほうが向いている性分だからかもしれない。

そこで、近くにあった屋台で色々買いこむと、町を歩きまわりながら『翼のない神』について調べてみることにした。決して、落ちている美少年を探しているわけではない。

(この町にもやはり、翼を持った人間の絵はたくさんあるんだな)

神として崇められているだけでなく、モチーフとしても人気なのか、建ち並ぶ店の看板にはよくついていたし、窓に模様として描かれているものや、浮き彫りされた平らな石が地面に埋めこまれていたりした。だがそれらには当然のようにすべて翼があり、翼のない絵はない。

(――そもそも、翼がない神ってただの人間じゃないか?)

散々探しまわったあとそれに気づいて、バランは呆然とした。

翼を持った神を追いかけても、無駄だったかもしれないと。

それからは探す気もなくして、おとなしく宿屋に向かったのだった。

「ちょっとバラン？ あんた、なんで地図にこんな落書きしてんのよっ」

珍しくバランより先に起きたユリスが、そんな言葉でバランを揺すり起こす。

昨日は結局ずっと歩きっぱなしで、知らないあいだに疲労が蓄積されていたらしい。バランはごしごしと目を擦りながら起きあがると、ユリスが差し出してきた地図に目を落とした。

いくつもの小さな丸印が、地図上でその存在を主張している。

(ああー)

そこでバランはやっと、昨夜の自分の行動を思い出した。

「この町にも、あの翼の生えた人間の絵がいっぱいあったんだ。それで一応おまえの真似して、印をつけていったんだが……考えてみれば、おれたちが探しているやつは翼のない人間だろ？ つまりただの人じゃないか。それに気づいたから、途中でやめて戻ってきたんだ」

「へえ！ あんた、酒場にも行かずに調べてたの？ それで、美少年は落ちてた？」

ユリスにはなんでもお見通しだった。

「び、美少年なんか探していないぞっ」

必死の形相で訴えるバランを軽く無視して、ユリスはもう一度、バランの手もとの地図を見やる。

「でもさ、それにしても変よね。丸が連なって見えるもの。全部道に沿ってあったわけじゃないんでしょ？」

丸は道のないところにもついていた。

「ああ、とりあえずこの近くをぐるっとまわってきたからな」

答えながら、そのときの様子を思い返すバラン。

それこそ、建物の隙間や裏側、道端にあるゴミ箱のなかまで見てきた。途中からは意地のようになっていたかもしれない。その結果がこれなのだ。

(確かに、丸の近くに丸があるんだよな)

ユリスに言われるまで全然気にしていなかったが、丸は変に飛び出したりはせずに、同じ線上に連なっているようにも見えた。

ユリスは「ふうん」となにかに納得しながら、バランから地図を取り返す。それから朝の光に透かすかのように、視線の高さまで持ちあげて、

「この、丸が終わってるところから調べてみたら、続きがわかるかしら？ 黒仕事屋(リズ・セトゥリカ)の件とは関係ないかもしれないけど、なんかありそうね」

楽しそうに唇の端をあげた。

好奇心だけでいえば、実のところバランよりもユリスのほうがはるかに強いのだった。

「まあいいわ。さっさと出かけるわよ、バラン。早く準備しなさいよ」

「お、おう」

急かされベッドから立ちあがるバランを待たずに、ユリスはさっさと部屋の出口に向かう。

「隣の食堂行ってるからね～」

明るい声で告げられて、バランは慌てた。

「おい待てよっ、俺が昨日買っておいたのはどうした？」

「もう食べちゃったわよ」

しれっと答えるユリス。

バランが視線をベッド脇のテーブルに投げると、そこには確かにカラになった袋だけが残されていた。

「あんたが来るまでに頼んだものは、あんたの奢りでよろしく！」

ユリスはまるでどこかの兵隊のように、真っ直ぐ伸ばした手のひらを頭に当てると、颯爽と部屋を出て行く。初めから返事を待つ気などないのだ。

当然バランとてそれを見送らず、とにかく素早く身なりを整える。毎朝問題になるのは寝癖のつきやすい髪なのだが、冷水をかぶって無理やり直した。急いでいかなければ、どれくらい払わされるかわかったものじゃない。

(あいつは朝だろうが関係なく、食うときは食うからな)

あの細い身体の一体どこにそんなにも入るのか。ユリスの食事は不定期だが、その分食べるときはバランの何倍も食べるのだ。バランがこれまで出会ってきたなかで、ユリスは唯一食い溜めができる人間だった。

そうしてバランが食堂に駆けつけた頃には、ユリスの前に大量の料理が並んでいた。ふたりにしては大きすぎるはずの丸テーブルなのに、バランが料理を頼む際はまるでない。

向かいの席に座ったバランに、ユリスは、

「どうせあんたのお金なんだから、あんたも食べていいわよ。――あ、ただしそのお皿は駄目ね！ あたしの好物だから」

普通の男ならころっと騙されてしまいそうな、幸せいっぱい笑顔を向けた。

惚れるはずのないバランですら、なにも言えなくなってしまう。

(……まあいいか)

文句を言うのは諦めて、いちばん近くにあった皿の料理をつまんでみたら――

「んっ!? なんだこれ、激うまっ！」

バランもすぐに幸せになった。どんな感情も、結局食欲には勝てそうにない。

「でしょ？ 宿の人が美味しいよって教えてくれたのよ」

「そうか、当たりだな。これはあの仕事屋(セトゥリカ)のにいちゃんにも感謝しないとな」

ふたりの関係にショックを受けながらも、この宿を紹介してくれたのはあの青年だったのだ。

ユリスもそれで思い出したのか、スプーンを口に運ぶ隙を縫って告げる。

「食べおわったらまず、仕事屋に行ってみよ」

「ああ」

それ以降は、ふたりとも必死になって食べていた。

商人の多い町だけあって食料も豊富なのか、料金がそれほど高くなかったのがさいわいだった。

それでもバランにしてみれば、結構な出費だったのだが。

(落としたい相手がないときでよかったな)

今はそう思うしかない。そしてこれ以上、お金のかかることが起こらなければいいと。
一方のユリスは、たくさん眠れたせいもありご機嫌で、いつも以上に人目を惹いていた。

「おはようございまーす」

すでに開いていた仕事屋に入っていくと、カウンターにいたのは昨日と同じふたりだ。

「あっ、おはようございます！ どうでした？ ご紹介させていただいた宿屋は」

余程仕事熱心なのか、顔を合わせた途端問われて、ユリスは笑顔で答える。

「宿屋のほうは普通でしたが、隣の食堂が最高でしたわ」

「そうでしたか。宿は普通で、食堂が美味しい、と……」

すかさずメモを取る青年の横で、老人がまた笑いをこらえている。

青年はそれに気づかず、真剣な目をしたままユリスを見やった。

「それで、今日は？ 仕事をお探しですか？」

「ああ、なにかできそうなことがあれば、見せてほしい」

しかし答えたのは、ユリスではなくバランだ。ユリスはそのまま場を譲る。

仕事を受けるとき、前に出るのはやはり、男のバランでなくてはならない。そうでなければ仕事のランクを下げられる可能性があることを、ユリスはちゃんと理解していた。そのため自分は一步さがり、バランに任せる。

(癩だけど、しょうがないのよね)

女の請負者(カーレリカ)は少なくはないが、そのほとんどが家事や掃除など、普通の手伝いをこなす人々なのだ。ユリスのように、男の請負者と同じ仕事をしている者は少ない。だからこそ舐められやすく、下手をすれば登録すらさせてもらえないこともあった。

(ひとりのときなら、それでもよかったけど)

今はバランがいる。そんな迷惑は掛けられないのだ。

青年は一瞬残念そうな表情を浮かべたものの、すぐに隠して、

「では最新のリストをお持ちしますので、少々お待ちください」

また奥の部屋へと向かっていった。

その直後、口を開いたのはカウンター内に残っていた老人だ。

「ちょっといいかね？」

「ん？ なんだ」

「あんたたち、腕に覚えがありそうだから訊くが、ランクはS以上？」

笑顔のままで訊いてくるため、その奥に隠された表情は読み取りにくい。

(なぜそんなことを訊く？)

同じように思ったバランとユリスは、一度目を合わせた。

「ランク制限のある仕事でもあるんですの？」

壁に寄りかかり腕組みをして尋ねたユリスに、老人はさらりと答える。

「ある、というよりも、仕方なくつけたのがな。それも、昨日まではAランク以上だったものだ」

「えー」

それはつまり、Aランクの者が仕事に失敗した、ということを表す。

「迂闊にその場所に近づかれると困るのでな、該当者以外にはこれ以上の情報は渡せない。もう一度訊くが、ランクは？」

「SSだ」

今度こそ balan は即答した。そういう他の者にできない仕事こそ、自分たちがやるべきだと思っていたからだ。

「なるほど、最高だ」

老人は初めて、細めていた目を開いた。その件にずっと頭を痛めていたのかもしれない。

「お待たせしました！」

元気よく戻ってきた青年に、老人は指示を出す。

「そのリストはいい。彼らは例の仕事を受けてくれるそうだ。そちらの依頼書を」

「は、はい！ これですっ」

条件が更新されたばかりだからだろうか、青年は奥の部屋には戻らず、カウンターの上の書類の山からそれを取り出した。

「一体なにがあったんだ？」

Aランクの請負者として、十分な強さを持っているはず。戦場へと向かうメンバーの選抜でもなければ、滅多にランク制限されることはない。

直球で尋ねた balan に、老人は受け取った紙を渡した。

「簡単に説明すると、請負者が襲われている」

「なに!？」

「最初に襲われたのは、半月くらい前だ。その調査に向かった請負者も襲われ、その次の請負者も襲われと、次々やられている。すべて同じ場所で」

「襲われている、ということは、殺されているわけではないのね？」

予想外の事件に言葉を失っている balan の代わりに、ユリスが問いを投げかける。

老人はコクリと頷き、

「ああ、みな生きてはいる。もう一度請負者になるのはきつい状態ではあるが、ね」

続けた言葉に、隣の青年が縮みあがっていた。

「balan、依頼書を貸して」

「あ、ああ」

ユリスは balan からそれを受け取ると、情報に目を通す。現場という欄には、『有翼神(ソアイゼ)像広場』という文字が見えた。

(ああ、あの翼の生えた神って、有翼神っていうんだ)

今まで名前は知らなかったから、納得しながら問いかける。

「あの翼の生えた神の像があるんですの？」

持っていた町の地図で確認してみると、町の北東側にあるようだ。

「像といっても、そう大きなものではないですが……ええと、あなたよりちょっと大きいくらい

ですよ」

青年が指差したのは balan だった。

咄嗟にユリスは、翼が生えた balan を想像してしまって、そんな場合ではないのに笑い出してしまう。

「ぷっ……balan に翼とか似合わなすぎ……！」

「なに 変な想像しているんだっ！ こっちは今真面目に考えているんだぞ？」

「なにを 考えてるって いうのよ」

「決まっている だろ、犯人が請負者を狙っている理由だ」

balan は大真面目に答えたが、それはユリスにとってやはり、

「アハハっ」

笑うべきことだった。

「ユリス！」

「なに？ あんた動揺してんの？ あんたは頭使うタイプの人間じゃないでしょうが。犯人とっ捕まえて訊いたほうが早いわよ」

「あー」

ユリスに言われて、balan は自分の感情をやっと悟る。

(そうか、動揺か)

balan のなかには『請負者が狙われる』という発想がなかったため、ネジがひとつ飛んでいたのだ。人の生活を助け、事件を解決したりする請負者が、感謝されるならまだしも狙われるなど、考えたこともなかった。これまでそういう事件に遭遇したこともない。

(ユリスの言うとおりで)

だからこそ、balan がいくら考えたところで理由などわかるわけがない。訊いたほうが早いのだ。

納得した balan は、首もとの許可証を外しながら老人に問いかける。

「その犯人が現れる時間帯は決まっているのか？」

「いや、特に決まっていないという話だ。出ないときもあるし、すぐに出るときもある。それにあそこは、町で最も広い公園でね。町人たちが行くことも多いのだ。危険なのはわかっているが、神の像がある神聖な場所だけに騒ぎが大きくなるのも困るし、今のところ請負者しか襲われていないという事実がある。だから迂闊に規制できなくて、ね」

「熱心な有翼神信者は、毎日あそこに拝みに行っているんですよ」

補足するように、青年が続けた。

ユリスも許可証を外して balan に渡すと、balan がふたつまとめて青年に手渡す。

「わかった。なるべく目立たないように調べてみよう」

「お預かりします！ 早速登録をっ」

青年は再び奥の部屋へと走ってゆく。ちょこまかと動くさまが子どものようだ。

「これは仕事屋商会からの依頼で、報酬のほうはかなり高めになっている。それだけ我々が期待していると思ってほしい」

言われてユリスが再度詳細の紙に目を落とすと、二百万シヨタの文字が見えた。

(あらあら)

願ってもないお得な仕事だ。片手間でこなすには危険度が高すぎるかもしれないが、バランと一緒にいれば大丈夫だろうという安心感があった。

「ついでにひとつ、訊いていいかしら？」

ユリスはさがっていた壁際から離れて、バランの隣へと戻る。

「あたしたち、『翼のない神』というのを探していますの。なにかご存じありません？」

青年が戻ってくるとうるさそうだから、今のうちに訊いておこうと思ったのだった。

老人は「ああ」と小さく漏らしてから、続けた。

「以前にも探している人がいたが、私にはよくわからなかったよ。だから、代わりと言ってはなんだが、看板についている神の翼が欠けている店を教えてやったんだ」

「翼が欠けている絵？」

復唱したバランに、頷く。

「町のずっと北東のほうに、大きな看板のついた店がある。その看板は端が欠けていて、描かれた神の翼がないように見えるんだ。だからそこだと思ったのだけどね。ただ問題は、そこがなんの店なのか誰も知らないということだ」

「え？」

「人の出入りはあるらしいがね。私も入ったことはないよ。行く気があるなら地図を貸してくれば、印をつけてあげよう」

バランの反応を確認するまでもなく、ユリスは手にしていた地図を手渡した。少しでも可能性があるならば、行って確かめたほうがいい。

受け取った老人は、カウンターの上から赤ペンを取り出して、地図の右上隅ぎりぎりに印をつけた。場所的には、有翼神像広場のさらに北東だ。

「大きな看板はやけに目立つから、見落とすことはないと思うよ」

地図を返してもらって、ユリスはにこりと微笑む。

「ありがとう、行ってみます」

それでも老人は表情を崩さず、小さく頷いただけだった。

ユリスのつくり笑顔がここまで効かないのも珍しいと、バランはこっそり感心する。(ちょっと歳はいきすぎているが、ユリスの相手ならこういうやつのほうがいいよな)

とまた親父的な思考をして、自己嫌悪。

(ああ――)

そこに、

「あっ、あなたがたSSランクの人だったんですかぁ〜!？」

ちょこまか青年が素っ頓狂な声をあげながら戻ってきたのだった。

仕事屋(セトゥリカ)から出たあと、行動の予定を立てるのはいつもユリスの役目だ。

「今日の予定は、大きく分けて三つね。有翼神(ソアイゼ)像広場に行ってみること、翼の欠けた店に行ってみること」

「もうひとつは？」

「あんたがやりかけた仕事があるでしょうが」

「ああ、有翼神の絵探しか」

バランが昨日まわったところは、地図で見ると南西の部分だけだった。つまり、今いる場所の周辺だけだ。

「ちょっと遠回りにはなるけど、東側からぐるっとまわって行って、一周したら埋まるんじゃないかしら？」

「だな」

昨日は途中で諦めて宿に戻ったバランだったが、その案に異存はない。

(意味があるのかないのか、それはわからない)

だが、ユリスと同様になにかを感じはじめていたのも確かだった。どうせ調べるなら、徹底的にやったほうがいい。ふたりとも、動くことを面倒くさがるタイプではなかったのがさいわいだ。

早速昨夜バランが諦めた地点へと向かい、そこから有翼神がついた絵を探しながら歩きはじめた。

昨日と違い明るいため、探す作業も格段に楽で、地図上の丸印はどんどんと増えてゆく。しかもやはり、見事に連なっているようだ。

「各種看板、旗、ドア、壁、窓、ゴミ箱……はあ～、なんでもありね」

ダウオンとは比較にならないその数に、ユリスは感心半分呆れ半分の声をあげる。

「な？ 気になったのも仕方ないだろ？」

「夜の闇のなかで、あんたがこれだけ探したのはすごいわね。――たとえ美少年探しのついでだったとしても」

「だからそれは誤解だって！」

ユリスが本気で言っているわけではないことをわかっていても、つい反応してしまうバランだった。

そうしてふたりは、昼前には東地区の中央付近に辿り着いた。町の入り口付近とは違って、こちらはあまり栄えていないのか、人通りは少ない。

そして不思議なことに、そこから北の方面に有翼神の絵は見つからなかった。

「おかしいわねー。北にはなくって、そのまま北西のほうに続いているのかしら？」

バランが昨日調べた時点で、連なった印のもう片方の先は真西辺りで途切れていた。そこから線を推測すると、そうなる。

ユリスの発言に、地図を持っていたバランは頷いて答えた。

「建物自体も南西方面よりは少ないようだし、ありうるな。だが、像や例の店に行くとなれば、このまま北に行かなきゃならないぞ」

店はいちばん北東側、像はそれよりも少し内側だ。しかしここから北西に進んだのでは、ぎりぎりですめられそうな像はともかく、店には遠すぎる。

「そうねえ」

ユリスはバランから地図を受け取ると、指で道筋をなぞった。

「この作業の優先順位は、はっきり言っていちばん下なんだし、まずはこのまま北上して店に行ってから、斜め下にさがってくればいいんじゃない？」

「ああ、俺もそれがいいと思う」

「決まりね！」

応えながら、ユリスはその場でくるりと一回転する。

この先一体なにが起こるのか、楽しみでたまらないのだ。

(バランに言ったら怒られるかもしれないけど)

請負者(カーレリカ)が狙われる事件なんて、興味深くてゾクゾクしてしまう。

屈辱な日常がなによりも嫌いなユリスにとって、与えられる仕事が大きければ大きいほど、残虐であればあるほど燃えるのだった。本当は、本人ですら自分がマゾなのかサドなのかわからない。

(刺激的なら、なんでもいい)

そのついでに人助けができるなら、もっといい。

だからユリスは請負者になったのだ。

「――楽しそうだな、ユリス」

有翼神の絵を探すという目的が一時的になくなった分、自由に歩いていたユリス。バランにそんな声をかけられて、ふいと後ろを振り返る。

「あんたと違って、人の死やケガにそれほど敏感じゃないからかな」

行方不明の五人の少年のことを心配し、襲われた請負者たちのことを考え、笑顔をつくることのできないバラン。

そんなバランに気づいていたから、ユリスは口にした。それは、五人の少年がすでに生きてはいないことを、覚悟しておけという言葉でもあった。そして同時に、自責の念が見え隠れする。

思いがけない言葉が返ってきて、バランは無意識に足をとめた。それでも、ユリスの真意がどこにあるのかはすぐにわかったから、歩き出しながら口を開く。

「そういうつもりで言ったんじゃない。――すまない」

「うん、わかってる」

「俺もわかっているさ、おまえが言いたいことは」

「それもわかってるよ」

それからふたりの口から漏れたものは、小さな笑いであった。

バランも、やっと笑えたのだ。おかげで少しだけ、心が軽くなった。

(このままいられればいいが、きっとそうはいかないんだろうな)

店は関係ない可能性もあるが、像のある広場ではきっと、なにかが起こるだろう。

そんな予感がしていた。

この国に来てから散々目にしてきた翼を持った神が、自分たちの運命に干渉してくるに違いない、と。

神など信じていなくとも思ってしまう環境が、この国にはあったのだ。

仕事屋(セトゥリカ)の老人が教えてくれた場所に、確かにその店があった。バランの身長と同じくらいはありそうな、大きな看板。それには横向きに立っている有翼神(ソアイゼ)の全身が描かれていたが、老人が言っていたように翼の部分は欠けてなくなっていた。また、看板に書いてある文字は異国のもののようで、なんの店なのかさっぱりわからない。

そのくせやけに古さを感じさせる扉の前に立ち、ユリスは息を吸いながら扉を押し開けた。そして大きな声で呼びかける。

「すみませ〜ん」

なるべく愛嬌のある声と表情で。

(こういうときはやっぱり、女のほうが便利よね)

色気がなくとも色仕掛けでなんとかなる。いざとなったら泣けば相手はうろたえてくれる。一部の相手には通じなくとも、大抵のことならそれで乗り切れるのだ。変に警戒されたくないときは、バランよりもユリスのほうがはるかに向いていた。

店のなかは、昼間なのにカーテンが引かれているため薄暗かったが、意外と狭く全体を見渡すことができた。

(あら、人がいるわ)

客なのか、カウンター席の隅に、長い髪を垂らした男の後ろ姿が見える。他の町人たちとは明らかに違う、正装のような服装をしていた。

(高級な休憩所なのかしら?)

休憩所というのは、主に飲みものやおやつを出してくれる店のことだ。食事がメインの食堂と違い、休憩がメインであるからそう呼ばれていた。

カウンター席の男が振り返ってくれれば、その手もとが見えたかもしれないが、残念ながら振り返る気配はない。

「あのっ」

ユリスがもう一度声をかけたとき、カウンターの奥のドアから、今度は初老の男が姿を現した。

「なにか用かね？」

不快感を少しも隠さない顔で、ユリスを見てくる。その服装はやはり妙にきちんとしていて、そのままパーティーにでも行けそうな感じだった。

(――でも、そんな表情で行ったら雰囲気ぶち壊しね)

心のなかではユリスも睨み返ししながら、言葉ではやわらかく対応する。

「あの、ここってなんのお店なんですか？」

「なぜそんなことを訊く？」

返る男の声音は、やはり鋭い。

(怪しい!)

そう感じたユリスは、咄嗟に確かめる言葉を発した。

「実はあたし、仕事を探してるんです。どんな仕事でも構いませんから、雇っていただけないかしら？」

ここが本当に黒仕事屋(リズ・セトゥリカ)の店なら、これで通じるだろう。そして違うなら、適当にあしらわれるはずだ。

少しの緊張を隠して見つめるユリスの視線の先で、男の痩せこけた頬がぴくり動いた。

背を向けている長髪のほうは、相変わらず微塵も動かない。

やがて「ふう」と、小さく息を吐く音が聞こえた。男の口が動く。

「悪いが、見てのとおり人手は足りている。ここは完全予約制の休憩所でね。人手が足りなくなったら客を減らせばいい。そういう店なんだ」

「そ、そうですか……」

ピンと張りつめていた空気が、一瞬にしてやわらいだような気がした。

男の声も、最初ほど尖っていない。

「さあ、すまないが出ていってくれ。客がいるんだ」

「あ、はい！ すみませんでしたっ」

ユリスは慌てて頭をさげると、まわれ右をして扉まで戻った。出る前にもう一度だけ振り返ったが、カウンター席の男はまだ背中を向けたまま。結局一度たりとも振り返らなかった。

店から出たあとユリスは、少し歩いて行ってから建物の陰に隠れた。窓から様子を見られているかもしれないと思ったから、念のため警戒したのだ。

あとから、他人の振りをして balan もやってくる。

「どう？ 聞こえてた？」

「ああー」

ユリスの確認に、balan はなぜか口ごもる。

「どうしたの？」

「いや……もしかしたらだが、俺がいたことはばれていたかもな」

「えっ？」

建物の壁に背を預けていたユリスは、思わず身を起こした。

ユリスが店を訪ねたとき、店主らしき初老の男は奥から出てきたのだ。カウンター席の男はずっと座っていたようであったし、店の前までふたりで来ていたことを悟られる要素はないはずだった。

balan は「うーん」とアゴをさすると。

「あくまで勘だがな。そんな感じがしたんだ。視線が壁を抜けて、俺のほうまで届いているよな」

「やけに鋭い目でこっちを見てきたのは、確かね」

ユリスの「仕事を探している」という言葉には反応しなかったものの、あの店にはなにかある。ふたりともそう、感じ取っていた。

「あのカウンター席に座っていた人も気になるし……」

「ーなに？」

呟いたユリスに、次に訊き返したのはバランだ。

「店のなかに、おまえが話していた男以外のやつがいたのか？」

「ええ、結局一度も振り返らなかったの。変でしょ？ 普通他の客が来たら、なんとなく目が行くもんじゃない？ おまけにそいつ、別になにかに見入ってたわけでもなさそうだったし」

「いや、ユリス。もっと変なことがある」

バランの言葉は、どこか重かった。

「どうしたの？」

思わずユリスが訊き返すと、いつもとは違う鋭い目をして続ける。

「そいつ、まったく気配がしなかったぞ」

「えー」

バランはユリスよりも、人の気配を読むのがうまい。バランが店の外で待っていたのだから、万が一なにかがあっても気配でわかると思っていたからだった。そうでなければ、たとえ不審がられても一緒に入っていたらろう。バランはユリスだけが危険な橋を渡るのを許さない。そういう性格の相棒なのだ。

（自分だけが危険なのは構わないくせに、ね）

しかしそんなバランでさえ、長髪の男の気配は読めなかったと言う。余程の手練れなのだろうか。

「あたしは気配をさぐるより先に視界に入れちゃったから、全然気づかなかったな。でも確かに、普通の人じゃないような感じはした」

でなければ、ただ振り向かなかったというだけで、これほど気になりはしないだろう。

「どうする？ 少し見張ってみるか？」

そんなバランの問いに秘められた悔しさを感じ取って、それでもユリスは首を振る。

「ううん、バラン。まだそういう段階じゃないわ。あの店がなんか怪しいのは確かだけど、黒仕事屋や例の業者と絡んでいる可能性は、残念ながらまだ低い」

だから今は我慢しろと、はっきり告げると、

「おまえが冷静で助かるよ」

バランはふわりと、やさしい笑みを見せた。

「あんたが代わりに熱くなってくれるから、こっちは冷めちゃうのよ」

「ハハッ」

ユリスがそっぽを向きながら歩きはじめると、バランもなにも言わずにあとを追う。次の行き先は、当初の予定どおり有翼神像広場。そこまで確認しなくとも、ちゃんと伝わっていた。

建物の陰から抜けて、ユリスは一度だけ店を振り返る。当然だがなんの変化もなく、大きな看板だけが目立っている店。翼の欠けた神が、スカートのような服の裾を後ろへとなびかせながら、ひたすら真横を眺めている。

（そういえば、横向きの絵って結構珍しいわね）

ユリスがこれまで目にしてきた有翼神の絵は、大抵正面を向き、対になった翼を持っていた。ところがこの店の看板の絵は横向きの全身像であり、翼はひとつしか見えない。おまけにその

翼が、看板自体が欠けているせいでなくなっているのだ。

ふと、ユリスはあることに気づく。

(もしこの絵の神の片翼が、見えないのではなく最初からないのだとしたら――?)

仕事屋の老人が言っていたことと意味は違うが、『(片)翼のない神』には違いない。なかにいた男たちの反応を無視しても、ここが黒仕事屋である可能性は、まだ残されていた。

「どうした？ ユリス」

看板を見あげたまま動かないユリスに、バランが声をかける。

ユリスは首を振ると、

「戻ったら仕事屋のおじいさんに、もう一度この店のことを訊いてみましょ」

考えていたことと違うことを告げた。まだバランに言うのは早いと、直感的に思ったのだった

。

「ああ。あの人はなんか色々隠してそうだからな」

細い目の向こうで、本当はなにを考えているかわからない。

バランも同じことを考えていたのだと悟って、ユリスはこっそり笑ったあと、バランの背中を追いかける。

「バラン、あたしおなかが減ったわ」

時刻はとっくに昼をまわっていた。

「朝あんなに食べておいて、やっぱり食べるのか」

呆れた声をあげたバランの背中を、思い切り叩いてやる。

「うおっ」

「あたりまえでしょ！ 今度はあたしが奢ってあげるからつきあいなさいよ」

言いながら、ユリスはバランの手もとの地図を奪って広げた。

「……今さらいい娘ぶっても、熟女は降ってこないぞ？」

「そもそも期待してないわよっ」

ふたりが有翼神(ソアイゼ)像の前に到着したとき、ちょうど祈りを捧げている人たちがいた。もっとも、彼らが像の前で頭をさげていなくとも、簡単に気づくことはできただろう。なぜなら、彼らの服装が他の町人とまるで違ったからだ。

地面すれすれまで額を近づけ祈る人々を、後ろから見守っていたユリスは不思議に思う。
(あれって、ちゃんと服として縫製されてるのかしら?)

長い布をただ身体に巻きつけているようにしか見えなくて、いたるところから素肌が見えてしまうのではないかと、勝手に心配していた。

一方 balan は、両手と両翼を空へと広げている像を見あげて。
(あの地下にあった美少年の絵のほうが、余程綺麗だったなあ)

密かにがっかりしていたのだった。

ちなみに、像は balan の身長と同じくらいの高さだという話であったが、載っている台そのものもユリスと同程度の高さがあるので、実際はより大きく見えた。見あげなければ、その顔を拝むことはできない。直径三十メートルほどある円形広場の中央に立っており、その周囲には像を守るように木が植えられている。木と木のあいだには、町人たちの憩いのためだろう、等間隔にベンチが設置されていた。

やがて、像の前での祈りを終えた人々が、帰り支度をはじめた。

ふたりは目配せして、ユリスがひとりの老婆のもとへと向かった。熟女がいたなら迷わず選んだだろうが、残念ながらある程度年老いた人しかいなかった。

「ずいぶん熱心に祈ってらしたわね」

愛想よく話しかけると、深く布をかぶっていた老婆はひょいと顔をあげ、少しだけ布をずらす。だいぶ腰が曲がっているため、それでもユリスから相手の顔はよく見えなかった。

「おんやまあ、あんた、神像さんみてえに綺麗なお人やねえ」

しかし向こうからはぱっちりと見えていたようで、そんなことを言われた。おまけに、今度はユリスに向かって祈りはじめる。

「ちょっと、おばあさん!? あ、あたしに祈っても、なにもしてあげられないわよっ?」

さすがのユリスも慌てて相手の上半身を起こそうとするが、老婆は意に介さない様子で手を合わせつづけた。

「わかつとりますえ。ただ、うちらはなにも見返りが欲しゅうて祈っとるんじゃねえから、これでええんですわ」

「あー」

それを聞いて、ユリスは悟る。

(この国では、神への祈りは感謝の言葉なのね)

いろんな国を旅し、いろんな神を見てきたからわかった。神からの助けを期待して祈りを捧げるところもあれば、こんなふうに、毎日健康に生きていられることへの感謝を伝えるだけのところもあるのだ。

なおも頭をさげつづける老婆に、ユリスはひとつ息を吐いて尋ねる。

「ちょっとお話を訊いてもいいかしら？」

「どうぞ、うちに答えられることなら……」

老婆はその体勢のまま、意外にもあっさりとして承してくれた。

「じゃあ訊くけど、この国はいつから有翼神を祀っているんですの？」

「建国時からと、聞いておるけども」

「まあ、そんなに前から？」

このクーフォシア国は確か、建国から五百年ほど経っているはずだった。

「ええ。初代国王が、翼の生えた神さんにこの地へと連れてこられて、建国に至ったちゅう話です」

「へえー」

ユリスからしてみれば、胡散臭いことこのうえない話であったが、まさかそれを信者の目の前で言うわけにはいかない。ちらりと木陰に隠れているバランに目をやったら、バランが代わりに苦笑していた。

「この像もその頃からあるんですか？」

視線を像に移して尋ねる。よく見ると像は比較的まだ綺麗で、つくられてからそれほど時間が経っているようには見えなかった。

案の定老婆は、まだ地面を向いたまま首を横に振り、垂れている布を揺らす。

「いんや、神さんの姿形を文字以外でも残してええとなったんは、ここ百年ほどのことでのう。そんじゃから、この像が最初につくられたのも五十年ぐらい前の話だわ。今のこの像は二代目でな、五年前台に載せられて、こんだけ背えが高くなったちゅうわけじゃ」

（五年前、か）

どうりでまだ綺麗なはずだ。

「ありがとうおばあさん、勉強になりましたわ」

ユリスはそう丁寧に頭をさげると、それでも顔をあげない老婆から逃げるようにしてその場をあとにした。老婆にばれないよう一度広場から完全に出たあと、ぐるりとまわってバランのもとへと向かう。

（なんか、あんなふうにあんまり下に出られるのも、むずむずするのよね）

自分が崇められるような立場の人間ではないことを、誰よりも知っている。だからこそ違和感があるのかもしれない。

「お疲れさん」

合流したらバランの口もとがにやにやと笑っていて、バランも同じことを考えていたのだろうと悟った。

「もうっ、笑ってる場合じゃないわよ～」

「悪い悪い。だが、おまえが行ったのは予想以上に効果的だったな」

「美貌の有効活用ってやつね」

「拝まれて面食らっていたくせに？」

「あら、あたしがあんたを拝んで同じ目に遭わせてやろうか？」

ユリスがそこまで告げると、 balan は両手をあげて降参した。

「おまえはウィップを振るいながら拝みそうだから、勘弁してくれ」

口では大抵の場合、ユリスが勝つ。腕では balan が勝つ分、それでおあいこなのだ。

ふたりして小さく笑ったあと、広場のほうに視線を向けた balan 。

「――よし、さっきのばあさんも帰ったみたいだ。誰もいなくなったぞ」

木の陰から出て、ユリスは再び、 balan は初めて像の近くへと向かう。

ユリスは像の前で腕組みをすると、

「像をつくりなおしたのが五年前って言ってたわ。で、請負者(カーレリカ)が襲われる事件が半月前から。うーん、そこは関係ないのかしら？」

先ほど聞いた話に、なにか手掛かりがないかと考える。

そのあいだ balan は、像の周りをぐるぐるとまわっていたが、やがて足をとめた。

「なあユリス」

やけに神妙な顔をして、ユリスの名を呼んだと思ったら、

「今から変なこと言っていていいか？」

「へ？」

その台詞自体がもう充分に変なのだが、 balan の表情があまりにも真面目だったから、ユリスは茶化せなかった。

「な、なに？」

(美少年に見えてきたとか言ったら、殴ってやろうかしら)

代わりにそっと、腰もとのウィップに手をかける。

balan の視線は像へと動き、ユリスもあとを追った。

像に変化はない。あたりまえだ。

あたりまえ、なのだが――

「この像、変な気配があるぞ」

耳に滑りこんできた言葉を、ユリスは咄嗟に理解できなかった。

「――はい？」

「だから、まるで生きているかのような、気配がする」

balan の顔に目を戻すが、やはり表情は真剣だ。

「なに言ってるの？ あんた」

「嘘じゃないぞ？ むしろその、店のなかにいたという長髪男よりも気配があるくらいだ」

「んー……」

balan の鋭さはよく知っている。だからユリスは、半分は疑いながらも信じて、そっと目をつむった。そこに気配があるとわかって探れば、あるかどうかわからない状態よりも、ずっと見つけやすいはずだった。

「……わっかんないなあ」

しかしユリスの五感には、なにも触れてこない。像は像のまま、そこに立っているだけだ。

――不意に。

「バラン！ 後ろっ!!」

代わりのようにまったく別の方向から、しかも複数の気配を感じて振り返る。と同時にユリスは、太ももに隠してある小刀を取り出し、その方向に向かって投げつけた。

(これは殺気!)

ためらう必要はなかった。

「うわっ」

「ぐ……!」

ナイフは近づいてきた五人のうち三人の脚に当たり、残りのふたりだけがさらに近づいてくる。

一方、ユリスと背中を合わせたバランの前からも、五人来ていた。バランはすでに大剣を握りしめているが、向こうの武器はクローらしい。握りしめられた指と指のあいだから、鋭い金属の爪が見て取れた。

(なるほどな)

何者かは知らないが、敵は町の住人たちとまったく変わらない服装をしていた。つまり、剣を所持していれば目立ってしまう格好なのだ。通常人々がそれを手にするのは戦場に向かうときくらいで、常に携帯しているのは請負者か騎士・兵士・護衛隊くらいしかいない。そのため、一時的に手のなかに隠しておけるクローは、町人としてまぎれこむには最適な武器なのだった。おまけに、ナイフなどよりもはるかに殺傷能力が高い。

(殺気を完璧に隠されたら、気づかなかったかもな)

バランは口もとに笑みを浮かべた。

こんな状況であっても冷静に分析できるのは、襲われるかもしれないという覚悟があったから。それもなく、突然複数の手練れに襲われたら、太刀打ちできなくとも仕方がない。

「おいっ、何者なんだおま――こら！ 話を聞けっ!!」

これまでに襲われた請負者のことを考えて、少しでも話を聞き出そうとしたバランだったが、相手はまったく無視して容赦なく襲いかかってくる。バランはクローを大剣の腹で受けとめ、相手の胴を蹴りつけてやった。しかしすぐに、ふたり目がやってくる。

「話をする気はないみたいねっ」

ユリスも同様に、ウィップを器用に操ってふたりを相手にしていた。ただ、大剣もウィップも、実のところ対クロー戦にはあまり向いていない。近距離武器としては攻撃範囲が広めな分、懐があきやすいのだ。そのためユリスはときおり小刀も交えて攻撃をしていたのだが、相手も最初の一撃で警戒しているのか、うまくよけてくる。なかなか訓練されているようで、急所にウィップをあてられない。

(一体なんなの!? こいつら……っ)

バランのほうはまだ五人いるのだ、できればそちらにも加勢したかったが、そんな余裕もなかった。

バランはバランで、ユリスのほうが戦いにくいだろうことは十分にわかっていたから、手助け

するため動き出す。まずはユリスの傍からあえて離れ、大きく大剣を振りまわすと、近くにいた敵を弾き飛ばした。不殺を信条としているバランの大剣に、刃はついていない。そのため、当たると斬れるのではなく吹っ飛ぶことが多かった。剣の形をした丸太みたいなものだ。

「ユリスっ！」

それからバランは鋭く名を呼ぶと、敵が倒れているうちに、ユリスへと向かってその大剣を投げてやる。

「あいよ〜！」

バランの意図を理解したユリスは、その大剣の柄をウィップの先でつかまえて、自分の傍に引き寄せた。その際に近づいてきた敵を、バランと同じように大剣を振りまわすことで追い払う。ユリスの力だけでは無理でも、ウィップを補助に使えるユリスにもできるのだ。

それからユリスは地面に大剣を突き刺し、それを盾代わりにして敵と対峙する。あいだにものがあれば懐は守られる。大剣を隔てたその距離は、クローよりもウィップに有利な距離であった。

一方、ユリスに大剣を預けたバランはというと、まるで美少年を狩るときのように生き生きとした目をしていて。

(大剣なしで戦うのは、久しぶりだな)

あまりはしゃがないようにしなくてはと、気を引き締める。

そう、本来のバランは武道家で、大剣を使うよりも生身のほうがはるかに強いのだ。それでもあえて大剣を所持しているのは、相手を威嚇するためと、バラン自身の自制のため。大剣を捨てたバランは、ときに加減を忘れることがあるのだった。

敵のクローを躲し、バランのほうから懐に飛びこみアゴを突いてやる。次の敵にはみぞおちに肘を。さらには後ろ蹴りで、大事な部分を控えめに刺激してやった。

ユリスも負けじと、ウィップで相手の手首を捕まえ、ぐいと引っぱって大剣に顔をぶつけてやる。バランの大剣は意外と用途が幅広く、いずれ拷問道具として貸してもらえないかと、こっそり思っていたのだった。

最後のひとは、ユリスが相手の片足を捕まえたところを、バランがすかさず横蹴りを繰り出して倒した。あとは、ユリスが最初に小刀で足どめしていた三人を気絶させて、戦いは終了。

終わってみれば、ふたりの圧勝であった。

「――ああ、拷問用にひとり残しておくのを忘れていた」

ユリスの性格をよく知っているバランは、倒した相手を像の近くに移動させながら、我に返ったように呟く。

それを聞いたユリスは、像に彼らを縛りつけながら、

「いいわよ、別に。こいつら、なんか言いそうにないし」

残念ではあったが、それを悟られないようさらりと応えた。

なにしろ彼らは、先日拷問したばかりの気弱な犯人と違って、口が堅そうだ。最初に「何者だ」と尋ねたバランを無視したことといい、言う気はまるでないだろう。

「それもそうだな――って、おいユリス。そのロープどこから出した？」

同意しかけた balan は、手際よく作業を進める ユリス に目を向ける。

ユリス は手をとめないまま、やはりさらりと口にした。

「前回の拷問の残りよ」

「持ってきたのか」

お互い道具袋は別々にして腰に提げているから、balan は気づかなかったのだ。

「余ってたからね」

言いながら ユリス は次に、動かない彼らの手から丁寧にクローを外しては、自分の道具袋に入れていく。それももらう気だ。

「おまえなあ」

もっとも、こういうちゃっかりしたところが ユリス の魅力でもある。

balan とてそれをよくわかっていたし、実際今そのロープが役立っているのも確かであったから、呆れた声を出しつつもそれ以上は責めなかった。

そのあとふたりは、通りがかった町人に仕事屋への連絡を頼み、反応が来るまでのあいだその場で待機していたのだった。

しばらく待っていると、広場にふたりの男がやってきた。どちらも見たことのない顔だ。

「仕事屋(セトゥリカ)商会のディウン=ディールです」

先に口を開いたのは、髪をすべて後ろになでつけた、三十代前半くらいの眼鏡の男だった。続いて隣の、いかにも戦地に赴きそうな簡素な鎧を身につけた男も、額に手を当て簡単な自己紹介する。

「周辺地域警備隊のシュレデクだ。協力感謝する」

バランは思わずじろりと、鎧の男――シュレデクを睨んでしまった。それは請負者(カーレリカ)としての条件反射のようなものだ。

(周辺地域警備隊、か)

おそらく国――城から派遣されてきている者だろう。

通常、犯罪や犯罪者への対応は、その国によって異なる。先日犯罪者を捕まえたダウオンでは、請負者などの手を借りて捕まえ、町の者が直接裁くやりかたをしていたから、バランはてっきり国全体がそういう流れなのかと思っていたのだが、どうやら違うらしい。

(『辺境』地域警備隊はないってことか)

ダウオンが城から離れているために、放置されているのかもしれない。

それも腹立たしいことではあるが、もっと腹立たしいのは、彼らは往々にして請負者をバカにしている傾向があることだった。ろくな言葉をかけられたことがない。だからこそ、反射的に睨んでしまうのだ。

それでもシュレデクはまったく怯まず、像に縛られた犯人たちの傍まで歩いていくと、髪をつかんで上を向かせ、その顔を確認しながら話を進めていく。

「こいつらが、ここで請負者を襲っていた犯人なのか？」

その不遜な声音に、ユリスもぴくりと眉を動かしたが、犯人を引き取ってもらわねばならないとわかっていたから、我慢して答えた。

「あたしらは初めて襲われたんだ、そんなことわかるわけないわよ。多分そうだと思うけど」

ぼかして告げたのは、これが模倣犯ではないことも証明できないからだ。この広場は見てのとおり、閉鎖された空間ではない。よってこれまで請負者が襲われたときも、目撃者がいた可能性はあった。そのため、ユリスたちはこうして確かに襲われたが、だからといって絶対に同じ犯人だとは断言できないのだ。

そんなユリスの返事に、シュレデクは「ふん」と鼻を鳴らすと、次に犯人の手もとを調べはじめた。

「……ん？」

語尾をあげたシュレデクに、すかさず仕事屋商会のディウンが声をかける。

「どうしました？」

「いや――」

そこまで告げたあと、シュレデクは振り返って顔をあげた。そして不思議そうな顔で、バラン

とユリスを見やり。

「クローはどうしたんだ？」

瞬間密かに息を呑みこんだのは、そのふたり。

(そういうことか……)

(まだまだ甘いわね！)

そこからの、動き出しは早かった。

バランスが素早くシュレデクの首を捕らえると、逃がさないように自慢の腕力で締めつける。

「う……っ」

同時にユリスは、咄嗟に逃げようとしたディウンの脚をウィップでさらい、その上に馬乗りになった。

「うわあっ！」

「騒いだら刺すわよ」

目の前に小刀の刃を突きつけたら、ユリスが不殺主義であることを知らないディウンは、すぐに静かになった。

「おまえたち、偽者だな？」

バランスが低い声で問うと、それでもシュレデクは諦め悪く答える。

「い、一体なにを、根拠に……」

ぎゅうぎゅうと締めつけられているから、言葉は途切れ途切れだ。それに呼応するのは、ユリスの下の協力者。

「そ、そうですよ！ 我々は仕事屋商会から――」

「ならあんた、あたしたちの請負者ランク知ってる？」

言葉を遮ってユリスが尋ねると、

「えっ？ ええと……」

ディウンはあからさまにうろたえながら、シュレデクのほうに視線を向けた。

「どうなんだ？」

それを見てバランスは、シュレデクの身体を乱暴に揺すってやる。

するとシュレデクはしぶしぶ答えた。

「く……どうせS辺りだろっ」

「なにが『どうせ』だ。俺たちはSSなんだよ、この偽者がっ！」

「うぐっ」

バランスがさらに力をこめると、シュレデクは動かなくなった。わざと気絶させたのだ。拷問するならディウンのほうが楽そうであることは、もうわかっている。

「ひい〜っ」

その場でばたつくディウンは、ここが海なら見事に泳いでいたことだろう。

「さあて、ディウンちゃん。色々吐いてもらおうわよ〜」

ディウンの背中に座りこみ、ウィップを構えたユリスの瞳が怪しく光る。

「待て！ なぜ我々が偽者だとわかったんだ!? そ、それを先に教えてくれっ。そうしたら喋る！」

喋るからっ！」

涙目で訴えるディウンは、拷問をするまでもなく陥落寸前のようなのだ。

残念そうな目で見てくるユリスに、バランは思わず笑ってしまった。

「こいつが『クローはどうした?』なんて言ったからさ」

続きを視線でユリスに委ねると、ユリスはディウンの髪の毛を引っぱって遊びながら口を開く

。

「あたしたちが仕事屋から受け取った依頼書にはね、犯人の武器なんて載ってなかったの！ つまり、本物を見ない限りはわからないはずなのよ。それなのにそいつ、なにもない手を見て言ったでしょ。知ってるってことは犯人側の人間だってことよ」

「く……まさかそのためにわざと取っておいたのか!？」

「ハハッ」

その問いに笑ったのは、バラんだ。

「役立ったんだから笑うんじゃないわよ〜っ」

「すまんすまん」

不思議そうにふたりの顔を見比べるディウンの前に、ユリスはもう一度小刀を突きつける。

「ひいっ!？」

「さあ、教えたんだから次はあんたの番よ？」

「わ、わかりましたから、もうちょっと話しやすい体勢にさせてくださいっ」

「む」

言われて、仕方なくユリスは乗っていた場所を背中から尻のほうへと移動した。

するとディウンは、肘を利用して上半身を少しだけあげると、ユリスのほうに顔を向けてくる

。

(顔を見て話したいタイプなのかしら?)

ユリスがそう、のんびりと考えた、そのときだった。

「――はあっ!!」

「えっ……？」

突然叫んだディウンに、驚いて声をあげたわけではない。叫びと共になにかが発せられ、それがユリスの動きを一瞬とめさせたのだ。

その隙にディウンはユリスの下を抜け出し、一目散に走ってゆく。素晴らしい瞬発力と、素晴らしい速さだった。

バランは一瞬ディウンを追おうとしたものの、振り落とされたまま動かないユリスが気になり、そちらに駆け寄る。

「おいユリスっ？ 大丈夫か!？」

「ごめん、油断した……」

バランの手を借りて、なんとか上半身を起こしたものの、顔色はあまりよくない。

「気にするな。それより、なにをされたんだ？」

傍で見ていたはずのバランにも、状況がよくわからなかった。

ふらつくユリスの身体を支えてやりながら、 balan はユリスの言葉を待つ。

ユリスの唇は、少し震えていた。

「あいつ、口からなにか、吐き出したのよ。毒の霧かしら？ あんなものを身体のなかに入れて
いるなんて、信じられない」

それでも言葉だけはいつもどおりに戻り、 balan は安心する。

「少量ならそれほどの効果はないだろ。とりあえずこれを飲んでおけ」

長く旅をしていると、道具袋のなかには役に立つものが増えていく。

balan は解毒効果があるという小さな木の実を取り出すと、ユリスの口に入れてやった。水も
飲ませてやりたかったが、こうなってしまった今、ここから迂闊に動くことはできない。せっか
く捕らえた犯人を助けに、また誰かがやってくるかもしれないのだ。

(こいつらだって、いつまでも気絶しているとは限らないしな)

あれだけ訓練された動きをしていたのだ、当然身体も鍛えてあるだろう。もしかしたらすでに
気づいていて、逃げ出す隙を窺っている者もいるかもしれない。

考える balan の腕のなかで、ユリスが身じろぎをする。

「ユリス？ 無理をするな」

木の実を無事に呑みこめたのか、立とうとしているのだ。

「大丈夫よ、あたしはそんなにヤワじゃないんだから」

ユリスも当然、今の状況があまりよくないことをわかっていた。

(町人に連絡を頼むのは難しいとわかった以上、あたしか balan のどちらかが、仕事屋まで行っ
てこないといけないんだ)

けれど自分には、今の状態で仕事屋まで戻るのは無理そうだった。ならばせめて、留守番くら
いはできることを見せつけなければいけない。

ふらつきながらも立ちあがったユリスは、 balan の手を払いのけて像のほうへと歩いてゆく。
手にはしっかりと、ウィップを握りしめていた。

「おいユリス！」

「大丈夫だったら。あたしが見てるから、さっさと行ってきてよ balan 。日が暮れる前に戻っ
てきてくれないと、それこそ本当にやばいわよ？」

暗闇に紛れて襲われたのでは、さすがのふたりでも楽勝とはいかないだろう。しかもユリスは
こんな状態なのだ。

それでも balan は、そこから動こうとは思わなかった。

ゆっくりとユリスの傍に近づいていき、その足もとに座りこむ。

「ちょっと、 balan っ？」

ユリスが頭から怒鳴ろうとすると、

「俺たちは殺さずを誓いあった仲じゃないか。殺さないってことはつまりな、そのままだと相手
が死んでしまうような状況には残していかないって、ことでもあるだろう？」

許しを請うように見あげた balan の瞳に、ユリス自身が映る。

「でもっ、仕事屋の話じゃ、請負者で死んだ人はいないって言ってたじゃない。あいつらの目的

は殺しじゃないのよ。だからもし襲われたって、殺されはしないわっ」

必死に訴えるユリス。

その脚が震えている本当の理由に、気づいている balan は半分呆れた声を出す。

「おまえなあ……ちょっとは自分の見た目を考えろ！ 殺されないなら殺されないで、なにかエロいことされるかもしれないじゃないか」

「エー」

balan のその言葉の選択に、ユリスは必死になっていた自分がバカバカしくなった。ひとつ大きな息を吐き出すと、強がりをやめてしゃがみこむ。

「美少年大好きなあんたのことだもの、あたしがなにされようが興味ないと思ってただけだね」

口で「心配してくれてありがとう」とは言えなかったから、代わりに手を伸ばして、今は届く位置にある頭を撫でてやった。

balan も、払いのけたりせずにおとなしく撫でられている。

「興味はないが、守る義務はあるだろう？」

「えっ？」

「お互いが『運命の人(ラーティフェン)』と出会うまで、邪魔しながらも守りあう！ 俺はそういう賭けだと思っていたがな」

そんなのは初耳だ。

しかしユリスは思い出す。確かにこれまでも、自分が balan の邪魔をしたため貞操の危機に陥ったとき、邪魔をし返してきた balan に結果的に助けられたことはあったのだ。逆にこちらが助けたことも。

「……アハハ！」

ユリスは小さく笑うと、balan の額をコンと小突いてやる。

「いてっ」

「そういうことに、しておいてあげるわよ」

大して痛くはなかったが、balan はわざと額を抑えると応えた。

「じゃあ俺が熟女以外に襲われそうになっても、ちゃんと助けるよ？」

「はいはい」

軽く返事をしたユリスの身体が、ふらりと揺れ崩れそうになる。

「おいっ」

balan は慌てて支えと、肩を貸してやった。

「ごめん、ひとりで残らなくてもいいんだと思ったら、気が抜けた……」

「ったく、そんなことだろうとは思ってたけどな」

balan はユリスに気を遣わせないよう、心のなかで安堵の息を吐く。

(問題は、この状況をどうやって打開するかだな)

もうすぐ夕方だ、夜の祈りをしにくる人がいてもいいはずなのに、不思議とあれからひとりも町人は訪れない。国の警備隊がいるとわかった以上、直接彼らを呼びにいつてもらってもいい

のだ。しかし、誰も来ないのでまるで話にならない。もっと早いのは他の請負者が手伝いに来てくれたり、仕事屋のほうから異常を悟って来てくれたりすることだが、どちらにせよ待つことしか選択肢がないのがもどかしかった。

肩口にあるユリスの青ざめた顔を見やって、 balan はぎりりと自分のこぶしを握りしめる。
不意に――

「私が行ってきてやろうか？」

すぐ近くから声がして、 balan は「はっ」と顔をあげた。

(どこだ……!?)

気配はしない。――いや、むしろずっとしているのだ。像の気配は。しかし生きていないものが動くはずはなく、当然喋るはずもなく。わかっているのに、それでも balan は像のほうを見ずにはいられなかった。

するとその後ろから、ふらりと人影が現れる。一体いつからそこにいたのか、黒いよそ行きの服に身を包み、長い髪をなびかせた男だ。

「あんたは――」

見覚えがあった。確か、ダウオンを訪れた日の朝、すれ違った男。たった一度しか見ていないのに balan がそれを憶えていたのは、男にしては長すぎる髪が特徴的だったからだ。

(向こうも俺を憶えているのか?)

それがわからなかったから、続けられなかった balan の代わりに、

「あの店に、いた人ね」

小さく頭を動かしたユリスが続けた。

その言葉には、 balan も思わず息を呑む。

「えっ？」

(あの気配のなかった男か!?)

もっと厳密に言えば、気配のない男。今現在だって、確かにそこにいて話をしているのに、不思議と気配は感じられない。ダウオンで見たときにちゃんと気配があったのは、もしかしたら、 balan に道を譲ってもらうためにあえて残していたのかもしれない。

(だが、それができるなら余程の腕だろう)

表情は穏やかで、その目に敵意は感じられないが、まさか――

「あんたが、黒仕事屋(リズ・セトゥリカ)なのか？」

その服装といい、いた場所といい、確信はなかったが可能性はあった。

低く問いかけた balan に、男は「ふふ」と含み笑いをする。

「私は違うさ」

否定はしたが、黒仕事屋そのもののことは知っているらしい。

balan はユリスを庇うようにして身体の後ろに隠すと、男をさらに強く睨みつけた。

(なんだかよくわからないが、こいつはかなりやばい感じがする)

長年請負者をしてきた balan の、勘というやつなのか。心臓が必要以上にその存在を訴え、皮膚はまるでびりびりと振動しているかのようだった。

そんな balan を見おろして、男はさも楽しそうに口もとを歪める。

「私のことなど、どうでもいいだろう？ 代わりに行ってきてやろうかと言っているのだ」

「行く？ どこにだ？」

balan がわざととぼけて尋ねると、男は肩をすくめた。

「仕事屋を呼びに、さ」

「警備隊は呼べないのか？」

「呼べるが、警備隊だけ来たところで、おまえたちにはそれが本物かどうかもわからないだろうに」

「あ——」

言われて、確かにそうだと balan は思った。

(わからなければ、さっきと同じようなことが起こるかもしれない)

本物の振りをして、仲間を助けようとするか。また、もし本物が来たとしても、こちらが信用できなければ結局は同じことなのだ。そんなことになるくらいなら、顔を知っている仕事屋に来てもらったほうが、話は早い。

ただひとつ、気になるのは——

(こいつは一体いつから、俺たちを見ていたんだ？)

さきほどの言葉はどう聞いても、騙されそうになった一部始終を見ていたゆえのものだった。

「仕事屋の誰ならわかるのだ？」

訊かれても、すぐには答えられない balan 。相手が何者かわからない以上、迂闊に話しては仕事屋に迷惑がかかるかもしれない。

しかし、そんな balan の心情も手に取るようにわかるユリスは、balan の後ろからあっさりと口を開く。

「窓口のふたり、若い青年と、歳のいったおじいさん。どちらかなら」

「おいユリス！」

「とりあえず、信じておこうよ balan 。どうせこのままじゃ八方塞がりなんだ。今さら裏切られたところで、これ以上事態が悪化するわけでもないし」

「そりゃそうだが……」

balan はまだ不安が残っていて、相変わらず男を睨めていた。

しかしユリスには、勝算があったのだ。

(だって、「誰ならわかる？」なんて訊くんだもの)

それは明らかに、こちらが自分を信用するかどうか、確認するための問い。なぜなら、本来ならば訊くまでもないことだからだ。仕事屋に赴いて、窓口の人間に会わない人などいない。この惨状を見ただけで事情を呑みこめているらしいこの男が、それに気づかないわけがなかった。

不意に、男の表情が胡散臭いほどの笑みに変わる。瞬間周りの空気もやわらいだ。

「賢明な判断だ。信じてくれてありがとう、お嬢さん」

男はゆっくりと近づいてくる。

素早く片膝を立てた balan は、すぐに飛びかけられる準備をした。

当然男はそれに気づいて、足をとめる。

「おっと、襲いかからないでくれよ。お嬢さんにいい薬をあげようと思ったのだ」

「なに？」

そう言われては、バランも強くは出られない。急に雰囲気を変えたことといい、怪しいには違いない男であったが、ユリスの体調が気になるのも確かだった。

「……くそっ」

バランは仕方なくユリスの前からよけると、男にその場を譲った。

ユリスは自分の腕を支えに、なんとか上半身を起こしてはいるものの、まだ全身に痺れが残っている感じがして力が入らない。

男はユリスの傍にしゃがみこむと、そっと頬に触れてきた。その手には大量の指輪がついていて、触れた部分が冷たかった。

「ふむ、斑点などは出ていないようだな」

そう呟くと男は、指輪のひとつを抜き取って、そのなかからなにかを取り出す。どうやらその大量の指輪は物入れらしい。

(この人、薬師(くすし)なのかしら?)

ちょっとした粉や液体なら、大きめの指輪になら簡単に入れられるだろう。

ユリスがそんなことを考えているあいだに、男はその取り出したもの——小さな袋に入った液体のようだ——を、なぜか自分の口に含んだ。

(えっ?)

と、ユリスが目を見開いた瞬間に、唇を重ねてくる。

「ん……っ」

咄嗟によけようとしたのだが、身体はうまく動いてくれずに捕まってしまった。

(なにこいつ!?)

ぐいとアゴを上に向けられ、唇の隙間から入りこんできた液体がそのまま喉もとをくだっていく。その感覚が苦しくてむせそうになったとき、唇と身体を放され地面に転がった。下を向いて、げほげほと咳をする。

「ユリス！」

バランがユリスに近づくあいだに、男はさっと立ちあがると、

「では行ってこよう」

何事もなかったかのように、すいと歩き出した。

バランはその背中に問う。

「待てよ！ なにを飲ませたんだっ？」

それがわからなければ、あとの対応も困るからだった。違う薬を飲ませようにも、相性が悪ければ困る。また、当然ながらそれが薬ではなく新たな毒である可能性だってあるのだ。

男は数歩進んでから足をとめると、振り返らずに答えた。

「おまえが飲ませた、ナラナの実の効果を高める薬だ。その程度の毒ならそれで十分に治る」

そのまま走り出す。そうしてあっという間に、バランの視界から消えていった。

(いくらなんでも、ただ者じゃなさすぎるだろ……)

バランが啞然としたのも無理はない。

ユリスが男に捕らわれた瞬間、助けようとしたのだ。しかし動けなかった。それは、これまで完全に気配を絶っていたあの男が、突然殺気のような無言の圧力を放ってきたからだ。それでもバランと戦う気はなかったのか、ユリスを放したあとはすぐに戻ったのだった。

(あんな気配は、今まで感じたことがない)

本気でやりあったら勝てない相手かもしれないと、バランは初めて恐怖を感じた。

「……バラン」

名を呼ばれて我に返ったバランがユリスを見やると、まだ地面に転がっているユリスは、両手で唇を抑え珍しく涙目になっていた。

慌てて上半身を抱き起こしてやると、ますます青ざめた顔で訴えてくる。

「吐きたい〜」

「いや、ちょっと待て！」

いつもなら「どうぞ」と言うところだが、飲まされたのは薬なのだ。しかもあの男は、それを飲んでおけば体調は治るだろうと言っていた。男自身をまだ完全に信用したわけではないが、殺すつもりならそんなまわりくどいことをするまでもなく殺せただろうことを考えれば、薬のことについては信じてもいいように思えた。

「我慢しろユリス。毒が抜けたらいくらでも吐いていいから」

「その前に口が腐っちゃうわよ〜っ」

余程嫌だったのかそんなことまで言い出すが、今は安静にすることが先決だ。

「じゃあ俺が舐めて消毒してやるか？」

冗談めかして言ってみたら、

「うげっ、それじゃあますます吐き気するじゃないの！ 勘弁して……」

本気で嫌がり静かになったユリスに、バランはちょっとだけショックを受ける。

(どうせ俺なんて俺なんて俺なんて……)

相棒とはいっても恋愛のパートナーではないのだから、仕方がないといえばそうなのだが、なんだか悔しかった。

しかしユリスはユリスで、バランのそんな横顔を見て、相棒ゆえにその心情を読み取れてしまう。

(あ、なんか傷ついてる)

ユリスにとってみれば、相手がバランでなくてもまったく同じことを言うところなのだが、バランにそれは伝わらなかったようだ。

ユリスは自分で少し身体を起こすと、わざとバランの腕のなかから抜け出て、背中と背中をくっつけた。

「ユリス？」

「あんたはさ、こうやって近くにいてくれればそれでいいのよ。みっともないところは見せられないと思えば、吐き気はなんとか我慢できるから」

「……ああ」

balan はそれで納得したのか、合わせた背中から安堵感が伝わってくる。それから、やけにやさしい声音で、

「ユリス、少し眠れ。動きがあったらちゃんと起こすからよ」

「ん——ありがと」

だからユリスも、同じように返すことができた。

そうして眠りについてユリスを見守りながら balan は、結構時間が経ってしまったため意識を取り戻しはじめた犯人たちを再度気絶させつつ、男が戻ってくるのを待った。

仕事屋へ本当に連絡してくれるのか、警備隊を連れてきてくれるのか。百パーセント信用できるわけではない分、気が抜けない。もう一度襲われる可能性だって、ないわけではないのだ。

陽が落ちはじめた頃には、寝ているユリスの呼吸も顔色もだいぶよくなってきて、 balan はやっと少しだけ安心する。

しかし息をついたのも束の間。

(ん？ 人の気配が近づいてきているな……)

balan はすぐに立ちあがると、傍に置いておいた大剣に手をかけた。

気配があるということは、少なくともあの男ではない。ただ、敵にしては気配をまったく隠していないのが、逆に異常だった。囷なのか、それとも——

「 balan 」

呼ばれて下を見ると、ユリスも目を開けていた。 balan が空気を変えたから気づいたのだ。

「寝た振りしてる」

「うん」

balan に小声で言われ、ユリスはすぐに頷く。そのほうが相手の隙をつけると、簡単に理解できたからだ。

(足音が近づいてくるわ)

地面に耳をつけているから、より鮮明に伝わってくる。しかし、そうして普通に足音をさせているというのも、やはり変な話なのだ。

「 balan 、ふたりいるみたい」

ユリスが身体を動かさずに告げたら、 balan は声を出さずに頷く。

balan も近づいてきた気配に、それを読み取っていた。

まるでこの広場だけ世界から切り取られたような、静寂をまとった空間に、やがて声が届く。

「おーいっ」

「あ——」

像の正面のほうから聞こえてきたそれは、覚えのあるものだった。そして手を振っている姿を捉えると、 balan は呟く。

「仕事屋の……」

青年の名前を言いたかったが、残念ながら聞いていなかった。

balan の緊張が途切れたのを悟って、ユリスも身体を起こす。だいぶ楽になっていて、ふらつ

かずに立ちあがることができた。

仕事屋の窓口にいた青年は、ふたりの傍まで走り寄ってくると、不安そうな表情をして訊いてくる。

「あの、広場の周りに立ち入り禁止のロープが張ってあったのですが、入っても大丈夫なんですよね？」

「え？」

思わず顔を見合わせたのは、当然バランとユリスだ。

バランは、心のなかで呟く。

(どうりであれ以来誰もこなかったはずだ)

もしかしたら相手は、バランが根負けするのを待っていたのかもしれない。実際、バランの精神状態はかなりぎりぎりにあった。そのまま夜に突入していたら、擦り切れていたかもしれない。

一方のユリスは、やはり違うことを考えていた。

(それなのに入ってきていたあの男は、やっぱりあたしたちを助ける気があったんだわ)

理由はわからないが、実際にこうして仕事屋の人が来てくれたことといい、自分の体調が回復していることといい、状況はあまりにも明らかだ。唇を奪われてしまったことは悔しいことこのうえないが、感謝しないわけにはいかないだろう。

「そのロープ、きっとあたしたちをここに閉じこめるために、犯人がやっていったのよ」

ユリスが答えると、青年は「やはり！」と大袈裟に手を叩く。

「では他にも共犯がいる可能性があるのですね？」

「すまん、ひとり逃がしたんだ。そいつ以外にもいるのかどうかは、俺たちにもちょっとわからない」

バランが素直に告げると、青年と一緒にやってきた長身の男が前へと出てくる。

「それでも充分だ。これだけの相手を一度に捕まえられるのも珍しい」

本気で喜んでいるような口調ではあったものの、バランはその服装が気になっていた。偽警備隊員だったシュレデクと見比べても、違いがわからないような鎧を身につけていたのだ。

長身の男もその視線を追い、同じ鎧の男が倒れているのに気づいたのか、小さく舌打ちをする。

「……なるほど、それでユーノくんと一緒にいけという話だったのか」

それだけで、自分の置かれている状況を悟ってしまったらしい。

「ユーノくん。彼らに、僕が間違いなく周辺地域警備隊の隊員であることを、証明してくれたまえ」

「えっ？」

突然振られたせいか、仕事屋の青年——ユーノは思い切り狼狽えた様子で、口もとはパクパクと動いていたが言葉は全然出ていなかった。

そこでこちらからは、ユリスが前に出て、

「本当ですか？」

凄みを利かせて訊いてみたら、ユーノは何度も首を振った。

「ほっ、本当です！ このかたーシュレdekさんは、間違いなくグサラ担当の警備隊員です。過去に何度もお世話になりましたからっ」

「最初からそう言えばいいんだよ、最初から」

シュレdekと紹介された長身の男は、呆れたように呟いたあともう一度前に出る。

「これで信用してもらえたかな？ 今城からの応援を頼んでいるところだ。すまないが、もう少しここにとどまって敵襲に備えてくれ」

なるほど、万が一に備えた賢明な判断だ。偽者よりも余程頭が切れるらしい。

(ならやっぱ、伝えておいたほうがいいか)

balanは「それは構わないが、」と前置きしたあと、言ってやった。

「実は残念なお知らせがあるんだ」

「なんだ？」

「あいつ、あんたの名前を騙っていたぞ。あの格好でそれじゃ、他に人を騙していないと考えるほうがおかしい」

それはさすがに予想外だったのか、シュレdekは大きく目を見開いたあと、ツカツカと偽シュレdekの近くまで歩いていく。まだぐったりと倒れている身体をひと目見やって、

「気絶させたのは何回目だ？」

「二回目が、一時間ほど前だ」

「了解。気がついたら思い切り搾ってやろう」

唇の端をニヤリとあげる。怒らせると怖いタイプの間人らしい。

それから他の警備隊員も合流し、城からの応援が駆けつけるまで、何事もなく時間は過ぎていった。例の長髪男は、結局戻ってはこなかった。

翌日の午前中は、まだ本調子でないユリスを休ませ、バランがひとりで町をうろついていた。
(有翼神(ソアイゼ)の絵探しは、まだ途中だったからな)

黒仕事屋(リズ・セトゥリカ)を探すのはふたりのほうがいいが、これならばバランひとりでもできる。

長髪男が変な薬を飲ませたおかげか、ユリスの体調はだいぶよくなってはいた。それでも念のため休ませたのは、ユリスに十分な睡眠を取らせるためでもある。

(なーんか、嫌な予感がするんだよな)

地図を片手に、昨日とは逆の西まわりで絵を追いながら、バランは考えていた。

昨日ふたりは、確かに襲われた。前にも請負者(カーレリカ)が襲われているという、有翼神像の前で。そして犯人たちを捕らえたあと、彼らを助けにきた者がふたりいた。ひとは捕らえ、ひとは逃した。そのあとはさいわい何事もなくすんだのだが、バランが気になっていたのは、助けにきた者がいたことだった。

(やつらの本当の目的は、請負者を襲うことそのものではないんじゃないか?)

それだけが目的なら、負けた者は見捨てたって構わないはずだ。少なくとも、バランがこれまで見てきた世界では、そのほうが一般的だった。危険を冒してわざわざ助けにくるなんて、三流のやることだ。一流はそもそも捕まらず、二流なら見捨て、見捨てられたほうは自力で逃げるか死ぬ。

(それでも助けにきたということは、あいつらにまだ利用価値があるということなのか)

言い換えれば、バランたちにやられたあとも誰かを襲う予定があった、ということになる。つまり事件はまだ、終わっていない可能性があるのだ。

昨日捕まえた犯人たちは、周辺地域警備隊と城から来た応援隊が連行していった。しかしまだ、なにも吐いていないらしい。朝仕事屋(セトゥリカ)に寄ったとき、ユーノがそう言っていた。

(報酬はあとでユリスと貰いにくる、とは言ったがー)

本当に今の段階で貰ってもいいのか、バランは少し迷っていた。

そんなバランの心とは裏腹に、次々見つかる有翼神の絵。地図に印を入れながら追いかけていったら、北西地区をぐるりとまわって、有翼神像広場の斜め下辺りを通り、昨日途中までチェックしていた地点で綺麗に繋がった。妙な形になった。

(うーん、見覚えがあるような、ないような)

ユリスならなにか気づくだろうかと、バランは急いで宿のある南西地区へと戻る。

昼すぎに宿に着き、ユリスを起こして隣の食堂に行った。

「やっぱり、たくさん寝たあとの食事は最高ね！」

皿の上のものを一瞬で平らげていくユリスは、どうやら絶好調らしい。

バランは安心して、頃合いを見計らいユリスに地図を見せてやった。

「これ、午前中に完成させてきたんだ」

「あ、地図の印？」

「そうだ」

ユリスはやっと手をとめると、バランからそれを受け取る。

そして次の瞬間にはもう一笑っていた。

「アハ！　なんだ、そういうことなのね？　アハハっ」

「ユリス？」

眉を顰めるバラン。

ユリスはまだ笑いながらも店員を呼ぶと、自分の前にある皿をさげさせた。あいた場所に地図を置くと、道具袋からペンを取り出す。

（そうよ、あたしはあのとき、振り返ったの）

そしてもう一度あの店の看板を見やって、なにかあるかもしれないと思った。

ユリスのその直感は、間違いではなかったのだ。

町の中央辺りを通っている、バランがつけた印の一部から、例の店へと向かって弧を描く。上下に二本。

それからバランに地図を見せると、鈍いバランでもすぐに気づいた。

「これは……あの店の看板についていた神の絵の、シルエット？」

「そう、しかも翼がないバージョン」

「ああー」

翼を描きこんでわかりやすくしたのはユリスなのだから、もともとは翼がない、ということになる。

そして――

「ねえバラン、もうひとつ気づくことはない？」

にやにやしなながらユリスが尋ねると、バランはもう一度地図に目を落とした。

「黒仕事屋は、『翼のない神の、翼のところにいる』んだったよな」

「ええ」

ユリスはバランの視線が動くのを見ていた。バランの瞳が、大きく開かれるのを待っていた。

やがて、バランの声音が低いものになる。

「おい……」

「あたしが描いた、あると仮定した場合の翼の中央にあるものは？」

「有翼神像広場、だ。――！　待てよ、じゃあ俺がああの像に感じた気配は!？」

「それこそ黒仕事屋のものだったと、考えられるわね。あの店だって無関係ではないだろうけど、本命はやっぱりこっちよ」

「なんか混乱してきたぞ……」

考えることがあまり得意でないバランは、テーブルに両肘をつくと頭を抱えた。

「あの像自体が黒仕事屋だっていうのか？　んなバカな！　それに、その場合昨日の長髪男はどうなる？　やっぱりあいつも関係者じゃないのかっ」

「落ちつきなさいよ、バラン」

ユリスとて、ただ寝ていたわけではない。夢のなかでも色々と考えられるのが、ユリスの特技

でもあった。その結果思いついて、まだバルンに伝えていないことがある。

「長髪男のことはあたしにもわからないけどさ、あいつが黒仕事屋じゃないことは、本人も否定したし本当だと思うのよ」

冷静に分析するユリスを見て、バルンも落ちついたのか店員に水を頼んだ。それを飲み干してから、続ける。

「……まあな。おまえはこうして確かに元気になったし、ユーノたちもちゃんと来たし、昨日言っていたことは信じてやってもいいとは思いますが」

「次に会ったときには、吐き気抑えないわよ、あたしは」

「ここで言うな、ここでっ」

周りにはまだ、食事の人たちがたくさんいるのだ。

そこまで気遣えるほど落ちついた様子の方を見やっ、ユリスはやっと話の核心に迫っていく。

「ねえバルン、思い出してよ。あたしがおばあさんに聞いた話」

「あの、熱心に祈っていたばあさんか？ 有翼神が祀られはじめたのは、建国時からとか言っていたな」

「そこじゃないわよ。あの像、五年ほど前にわざわざ台の上に載せられたって言ってたでしょ」

「――ははーん。つまりおまえは、その台の部分に人が入っていた可能性がある、言いたいんだな」

バルンは感心して目を細めた。

「なるほど、像そのものが気配を持つより、よっぽど現実的な話だ」

「黒仕事屋が『翼のない神の、翼のところにいる』なんて話も、町全体を使った大掛かりな仕掛けだった。それってつまり、町のお偉いさんが絡んでるってことよ。だからそのために像を利用したとしても、全然変じゃないわ」

「むしろ自然だな」

黒仕事屋を一からつくったのか、どこかから呼んだのか、それはわからない。ただ、誰かに必要とされていたことは、間違いならしい。

バルンは椅子から立ちあがると、近くにいた店員に会計を頼んだ。

(俺たちは、黒仕事屋そのものを糾弾するつもりはない)

結果的に彼らに助けられていることもたくさんあるのだと、わかっているからだ。よって、この町の上層部の一体誰が黒仕事屋と絡んでいるのかなど、調べるつもりもなかった。今調べなければいけないのは、ダウオンでさらわれた五人の行方と。そこに絡んでいるだろう謎の業者、なのだ。

「バルン！」

カウンターに向かおうとしたバルンが振り返ると、ユリスは座ったまま布袋を投げた。なかには当然、お金が入っている。

「あたしの分。これで今からは対等だからねっ」

(体調はもとどおりだから、気遣いはいらさないわ)

ユリスはそう言いたかったのだ。

balan は眉尻をさげた顔で笑うと、小さく頷いて前に向きなおる。

やっと席を立ったユリスは、 balan を待たず先に外に出た。容赦なく照りつける日光のなかで、精一杯の伸びをする。

(うん、身体の調子はばっちりね！)

午前中もずっと寝ていたことが効いているのだ。 balan に感謝しなければならない。

(昨日足を引っぱっちゃった分、頑張らなきゃ)

ユリスはやる気にメラメラ燃えていた。

後ろから、会計を終えた balan が出てくる。

「ユリス、先に仕事屋に顔を出してから行こう」

「え？ なんで？」

すっかり広場に直行する気になっていたユリスは、身体を反らせたまま振り返った。

「ユーノもおまえのこと心配してたし……それに、報酬を受け取りにくるように言われているんだ」

「ユーノはともかく、報酬？ でも、犯人全員捕まったわけじゃないし、また起きない保証なんてどこにもないのよね」

そう、ユリスも balan と同じように思っていたのだった。

「ユーノはともかく、いつも隣にいるあのおじいさんは？ なんか言ってた？」

二度も「ともかく」と追いやられたユーノをかわいそうに思いながらも、 balan はユリスの隣まで歩いていくと、今朝寄ったときに告げられたことを教えた。

「また襲われたときはもう一度仕事を出すから、今回はこれでいいと」

途端に、ユリスの瞳が怪しく光る。

「ふうん……」

「な、なんだよ」

「じゃあやっぱり、あのおじいさんは黒仕事屋と繋がりがあるんだわ」

「えっ!？」

balan にとっては思いがけない言葉も、ユリスにはすべて繋がっているものだった。

「だって、あの店をあたしたちに教えたのっておじいさんじゃない。店が黒仕事屋と繋がっていた以上、知らなかったはずがないわ。あのおじいさんはきっと、ヒントを出す係りなのよ」

「あー……なるほどな」

言われてみれば、 balan にも納得できることだった。

「そうすると、あの場所で襲われたのも黒仕事屋に関係しているのか」

(俺たちにあの仕事を振ってきたのも、作為的なことだったのか?)

だがそれにしても、本当に困っているふうであったのが気になる。少なくとも balan の目には、自分たちが依頼を受けたとき心から喜んでいたように見えたのだ。

「そこまではわからないけど、もう狙われない可能性のほうが高い理由くらいは、知ってるのかもね。まあ詳しいことは多分、黒仕事屋に訊いてみたほうがいいよ。あのおじいさんは口堅そう

だし」

ユリスは歩き出しながら応えた。

(そうじゃなかったら、仕事屋のなかで長くなんて働けないもの)

長いあいだ仕事屋の窓口で多くの人を見てきた、というのは嘘ではないだろう。人よりも人を見る目が必要だったのは、黒仕事屋に余計な人間を近づけないためであったのかもしれない。

(だから雇われた、可能性もあるわね)

そうして仕事屋へと向かったふたりは、ダウオンのときと同様にどこか釈然としないまま報酬を受け取った。

そしてさらに――

「あのっ、よろしければこれもどうぞ！」

ユーノがそう言いながら差し出してきたものが、一枚の絵画だったから balan は焦った。

(まずい！　――ん？)

しかし、受け取ったユリスの手もとに目を落とすと、それは見覚えのある人物の絵だったのだ。いや、絵に見覚えがあるだけでなく、そのタッチにも見覚えがあった。そこで balan はそっと息を吐く。

(これなら別に燃やされてもいいか)

そう、その絵は、

「こ、これってもしかして、セールト＝テックスの絵!？」

とユリスが叫んだとおりに、セールトの絵だったのだ。

それを受けて、balan も続ける。

「しかも、描かれているのは姫さんだな」

数日前にダウオンで別れたアスティナ姫が、絵のなかで美しく微笑んでいた。

「おや、ご存じでした？」

ユーノが不思議そうな顔をして訊いてくる。どちらも知らないと思っていたのだろう。

balan はアゴに手を当て、ごまかす言葉を考えたあと。

「ああ、セールトはちょっとした腐れ縁で、知っている仲だ。姫さんのほうは、ここへ来る前に一度会っている」

するとユーノは「そうでしたか」と頷き、

「そのセールトさんは、城に寄ってからこの町にいらしたんですよ。それで、町なかで他の絵を盗まれたと言って、ここに絵を捜す依頼を出していったんです」

「ほう？」

balan が思わず口に出したのは、その盗まれた絵に覚えがあったからだ。

(もしかして、あの美少年の絵か!?)

ダウオンでの事件のとき、犯人がアジトにしていた小屋の地下で見かけた絵。なぜセールトの絵がそこにあるのか不思議だったが、手癖の悪そうなあの男が盗んでいたと考えれば納得がいく。少年を集めている業者に、一緒に売ろうとしていたのかもしれない。

(なんてことだ……こっそり持ってくればよかった！)

それどころではなかった自分の精神状態が恨めしい。

バランがそんなバカなことを考えているあいだにも、会話は進んでゆく。

「もしかして、その依頼の報酬がこの絵ですか？」

ユリスが尋ねると、ユーノは大きく頷いた。

「はい、そうなのですが……依頼の期限が切れても引き取りにこないところを見ると、依頼人はもうこの町にいらっやらないようなので」

「――まあ、それは確かだと思いますわ」

「はい？」

断言したら今度は首を傾げたユーノに、ユリスは説明してあげる。

「彼、あたしのストーカーみたいなものです。同じ町にいたら、まず間違いなくあたしのところに来るはずですよ。来ないということは、つまりこの町にいないということ」

それはユリスにとって迷惑極まりなく、できれば勘弁してほしいことなのだったが。

セールトの奇行を知らないユーノは、なぜか顔を赤らめて応えた。

「ははあ、なるほど。ユリスさんほど美しい人なら、それこそストーカーさんのひとりやふたりくらい、いて当然ですよね！」

「変な同意はしないでちょうだいっ」

軽く怒鳴るユリスの隣で、バランが口を抑えて笑っていた。

「あ、でも、ストーカーさんが描いた絵なんていらないですよ。しかも他の女性を描いたものですし」

そういう問題ではないのだが、いらないのは確かなことだった。それにユリスはもうすでに、燃やしたくてたまらなくなっている。

そこでユリスは、口調を戻してわざと大真面目な顔で語ってやった。

「正直な話、燃やすくらいしたほうがいいと思いますわ」

「えっ、そんなにですか!？」

「自国のお姫さまを描いた絵を燃やすなんて、とんでもないことだと感じるでしょうけど、あのセールトの絵ですもの。呪いをまったく信じないあたしですら、持っていれば呪われるかもしれないと感じるくらい、禍々しいものを秘めていますのよ」

実際、セールトに絵を持たされたとき、ユリスはろくな目に遭わなかった。ユリスがセールトを嫌っている理由は、そこにもあるのだ。

そんなユリスの真に迫った顔を見て、ユーノの喉がごくりと鳴る。

「わ、わかりました！ ではこの絵はこちらで処分しますからっ。絵のことは忘れてください！」

ユリスの手から絵を取り戻すと、さっと自分の後ろに隠した。ユリスとバランからは見えないように。

(まったく、からかい甲斐のある人ね)

ユリスは心のなかでだけ笑い、顔にはまだ真剣さを残したまま、丁寧に頭をさげてやった。

「ありがとう、お願いしますわね」

これで絵の行く末は決まったも同然だ。

ユリスはまだ笑っているバランをひと睨みしてから、もう一度ユーノに目を向ける。

「ところで、いつもあなたの隣に座っているおじいさんは？」

バランの話では朝はいたらしいのに、そこには椅子だけが残っていた。

ユーノは遠慮なく、「なぜそんなことを訊くんだろう」という表情をして訊いてくる。

「カウスンさんですか？ あの人、急に商会の上のほうから呼び出しが来て、今町を出ているんです。多分明日まで戻ってきませんよ。なにか用でした？」

ユリスはユーノに気づかれぬよう、小さく息を呑みこんだ。

バランも、表情の奥で笑いを引っこめる。

「いやなに、いつも隣にいるのにいないから、ちょっと気になっただけだ。なあユリス？」

「え、ええ、そうなの」

「じゃあ俺たちはこれで」

「あ、はい。またよろしくお願いします！」

そそくさと仕事屋をあとにしたふたりを、ユーノはさして疑問を持った様子もなく送り出してくれた。

仕事屋の前で、ふたりは向かい合う。

「やはり繋がっていたのか？」

昨日ふたりを襲った犯人たちと、黒仕事屋。そして仕事屋の老人——カウスン。呼び出されたタイミングからして、犯人たちがなにか喋ったとしか考えられない。

呟いたバランに、しかしユリスは首を振る。

「わからないわね、今ある状況だけじゃ。でもユーノのあの口ぶりじゃ、すぐ戻ってくるみたいだったじゃない？ もし本当にあれを仕掛けたのが黒仕事屋で、カウスンさんがそれに関わっているとしたら、とても戻ってはこれないと思うわ」

「それもそうだな」

バランは応えると、不意に北の空を見あげた。

(結局は、行くしかないか)

行って訊いてみるしか。

自分たちの疑問は、黒仕事屋に会うことでしか解決されない。

それが改めて浮き彫りになっただけなのだ。

「そんじゃ、行きますかね」

「ええ」

足並みをそろえて、ふたりは再び歩き出す。

今度こそ、探し求めていた場所へ。

「なかにいるんだろう？ 黒仕事屋(リズ・セトゥリカ)さんよお」

有翼神(ソアイゼ)像広場へとやってきたふたりは、祈る人々の途切れた隙をついて、すぐ傍へと近づいた。

(やはり気配がする)

そう感じながら問いかけたバランの言葉に、

「とうとうばれたか」

確かに返る声があった。予想どおり、像の内側から。

「あんた、昨日もずっとそうやっていたわけ？」

いつもは仕事屋(セトゥリカ)に対して丁寧に接するユリスも、散々苦勞させられた相手には無理だった。呆れたように問いかけると、像のなかの男は小さく笑って答える。

「ああ、昨日は本当に、いつばれるかヒヤヒヤものだったね」

意外に人のよさそうな声音で、違和感を覚えながら顔を見合うふたり。

「それで？ 黒仕事屋のオレになにか用なのかい？」

それでも向こうから促してきたから、バランは気を取りなおして尋ねた。

「ここで、少年を業者とやりに引き渡す仕事を紹介していただろう？」

緊張を悟られないように、ゆっくりと。そして耳を澄ますと、黒仕事屋が身じろぎした音が聞こえた。

「なんだ、その仕事を受けにきたのか？ 残念ながら、そっちはもう人手が足りている。それよりも、ティレイデスに認められたあんたらには、とっておきの仕事があるんだ」

黒仕事屋はさらりと答えたが、そこにはふたりが聞き逃せない言葉があった。

「待て、『認められた』ってどういうことだ？ その、ティレなんとかって？」

バランが遮って尋ねると、黒仕事屋の容赦ないため息が聞こえてくる。

「なんだ、あんたら、そんなことも知らないで倒しちゃったのか」

そこでピンと来たのは、ユリスだ。

「もしかして、昨日ここで襲ってきたやつらのことなの？」

「そうだ。彼らはティレイデスの一員でね。重要な仕事を頼みたいときは、ああして相手の力量を調べているのさ。ほら、表の仕事屋と違って、黒仕事屋にはランク制度がないからな。かといって、仕事屋でのランクがそのまま、黒仕事屋でのランクになるとも限らないだろう？」

「.....そうだな」

バランは素直に頷いた。実際にそうなりえない人物を、知っていたからだ。

(同じSSランクでも、あいつとは絶対にわかりあえない)

どんな理由があっても悪事を許さず斬る人間が、黒仕事屋での仕事を受けることなどあるはずがないのだ。つまりランクのつけようがない。同じように、どんなに強い人間であっても、悪事を働く覚悟がなければ低ランク扱いになるのが、黒仕事屋の世界だった。

一方ユリスも、請負者(カーレリカ)が襲われていた事件の謎が解け、納得していた。

(黒仕事屋の仕事は、表にばれてはいけないもの)

それが重要な仕事であればあるほど、失敗は許されない。それだけ強い者が必要だった。そのために襲って、強さを確かめていたのだ。

(なるほど、だから逃げようとしたのね、あいつら)

相手の強さを正確に調べるには、毎回同じメンバーで戦ったほうがいい。逆にいえば、そうしなければ比べることはできないのだ。今回捕まったメンバーは、もしかしたらそのために雇われていたやつらなのかもしれない。

「その、ティレイデスってのは、結局なんなの？」

ユリスが問いを投げかけると、

「詳しい説明は、私からしよう」

後ろから、不意に届いた声。

「えっ？」

振り返ったそこには、昨日の長髪男が立っていた。相変わらず、気配はない。

balan は自分の身が震えるのを、こぶしを握ってぐっところえた。

(落ちつけ、相手から敵意は感じられない)

ただ気配がないだけだ。これほど近距離にいても、その存在が信じられないだけ。

咄嗟に口を開けない balan の代わりに、ユリスが噛みつく。

「あんた！ やっぱり黒仕事屋の関係者なんじゃないのっ」

「関係者ではないさ。取引先のひとつだ」

長髪男は涼しい顔をして、半分はどこか呆れたように答えた。

「そうだな、あとは依頼者から直接話を聞いてくれ。頼んだぞ、ティレイ」

黒仕事屋は告げると、それ以上なにも言わなくなってしまった。

少年たちの行方や、業者のことなど訊きたいことはまだあったのだが、長髪男もいる手前無理に訊き出すこともできない。

長髪男はマイペースに辺りを見渡すと、

「そろそろばあさんたちが集まってくる時間帯だ。話は店のほうでしょう」

勝手に決めて、歩き出してしまった。

「あっ、ちょっと待ちなさいよ！」

一言文句を言いたかったユリスだが、ちらほらと人が見えはじめたのは事実であったため、仕方なく長髪男の後ろ姿を追う。

(仕方ないわ、またあとで訊きに来ましょ)

と目配せしようとして、まったく動き出そうとしない balan に気づいた。

「balanっ？ なにしてるの！ 行くわよ〜」

「あ、ああ……」

ユリスに呼ばれて、「はっ」と顔をあげる balan 。

そのとき長髪男も、一瞬だけ後ろを振り返った。

思い切り目が合ってしまった balan は、また足をとめそうになったが――

(ユリスをひとりで行かせるわけにはいかない！)

いつもと変わらない様子を見せているユリスを羨ましく思いながらも、心配に思いながらも、ふたりのもとへと走ってゆく。

ユリスとて、バランの様子がおかしいことには気づいていた。しかし、この場で問いただしてはバランのプライドが傷つくだろうことも、わかっていた。

(だったらせめて、笑わせるくらいはしてあげたいよね)

こっそり考えて、いちばん前を歩く長髪男の背中に声をかける。

「ねえ、あんたの名前ティレイっていうの？」

「ティレイデスは、私の名前でもあり、組織の名前でもある」

長髪男――ティレイデスは振り返らずに答えた。

「ふーん……じゃあさ、ティレイ。その背中、思い切り蹴ってもいい？」

「は？」

その問いにはさすがに、顔だけ振り返るとユリスのほうを見た。

ユリスは真面目な顔をしていた。そう、大真面目に言っているのだ。

「あんた、あたしの唇奪ったじゃない。あたし、凄く嫌だったのよね。でもいきなり蹴ったらよけそうだから、先に許可取っておこうと思って」

ユリスがそこまで告げると、ティレイデスはすぐ前へと向きなおった。大きな息をひとつ吐く。

「なによその反応！ むかつくわねえ～」

「私はきみを助けたのだが？」

「でもあいつらを仕掛けたのはあんたなんでしょ？ ってことは、もともとあんたの責任じゃないの」

「あ、そういうことになるのか」

そこで納得の声をあげたのはバランだ。

しかしティレイデスも譲らずに、あくまでも強気に告げてくる。

「それでも、私は結果的に仲間を犠牲にしてきみたちを助けたのだ。誰が仕事屋を呼びに行ったと思っている？」

それを聞いて、ユリスはだんだん腹が立ってきた。

(あたしは騙されないわよ！)

「どうせすぐ牢から逃がせるくらいの力があるでしょ！ いいからっ、とりあえず蹴らせなさいよ!!」

前にまわりこんで足をとめさせると、ユリスはティレイデスの顔をきつく見あげてやった。

ティレイデスの顔が、歪む。――楽しそうに。

(えっ?)

「気の強いお嬢さん、きみはなかなか鋭いな。いいだろう、蹴らせてあげよう」

そう告げると、ティレイデスはくるりと身体を回転させ、ユリスに背中を向けた。

「ただし、蹴るなら尻にしてくれ。他の場所は痛そうだ」

「わ、わかったわ」

自分で言うとおきながら、予想外の返事に戸惑いながらも、ユリスは頷く。

そのとき、 balan はティレイデスと真っ直ぐに目を合わせていた。どこか挑戦的な視線に、嫌な予感がする。

(一体なにを考えている?)

balan が探るように目を細めたとき、ティレイデスの後ろでユリスが脚をあげた。

唇の両端を、ニヤリとあげるティレイデス。ユリスの脚が尻に当たっても、びくともしなかった。それどころか、その脚を後ろ手につかまえてユリスの身体を前へと引いてくる。

「えっ!？」

ユリスが驚いた声をあげたのと、balan が動き出したのは同時のことだった。

(二度もやられるかよっ!)

ティレイデスの眼力を振り切り、balan は背中の大剣を握ると振りおろす。今にもくっつきそうになっていたユリスとティレイデスの顔のあいだで、ぴたりととめてやった。

「バっ、balan ありがとー！」

さすがに涙目になっているユリスをまだ腕に抱いたまま、ティレイデスは「ふむ」と呟くと。

「きみたちは恋人同士なのか？」

心底不思議そうな声音で問いかけてきた。

「気持ち悪いこと言わないでよ！」

「気持ち悪いこと言うな！」

ふたりの声がそろって、思わず顔を見合わせる。

「.....難しいものだな」

呟いたティレイデスはユリスの身体を放すと、何事もなかったかのようにすたすたと歩いていった。

残されたふたりは、この妙な空気感に笑い出してしまう。

「なんなのこれ！」

「本当にな.....なんなんだ、俺たちは」

笑っている場合ではないのだ。それはふたりともわかっていたのだが、しばらくはそうしていた。

もしかしたら、緊迫していた昨夜の反動が今出ているのかもしれないと、balan は感じる。

(あいつは結局、いいやつなのか悪いやつなのか)

判断が鈍ってしまいそうだった。今だって、ユリスにあんなことをしたのは、わざとのように思えたから。

(俺が怖じ気づいているようにでも、見えたのかもな)

否定できないのは悔しいが、おかげで吹っ切れたのは確かだった。

balan はユリスの傍に行くと、ぽんぽんと軽く頭を叩いてやる。

「な、なによ？」

不思議そうな瞳で見あげるユリスに、答えた。

「昨日のお返し、かな？」

「は？」

(それと、笑わせてくれてありがとう、だ)

ユリスがティレイデスに「蹴らせて」などと言ったのは、なにか裏があるのだろうということは知っていた。おかしい自分に、気づいていないはずはないと。

首を傾げたユリスには答えず、バランは口にする。

「――行くか」

(とりあえず今は、行くしかない)

ユリスもそれを悟っていたから、真剣な表情に戻して深く頷いた。

「ええ。なにを頼まれるかはわからないけど、行ってみましょ」

ティレイデスに頼まれた仕事は、実に予想外なものであった。

翌日の昼すぎ、ふたりがやってきていたのはクーフォシア城の前。夜ここに忍びこむために、偵察に来たのだ。

「……嬉しそうだな、ユリス」

近くの茂みに隠れて、門番たちの様子を窺いながら、バランはユリスの横顔を盗み見る。もちろんその理由はわかっていた。

「そりゃそうよ！ だって運命でしょ、またテフシャお姉さまに会えるなんてっ!!」

「待て待て、会ったら駄目なんだぞっ？ 忍びこむのが目的なんだからな!？」

「わかってるわよう。でも、寢室をちょっと覗くくらいならいいでしょ！ いいわよね!? 駄目だって言っても覗くけどさ」

このハイテンションは、もう誰にもとめられない。

(ま、気持ちはわかるんだがな)

長く旅をしていると、別れのあとに再び出会える確率なんて、極々僅かなものでしかないことを理解してしまうのだ。「また会おう」などという言葉は、そうそう叶わない気休めでしかない。だからこそ会えたときは嬉しく、それが好きな相手ならなおさらだろう。

(おまけにこいつ、ティレイにキスされて凹んでいたし)

テフシャに会うことでちょっとでも気が晴れるなら、それもいいとバランは思っていた。だからこそ黒仕事屋(リズ・セトゥリカ)ともう一度会う前に、こちらを片づける気になったのだ。

(実績をつくっておいたほうが、話も訊き出しやすいしな)

「ユリス、裏側にまわってみよう」

「ええ、そうね！ 前から見てるだけじゃ、テフシャお姉さまの寢室の場所なんてわからないものねっ」

「はいはい、おまえはそっちを探していてもいいさ」

肩をすくめて呟いてから、バランは移動を開始した。ばれないように身を屈めたまま、気配を消して歩いていく。

(動いているあいだも気配を消すなど、俺にだって数秒ほどしかできないのに)

常に気配のないティレイデスのことを思い出し、少しだけ嫌な気分になった。しかも今そのティレイデスの指示で動いているのだと思うと、ますます気が滅入ってくる。

ティレイデスの依頼。それは城のある部屋に、ある物を届けるというもの。渡されたのは、その物と城の見取り図。目的の部屋には印がつけられていたから、バランたちはそこに辿り着くまでのルートを探せばいい。

(以前頼んでいたやつが、ヘマをして捕まってしまったからと言っていたな)

つまりバランたちはその代わりなのだ。この国にいるあいだは、できれば二日に一回程度手伝ってほしいと言われていたものの、次も受けるかどうかはまだ決めていない。今日の結果しだいだ。

奥に長い形をしている城の、側面にまわりこんで上を見あげるふたり。

「入れそうなところはあるか？ ユリス」

どこかに侵入する際、先行するのはいつもユリスの役目だった。ユリスのほうが身軽であったし、どこにでも巻きつけられるウィップはかなり役立つのだ。逆に、バランの大剣は邪魔なだけだから、置いてくることが多い。

バランに振られて、「はっ」と我に返ったユリスは、改めて周囲を見まわす。

「そうね……意外に見張りの兵士が少ないから、どこからでも行けちゃいそうな感じだけど」
(アスティナが言ってたことはホントみたい)

みな王子の病気のことが気掛かりで、それどころではないのだろう。ここに来る前に城下町で宿を取ってきたが、町の雰囲気はかなり暗かった。活気にあふれたグサラの町を見たあとだけに、余計にそれを感じたのだ。

(どっちかといえば、ダウォンに近かったものね)

たくさんの子どもがさらわれ、みなが落ちこんでいた町に。たったひとりの子どもの不調が、近づけてしまった。いかに王子が大事にされているのか、わかるというものだ。

バランとユリスは、どこの国にも属していない。そのため、自国の王や王妃、姫や王子といった存在が、どれほど自分の心の支えになるのかは、正直よくわからなかった。それでもこのような場面に遭遇すると、それは国民にとって神にも等しいものなのかもしれないと、疑似的に感じることはできた。

「ねえバラン」

「なんだ？」

「どうせならさ、アスティナの弟の病気も、治してあげたいよね」

(そしたらきっと、テフシャだって喜んでくれる)

この暗い空気に覆われた町だって、明るく変わるだろう。

告げたユリスに、バランは思い切り丸くした目を向けると、下心半分な言葉を返す。

「どうした？ ユリス。王子の寝室を探すなら、俺も手伝うが」

ユリスはそれに気づいたが、あえて気づかない振りをして続けた。

「だってさ、アスティナが言ってたじゃない。弟の病気は呪いのせいだと、魔術師(フェセレン)が言ったんだって。『呪い』に『魔術師』よ？ 胡散臭すぎるわ。絶対なにか裏があるはずよ」

「まあな。それは俺も怪しいと思っていたさ」

不思議な現象を、そんな言葉で簡単に片づけてしまうことを嫌っていたふたりだからこそ、首を傾げることができるその原因。他に理由があるとはしか思えなかったのだ。

バランは深く頷き、手もとの見取り図に目をやった。部屋の位置は完璧にわかるものの、誰がどの部屋を使っているのかなどは、なにも記されていない。まだこちらの力をはかっている部分があるのかもしれない。

「――よし、じゃあ二手に分かれるか。落ちあうのは宿でだ」

安全に侵入するためには、対象を徹底的に観察すること。

そのやりかたを熟知しているユリスは、バランの言葉にすぐ応じた。

「いいわ。ならあたしは向こう側行くわね」

「見取り図は？」

「頭んなか入ってるから大丈夫」

「気をつけろよ」

「あんたもね」

短い言葉を交わして、ふたりは別れる。

――それから予定どおりふたりが合流したのは、五時間後のことであった。

先に宿の一室に戻っていたバルンは、ひとつしかないベッドの上に座りこむと、ティレイデスから預かってきた箱を布でくるんで腹に巻きつけていた。金属製の箱はサイズのわりには重かったが、身体にぴったりとつけてしまえばそれほど邪魔には感じない。

そこにユリスが戻ってきて、嬉しそうな声音で告げる。

「バルン！ 入りやすそうなところ見つけてきたわよ」

「巽じゃないのか？」

「ええ、侍女たちがこっそり出入りするための場所みたい。城の後ろに小屋があるのよ。そこが地下で城と繋がっているんだわ」

「よく気づいたな」

上から行くことばかり考えていたバルンは、心から感心した。

ユリスは「なに言ってるのよ」と毒づいたあと、苦笑を浮かべて、

「テフシャたちが簡単に城を抜け出してきてたから、気になってたのよ。まさか正面から出るわけがないと思ったもの」

またバルンを唸らせる言葉を紡ぐ。

「なるほど」

考えてみれば、ユリスの言うとおりで。いくら王子の病気にみな気を取られていたとはいえ、正面から出ていった姫がそのまま帰らなければ、もっと騒ぎになっていたことだろう。

バルンは腹に巻きつけた布の上から服を着なおすと、城の見取り図をベッドの上に広げた。ユリスが近づいてきたから、顔をあげて尋ねる。

「城内のどこから出るかわかるか？」

「ええ、大体なら。あたし、ずっとそこ観察してたから」

ユリスは見取り図をしばし眺めたあと、「多分ここだと思うわ」といちばん北にある部屋を指差した。

「そこは厨房らしい。……そうか、使う時間が決まっているから、逆に出入りしやすいのか」

ふたりにとっても、侍女たちにとっても。

顔を見合わせると、ふたりはニヤリと笑った。

「まず目指す部屋は、三階の西端だ。ここはどうも貴賓室のようだ。とすれば、いるのは城の者でない可能性が高い」

「まあそうでしょうね。城の人が黒仕事屋に関係するような仕事を頼んでるなんて、アスティナじゃなくたって考えたくないもの――……！」

そこまで口にしたユリスは、自分で自分の発言に驚く。

(あれ? ちょっと待ってよ?)

今回の仕事は、少年たちを集めていた業者が関係するものとは別だと、ユリスたちは勝手に考えていた。しかし、「少年たちを集めていたのは業者であって城ではない」と納得していたアスティナと違い、「城が業者に頼んでいた可能性はまだある」と疑っていたのは、他でもなくユリスたちで。

(今のこの、状況)

ティレイデスから預かった荷物を、城に届けに行く。それはつまり、城にいる誰かがそれを求めたということ。求められたものをティレイデスが用意したということ。

それは、少年の心臓ではないのか? ヴェクフィル王子を助ける、選び抜かれた健康な心臓では――

(それなら、例の業者というのがティレイデスなの?)

「ん? どうしたユリス?」

思わず呼吸すらとめてしまったユリスに、バルンが呼びかける。

ユリスの視線は、自然とバルンの腹部に向いた。

「ねえバルン、その中身ってなんだかわかる?」

昨日バルンがその箱を受け取ってから、ユリスは一度も触れていない。興味がなかったといえは嘘になるが、例のキスのこともあって、ティレイデスに関するものをあまり見たくなかったのだ。

バルンは不思議そうに首を傾げながらも、ユリスがなにかを気にしていることを悟って、素直に口を開く。

「あいつがあまり動かすなというから、振ったりはしていないが――おそらく、液体だ」

それを聞いたユリスは、ほっと胸をなでおろす。

「それがどうしたんだ?」

「もしかしたら美少年の心臓かもって、考えちゃったのよ」

「な、なんだってー!?!」

「わざとらしく驚かないでよ、バカ」

「.....ああ、そうか。アスティナがそれを疑っていたもんな。しかしユリス、だとすればティレイデスはその業者ってことになるんだろう? 確かに大きそうな組織っぽくはあったが」

「ええ、可能性はゼロじゃないけど、まだわからないわね。でも、それを望んだ相手が誰で、その中身がなんなのかがわかれば、黒仕事屋に訊くまでもなく解決するかも」

(あたしたちが知りたかったことが、最悪の形で、ね)

ユリスが最後まで口にできなかったのは、それを言ってしまったらバルンが本気で落ちこんでしまうことを、よくわかっていたからだ。大事な仕事の前に、それは困る。

「いつも以上に、失敗できないな」

視線でもう一度ルートを確認してから、呟いたバルン。

「頑張りましょ。お互い、恋のために」

気合を入れるためにユリスが告げたら、 balan は顔をあげて、

「おまえはともかく、俺もか？」

さっき見せた下心はすっかり忘れて、訊いてきたのだった。

「あんたねえ。ヴェクフィル王子って、あのアスティナの弟なのよ？ アスティナって、あたしには負けるけど結構かわいかったじゃない。その弟なんだから、きっとすごくあんた好みの——」

「美少年!？」

「の可能性があるわけよ。だからこう、頑張って恩売っておいたらいいんじゃないのって話」

「なるほど!!」

今まででいちばん大きな「なるほど」だった。

(もしかしたら、あそこの地下で見たような超絶美少年が待っているかも!?)

balan は俄然浮き足立つ。

自分から言い出したものの、ユリスはそれを冷めた目で見やって、

「お願いだから、すっ転んで箱を壊したりしないでよね？」

忠告しながらも、心のなかでは似たようなことを考えていた。

(ああ、もう少しでテフシャお姉さまに会える～！)

深まった夜の闇に紛れて、ふたりは作戦を開始した。

ユリスがあらかじめ細工しておいた、城の裏手にある小屋の戸から忍びこむ。

小屋のなかは物置らしく、多くのものが床に直接置かれていたが、いちばん奥にある棚の横だけは、なにも置かれていなかった。

「あそこから入るのね」

ユリスは小さく呟くと、その棚に手をかけ横にずらしてやる。それは簡単にスライドした。そして後ろから、地下へと続く細い通路が姿を現す。

「こんなもの、王さんたちに無断でつくれるのか？」

それが意外に大掛かりなものであったから、 balan は驚いた声を出した。

「無断というよりも、黙認でしょ。それだけやさしい王だからこそ、みんなに慕われてるんじゃないの？」

さらりと告げたユリスが、先にその地下道へと進んでいく。

「ああ、それもそうか」

balan も納得の声をあげると、足音を立てないようあとに続いた。

地下道のなかはさすがに暗かったものの、闇に目を慣らしていた分ユリスにはそれなりに見えていた。逆に、鳥目気味の balan にはほとんど見えないため、ユリスの気配を頼りに進んでいく。

やがてのぼり階段にさしかかり、その先には上向きの扉があった。ユリスは耳を当て向こう側の気配を窺ってから、音を立てないようゆっくりとその扉を持ちあげる。そこは、balan が事前に調べていたとおり厨房だった。たくさんの調理台にかまど、各種調理器具などが目に入る。人は見あたらないが、薄明かりがついていたからよく見えた。

ユリスは地下道から完全に這い出ると、ふと足もとを見やる。

(なるほど、地下貯蔵庫に偽装してあるのね)

扉の表にはそう書いてあった。

「どうする？ 排気口から行ってみるか？」

あとから出てきた balan が、辺りをぐるりと見まわしながら告げた。

「待って、先に廊下の様子を確認してみましょ。やっぱり警備が甘い感じがするわ」

ユリスは応えると、調理台のあいだを縫って大きな扉のほうへと向かう。

「待て」

balan はその腕を素早くつかむと、囁くように告げた。

「扉の向こうにふたりいる」

さすがに balan は鋭い。

ユリスはニヤリと唇の端をあげると、

「ほら、やっぱりここが出入り口になってることわかってるのよ」

「だな」

それでもバランの手を振り切って、扉へと近づいていく。

「おいユリスっ？」

「とりあえず黙らせておきましょう」

テフシャに早く会いたいという気持ちがそうさせているのか、ユリスはいつになく好戦的であった。扉の横に立つと、手振りでもバランを呼ぶ。

バランは一度肩をすくめたが、それでも逆らう気はないからそのあとを追った。わざと、足音を立てて。

すると気づいた外の兵士ふたりが、勢いよく扉を開けて入ってくる。

「誰——」

「うわっ」

そのふたりがふたりとも、ろくに言葉を発せられなかったのは、扉の陰にいたユリスがウィップで巻きこんだからだ。

バランも素早く距離をつめ、それ以上声をあげられる前に気絶へと追いこむ。

見事な手際だった。

「さすがに、大剣背負ってないと身軽ね、バラン」

「ストッパーがない分、危険ではあるんだがな」

ユリスの言葉に苦笑を返すと、バランはふたりの男たちを調理台の陰に移動させる。

そのあいだユリスは、扉をぎりぎりまで閉めると、隙間から廊下の様子を窺っていた。廊下は厨房よりやや明るい程度で、真っ直ぐに続いている奥まで見えていたが、見まわりをしている兵士などはいないようだ。

(やっぱり変よね)

ユリスはその場で腕組みをする。

ユリスたちはそもそも、以前この仕事をしてきた誰かの代わりなのだ。その人物が城に捕まってしまったから、代わりにこうして忍びこんでいる。そう考えると、警備が厳しくなるならまだしも、緩くなるのはおかしな話ではないか。

(それとも、依頼者がよっぽどその品を欲してて、警備を手薄にしてくれてるのかしらね?)

王子の病気のせいだけではなく、その可能性も充分にありうる。

ユリスの後ろにやってきたバランも、兵士らの気配がないことを確認したのだろう、

「行くか？」

訊いてきたから、ユリスは頷いて答えた。

「ええ」

目指す部屋は三階の西端。あらかじめ考えてあった経路を、脳裏で確認しつつ進んでいく。もちろん、いざというときに身を隠す物の確認も怠らなかった。

城内は、ひどく静かだ。みな寝ている時間だからなのだろうが、ユリスにはそれが町と同じく、哀しみの色に覆われているからであるように感じられて。

(なんか嫌だな、こういう空気)

いっそ騒ぎ立ててやりたいとは思えど、さすがにそういうわけにもいかない。

やがてふたりは、拍子抜けするほどあっさりと目的の部屋に辿り着いた。

扉を両側から挟みこみ、顔を見合わせて頷く。

手を伸ばして扉を叩いたのは、バランだった。

「――誰だ？」

なかから低く聞こえてきたのは、男のしゃがれ声。

「ティレイデスに頼まれた者だ」

バランが答えると、部屋のなかの足音が近づいてくる。

「おおっ、待ちかねたぞ！ 入れ」

言葉の終わりに、扉が開いた。

そこに立っていたのは、声からイメージする姿となんら変わらない、ひとりの老人であった。ただし、紫色の長いローブを身にまとい、尖ったフードを目深にかぶっている。

(どう見ても、怪しい！)

ふたりは同時に思った。

咄嗟に動き出せないでいると、

「なにをしておるっ、早く入れ！」

老人は待ちきれないのか、ふたりの腕を取って部屋のなかへと引きずりこむ。

(おっと)

わざと抵抗せずに入ったバランは、素早く部屋全体を盗み見た。貴賓室というだけあって、なかには上等な家具ばかり並んでいたが、この老人だけがどこか浮いているようだ。

「まったく、ずいぶんと待たせおって……警備を減らさなければ来られないなど、運び屋のレベルが落ちたのではないか？」

ぶつぶつと呟きながら、扉を閉めたあとふたりを振り返った老人。

ユリスはその、シワにまみれた顔を見やって、考える。

(なにか勘違いしてるみたいだけど)

ユリスが予想していたとおり、この老人が警備を手薄にさせたのは本当らしい。それほど城に影響力のある人物なのだろうか。

「どうやって警備を減らしたの？」

訊き出すために、ユリスはわざと感心の色をこめて訊いてみた。

すると老人はすぐにそれを読み取り、得意げに胸を張る。――それでも背中丸かったが。

「ふふん、簡単なことだ。ただ『敵の侵入を許さない魔術をかけた』と言えればいいだけだからな！」

その胡散臭い風体からもわかるとおり、どうやら老人は魔術師(フェセレン)らしい。もっと正確に言えば、そう名乗っているらしい。それでも厨房前に兵士らがいたのは、おそらく城内からの出入りを確認するためだったのだろう。なにしろ、アスティナが抜け出していたという実績(?)があるのだ。

その老人魔術師の言葉で、鈍いバランでもあることに気づく。

「そうか、もしかしておまえか！ 俺のかわいいヴェクフィル王子が呪われているなどと、バカ

げたことを抜かしているのは!!」

そう、アスティナが言っていたのだ。王子の病気は心臓に掛けられた呪いなのだと。魔術師がそのように告げたのだと。

バルンが凄んで近づくと、老人魔術師は一瞬だけ怯えた素振りを見せたが、すぐに胸を張りなおして口を開く。

「バカげたこととはなんだ！ バカげたこととは。あの王子は本当に呪われているんだぞ？ わしが近くにおるからまだ生きていただけであって、わしがこの城を去ればあの王子は死ぬ」
(なるほど、そう言って城に居座っているわけか)

人の弱みにつけこんだ、悪質なやり口である。

それでもバルンが怒鳴ることをこらえたのは、この老人魔術師にまだ訊きたいことがあったからだ。

どうやって切り出そうかと、ユリスと視線で会話しているうちに、老人魔術師のほうから振ってくる。

「それより、ぬしらは配達に来たのだろう？ さっさと物を出せ！ そしてさっさと帰れ!!」

どうやら、ふたりが見まわりの兵士に見つかってしまうことを、警戒しているらしい。

バルンはおとなしく、腹に巻いていた布を外し箱を差し出した。

余程待ち焦がれていたのか、老人魔術師はひったくるようにしてそれを奪うと、直後ふたりに背を向けてごそごそとやりはじめる。

(開けているのか?)

自然と、身体の頭から足にかけて緊張が走った。

ユリスも同様に、珍しく身体を強ばらせている。

そんなふたりの熱い視線を感じ取ったのか、不意に顔だけ振り返った老人魔術師は、手もとを自分の背中に隠したまま怒鳴った。

「なにをしているんだ、ぬしら。さっさと帰らんか！」

それでも当然、引きさがるわけにはいかない。

「まあそう怒鳴るなよ。あんただって、次からも配達してくれるやつがないと困るんだろ？ その中身がなにか教えてくれたら、また引き受けてやるんだがなあ」

バルンがあえて陽気に告げると、一度箱のふたを閉じなおした老人魔術師が、今度は身体ごとこちらを向いた。

「ふ、ふん！ ぬしらに頼らずとも、運び屋は他にいくらでも――」

「残念だけど、エセ魔術師さん？ ここ何日か配達が来なかったのは、みんなティレイデスのお眼鏡にかなわなかったからよ」

すでに苛つきはじめているユリスは、こっそりと手を腰のウィップにやっていた。

「エセ魔術師と呼ぶな！ わしはラサギー。敬意をこめてラサギーさまと呼んでくれたまえ」

それに気づかず老人魔術師――ラサギーは、「ふむ」と唸ったあと続ける。

「いいだろう。特別に中身を見せてやる。その代わり次も絶対来るんだぞ？ 来なかったらぐれちゃうからな!？」

「はいはい。で、中身はなんなの？」

さらっと流したユリスを睨みながらも、ラサギーは手に持っていた箱のふたをゆっくりと開いた。

バランとユリスが近づいて見てみると、箱のなかにはびっしりと白い綿のようなものが詰まっている。

そこに手を差し入れたラサギーが、なにかをつかんで引き出した。それは赤黒い液体の入ったビンだった。

(よ、よかった……)

臓器でなかったことに安堵し、ため息を漏らすバランの横で。

(ま、まさか……！)

逆に息を吸ったのは、ユリス。

「それは――」

口のなかが乾いて、うまく言葉を発せられなかった。

そんなふたりの様子を見比べ、ラサギーは「ほほほ」と笑う。

「そっちは気づいているようだな。そうだ、これは血だ」

「なにっ!？」

そこでやっと、事態を把握したバラン。

ラサギーは大きく息を吸うと、高らかに言い放つ。

「これは美少年の血だ!!」

(なんてこと……！)

一体どこからつっこんでいいのかわからない。ユリスはひどく混乱した。

「まさかバランと同じ趣味だなんて！」

「待て、つっこみどころはそこじゃないだろっ！」

「じゃあどこよ！」

「俺は血よりも本体が好きだ!!」

「やっぱり変態じゃないの！」

「そ、そうかもしれないが、俺は美少年の命を奪ったりはしないぞ!？」

必死に訴えるバラン。

(――そう、確かにそうだわ)

そこでユリスは、やっと冷静を取り戻す。静かに息を吐きながら、視線を動かした。

ラサギーの手に握られている、美少年の血。あれだけの量を採ったら、相手は死んでしまうだろう。城にいるこのラサギーの望んでいたものが、アスティナが心配していた臓器でなかったとはいえ、例の業者が少年を集めている理由と無関係とは思えなかった。

(ううん、違うわ)

ラサギーはきっと、そうやって城に――王に疑いをかぶせようとしていたのだ。こういう輩は悪知恵だけは働く。ユリスはそれを嫌というほど知っていた。

(問題は、そうするとやっぱり業者＝ティレイデスになるってことね)

この仕事が終わったら、あの翼の欠けた神の店に、もう一度行く必要があるだろう。

ユリスがそこまで考えているあいだ、バランは涙目になりながらも怒りに燃えていた。

「てめえ！　なんで美少年の血なんて集めているんだ!？」

直感的にわかっているのだ。その血が、捜していた五人のうち誰かのものかもしれないと。

バランが素早くラサギーの胸もとを縛りあげると、その手からピンが滑り落ちる。

「あっ!？」

それは揉めあうふたりの足もとで弾け、砕け、周囲を赤く染めあげた。途端に、鉄に似た生臭いにおいが辺りに広がる。

「なにをやるんだ！　もったいないだろっ！」

「うるせえ!!」

怒鳴られても、バランはまったく動じずに怒鳴り返した。

「く……っ」

そんなバランに、ラサギーは最後の手段を試みる。

「魔術師たるわしに手をあげると、確実に呪われるぞ！　それでもいいのか!？」

しかしその言葉も、残念ながらバランには通じない。

バランは「はんっ」と鼻を鳴らすと、

「残念だが、俺たちはそういうものをこれっぽっちも信じちゃいないんだっ」

そのままラサギーを後ろへと押し倒し、馬乗りになる。

「言え！　なぜ俺の大事な美少年たちを傷つける!？」

「うぐっ、は、放せっ」

「話すのはおまえだ！」

「こらバラン、殺しちゃ駄目よ？」

ユリスはそう声をかけると、ふたりの傍に寄っていった。それから小刀を取り出し、ラサギーの眼球に限界まで近づけてやる。

「ひiiiiiiiiっ」

「早く喋りなさいよ。言っとくけど、あたしの特技は拷問なんだからね？」

ユリスが不敵に笑うと、バランも加勢する。

「そうだ、痛い思いをしたくないなら、さっさと答えろ！」

その迫力に、さすがのラサギーも強気なままではいられなかったらしい。ぶるぶると唇を振るわせながら、つかえつつかえ口にした。

「び、び、び、美少年の血を飲めば……こ、この美貌を、長く保っていただけるのだ！」

「――は？」

思わず間抜けな声をあげたのは、バラン。

小刀を構えたままのユリスも、左右を見まわして、

「え？　どこ？　どこに美貌を持った人がいるの？」

少なくとも、バランの下にいるラサギーは美しくはない。それどころかむしろ、醜い部類に入るだろう。てっきり本人もそれを自覚しているからこそ、フードを目深にかぶっていたのかと思

ったが、どうやら違うらしい。

「し、失礼なやつらだな！ わしのこの美貌がわからんとは……っ」

本気も本気のような。

バランとユリスは目を合わせると、ふたり揃って大きく息を吐き出す。

「そうか、そういうことなのか」

「魔術に掛けられていたのは、他の誰でもなく本人だったというオチね」

自分は美しい。現実を無視してそう思いこめることこそが、魔術であり呪い。そしてそのために、一体何人の少年が犠牲になったのだろう。

ユリスは一度小刀を引き、ラサギーを一度安心させたあと――

「うわぁっ!？」

その顔のすぐ横に、勢いよく突き立ててやった。

それが余程怖かったのか、白目をむいて泡を吐き出すラサギー。気絶してしまったようだ。

「さすがだな、ユリス。無傷で気絶させるとは」

バランはラサギーの上からよけると、忌々しげに睨みながら告げる。本当は自分が痛めつけてやりたかったが、今の自分の状態では相手を殺してしまう可能性があるかと、誰よりも感じていたのはバラン自身であった。当然、ユリスがそうさせないために動いてくれたこともわかっている。

やっと顔を上げられたバランがユリスを見やると、ユリスは険しい表情を浮かべていて、
「ユリス？」

「こいつが起きたら、品物受領と依頼終了の文書を書かせないとね」

「ああ、そうだな」

一応任務は達成したのだ、報酬を受け取る権利はある。そして今後、誰にもこの仕事をやらせないためには、依頼人であるラサギーにそれを取りさげてもらう必要があるのだ。

そこまでやれば、この事件はとりあえず終わる。それでもユリスがその表情を崩せないのは、それをやってもおそらくあまり変わらないだろう未来を、すでに予想できているからだ。

(血を採るためだけに子どもたちをさらうなんて、そんな面倒なことはしないはずだわ)

つまり、当然他の部分も有効活用されていると考えられるのだ。もしティレイデスの本当の目的がそちらだとすれば、こちらはただの副産物にすぎないことになる。ラサギーとて利用されていただけで、事態はあまり変わらないだろう。

(バランがそれに気づいたら、一体どんな顔をするかしら?)

それを考えると、心が重い。

だからといって、ごまかしつづけることなどできるはずもないのだが。

「――バラン、アスティナとテフシャを起こしに行きましょう」

それはまだあとでいいと、ユリスは促す言葉をかける。

「王子きゅんに会わせてもらうのか？」

途端に瞳を輝かせるバランは、本当に扱いやすい。

「そうだけど、みんなの前で『王子きゅん』とか言わないでよ？ あと、悪いけどそのよぼじい

背負ってちょうだい」

「大剣に比べたら紙みたいなもんさ」

応えながら、 balan は気絶したラサギーをひょいと担ぎあげる。

「あたしがテフシャを起こしに行くから、あんたはアスティナをよろしくね」

「へいへい」

そうしてふたりは、部屋の扉に向かって歩きはじめたのだが――

「む、待てユリス」

不意に小声で balan がとめた。

「扉の前に誰かいるぞ」

「えっ？」

それは予想外な事態だ。

誰かが厨房で倒れている兵士を発見した可能性がないわけではないが、それならばもっと騒ぎになっているはず。それに、こんな時間に貴賓室を訪れる人間がいるのもおかしい。

ユリスが balan を振り返ると、 balan は厳しい目をしてしばらく扉を睨んでいた。しかしやがて、驚いたように目を丸くすると、手招きでユリスを呼び寄せる。

「なに？」

近づいていったユリスの耳に、 balan が告げた作戦は、

「俺が扉を開けるから、おまえは相手に思い切り抱きついてやれ」

「え？ なにそれ、女性アレルギーの人かなんかなの？」

「まあ似たようなものだ」

男に抱きつくなんてと思いながらも、 balan が真剣な表情をしていたから、ユリスはおとなしく従うことにした。

気配を消した balan が、扉に近づいて行って横から手をかける。

ユリスは正面に立ち、その扉が開かれる瞬間を待っていた。

それは一瞬の勝負だ。相手が向かってくるより速く。相手が逃げ出すよりも速く。その身を捕まえなければならない。

目と目で合図しあい、いよいよその瞬間が訪れる。

素早く扉が開かれたとき、滑りこんできたのは誰かが息を吸う音。

ユリスは相手を確認するよりも先に抱きついた。背が高い相手であったため、首にぶらさがりような格好になった。

「――おぬしはっ!？」

不意に頭の上から降ってきた声は、聞き覚えのある艶やかなもの。

(この声……)

「テフシャお姉さまっ？」

顔をあげたら、本当にテフシャだった。

(なるほど、だから抱きつけなんて言ったのね)

balan なりの励ましなのだろうと、ユリスは理解した。寝顔を盗み見ることができなかったの

は残念だが、ぬくもりを直接感じるのも悪くない。

「おぬしら、なぜこんな場所におるのじゃ!？」

会えるかも、と期待していたユリスや balan とは違い、なんの覚悟もなかったテフシャは、驚いているというよりも戸惑っているようだった。首にぶらさがったユリスを、なんとか離そうと試みているものの、それすらもうまくできないほどだ。

それをいいことに、ユリスは足をぶらぶらさせながら訊いてみる。

「話すとき長くなるんですの。それよりテフシャお姉さまこそ、なにをここにこへ？」

考えたくはない。しかし、こうして駆けつけてきたことから推理するに、テフシャがラサギーの協力者である可能性があった。

そうでなければいいと願いながら、ユリスは至近距離でテフシャの顔を見あげる。

その端正な顔立ちに、不快な色が見えたのは。抱きついているユリスのせいではなく、balan に担がれているラサギーの姿を捉えたからだろう。

「私は陛下やアスティナさまほど、ラサギーのことを信用しておらぬ。じゃから、毎夜ひとりで見まわりをしておったのじゃ。そうしたら厨房で倒れている兵士らを見つけてな。もしやラサギーが関与しておらぬかと、こうして見にきたわけじゃ」

テフシャはそこまで告げると、ひとつ大きなため息を吐き出して、

「やはり、そやつは悪人なのじゃな？」

疑問系でありながらも、疑いようのない強さを秘めて口にする。

ユリスには、それだけで充分だった。

(テフシャお姉さま……!)

他の人間であれば、確実にユリスと balan のほうを疑うだろう。しかしテフシャは、こんな状況にあってもふたりを信じた。信じてくれた。

ユリスは抱きついている腕に一度力をこめてから、やっと離れた。そして肯定の意味をこめて、テフシャにひとつのお願いをする。

「テフシャお姉さま。あたしたちをヴェクフィル王子に会わせていただけませんか？」

テフシャの眉が、ぴくりと動いた。

「ヴェクフィルさまのご病気を治せるのか？」

今度は balan が口を開く。

「それはわからないが、その病気にはこいつも呪いも関与していないらしい。そう白状したんだ」

「なにっ？」

「俺たちは今まで長いこと旅をしてきたし、いろんな病気も見てきた。医者ではないが、見たらなにかわかるかもしれない」

個人的にも会いたい、という思いを押し殺して、balan は至極真面目な表情で告げた。

「ふむ……」

テフシャは考えているのだろう、腕組みをして頭を傾げる。

(ああ、その仕草、色っぽくて素敵ですわ、テフシャお姉さまっ)

瞳にハートマークを浮かべて見つめるユリス。

その視線を眉間のしわで受け流してから、テフシャは静かに口を開いた。

「いいじゃろう、判断はアスティナさまにお任せする。ヴェクフィルさまのことをいちばん想っておられるのは、アスティナさまじゃからな」

それはつまり、「会わせてやる」ということだ。アスティナが断るはずなどないことを、 balan もユリスもよくわかっている。

おそらく、テフシャでさえ。

「ありがとう、テフシャお姉さまっ」

もう一度抱きつこうとしたユリスを、華麗に躲したテフシャはまわれ右をして歩き出す。

「あん、待って〜」

あとを追ったユリスは、懲りずに右腕だけつかまえた。今度はよけられなかった。

残された部屋のなかで、balan はひとり苦笑する。

(無事に浮上できたようだな)

なりゆきとはいえ計画どおりいったことを嬉しく思いながら、部屋を出た。血の臭いが城中に広がってしまわないように、扉をきっちり閉めてからふたりのあとを追う。

(次は俺の番だ！)

本当はそんな場合ではないのに、顔の緩みをとめられない。

——そんなことでも考えていなければ、怒りを抑えられなかった。

当然といえば当然だが、こんな時間に城へ侵入してきたふたりを、アスティナは最初驚きの表情で迎えた。しかしそれもすぐに、喜びの色へと塗り替えられる。

「まさか、またお会いできるなんて嬉しいです！ しかも、ヴェクのことを心配して来てくださったのですね」

アスティナを起こし、説明したのはテフシャだった。どうやらテフシャはそのように説明したらしい。

(ま、賢明な判断だな)

balan はそう思った。

廊下を歩いているあいだ、テフシャには事情を簡単に説明しておいたのだ。しかしそのすべてをアスティナが知るには、まだ早すぎるだろう。無駄に傷つける必要などない。

「ではわたくしが、ヴェクの部屋に案内いたしますね」

アスティナはそう告げると、なぜか balan の手を取り歩きはじめる。左肩にはラサギーを背負っているからか、右の手を。

(む?)

テフシャをユリスに取られているからだろうか。いや、それにしただって少々赤みを帯びている顔は気になる。しかし balan はそれ以上考えるのが怖くて、やっぱり知らない振りをした。

(そうだ。それよりも今は、王子きゅんだ！)

アスティナは確かに綺麗な娘だ。まだいくらかの幼さは残るものの、品のある顔立ちは一級品。その弟なのだから、美しくないわけがない。

(今度は俺が浮上する番っ)

足取りも、自然と軽くなる。

そんな balan の様子を当然見抜いているユリスは、 balan が必要以上に暴走しないよう、真面目な路線の声をかける。

「ところでテフシャお姉さま。国王や王妃は、王子の傍にいらっしゃらないの？」

向かったところで鉢合わせてしまったら、あとが面倒そうだった。状況により、アスティナたちが城を抜け出していたことも、言わなければならないだろう。

テフシャはちらりとユリスを見たあと、前を歩くアスティナの背中に目をやった。

「夜はさすがにいないのじゃ。私は言いに行きたいところじゃが――」

「そんなの駄目です！ お父さまもお母さまも、すぐに話を大きくするんですもの」

遮ったのは、振り返ったアスティナだ。

「おふたりがヴェクの病気を治してくれたら、改めて報告すればいいのです」

「いや、姫さん。まだ俺たちが治せると決まったわけじゃ……」

「それでも、ただ城にいるだけでなにもしてくれなかった、そのラサギーさんと比べたら充分ですよ。一緒にいるだけで楽しくなるおふたりの様子を見たら、ヴェクだって元気になるかもしれません」

どうやらアスティナは、かなり期待しているらしい。

「あんた、それ褒めてるの？」

まるで「バカ騒ぎを見物するのが面白い」と言われたような気分になって、ユリスは思わず問いかけた。

隣ではテフシャが、口もとを抑え笑いをこらえているようだった。

「いいじゃないか、ユリス。それで本当に元気になってくれるなら、本望さ」

balan はアスティナのフォローをするように告げたものの、実際は下心しかない。

「そりゃあ、あんたはそうだろうけどね……」

そこで今度はアスティナに笑われるから、また始末が悪い。

(あたしたちは珍獣じゃないっての！)

これでヴェクフィルにも笑われたら、逆に凹んでしまいそうだ。少なくともユリスはそう思っていた。

しかし――

「ここがヴェクの部屋です。どうぞ」

城の最奥、何度も扉をくぐったその先に、部屋はあった。

先に入っていったアスティナが、ベッドで眠るヴェクフィルをやさしく揺り起こす。

「ヴェク、起きなさい。あなたに会わせたい人がいるの。起きて」

balan とユリスもなかに入ると、まずその部屋の小ささに驚いた。

(あら、意外と狭いのね)

それがユリスの素直な感想だ。ここはヴェクフィルの自室ではなく、病人を匿うためだけの部屋なのかもしれない。そのせいか、部屋には中央に置かれた大きなベッド以外なにもなく、生活感はまだ感じられなかった。

ふたりはベッドに近づいていく。天蓋つきであるため、薄いベールに阻まれて、ヴェクフィルの姿はまだ見えない。アスティナが灯りを手にしていたから、そのシルエットだけが透けて見えていた。

ごくりと、 balan は喉を鳴らす。いよいよ期待の美少年に会えると思うと、胸の高鳴りを抑えられない。

「ん……ねえさま？ どうしたの、こんな時間に……」

ヴェクフィルの声が聞こえたのと、テフシャが部屋の灯りをつけたのは同時のことだった。

「やっと起きたわね」

アスティナは安心したように息を吐くと、内側からベールを持ちあげて顔を出す。

「どうぞ、おふたりともこちらへ来てください」

balan とユリスは一度お互いの顔を見やると、 balan から先にベールのなかへと入っていった。

(テフシャに抱きつかせてくれたお礼よ)

その後ろから、ユリスも入っていく。

瞬間、

「あっ……!!!」

「えっ……!?!」

ふたつの声が重なった。

ひとつは、ヴェクフィルを目にしたバランがあげたもの。

(うおおおおお、なんてこったああああ)

ヴェクフィルは本当に美少年であった。しかも、バランがあの地下で見たセールの絵にそっくりだったのだ。

(あの美少年がまさか実在していたなんて――)

感動の涙をこらえるので、精一杯だ。

一方、もうひとつの声の主であるヴェクフィルの視線は、そんなバランを通りこしてユリスまで届いていた。

(え? なに??)

自分の顔になにかついているだろうか、戸惑うユリス。

そこに、ものすごい勢いで上半身を起こし、ベッドから飛び出したヴェクフィルが近づいてくる。

「まさか……まさかあの絵の美しい女性が存在していたなんて……っ!!!」

「――は?」

わけのわからないことを言ったかと思うと、ユリスの細腰に抱きついた。

「なに? ちょっと、放してよっ!?!」

本当に病気なのかと思うほど、子どものくせに強い力だった。

羨ましそうにそれを眺めていたバランは、

(バラン～、どうにかしなさいよ～!)

というユリスの視線に、やっと我に振り返りこみを始める。

「待て、抱きつくなら俺にしてくれ!!!」

担いでいたラサギーの身体をぽんと放り投げると、両手を広げてしゃがみこんだ。

「そ、そうよ! あのおっさん見た目と違って意外にやさしいから、あっちにしておきなさいっ?」

指を差し、ユリスも加勢する。

しかしヴェクフィルは、必死に首を横に振ると、さらに強く抱きしめてきた。

「駄目だよ、やっと会えたのに! これって夢じゃないんだよね? 本物なんだよねっ!?!」

(こ、困った……)

まったくもって話が通じない。

「こら、ヴェク! どうしたのあなた、ずいぶん元気じゃない?」

それでもアスティナが声をかけると、ヴェクフィルは「はっ」とその手を緩める。

「あ、ご、ごめんなさい! あんまり嬉しかったらつい……」

やっと落ちついたようだ。

その後、四人掛かりでヴェクフィルから話を聞き出したところ、大体の事情がつかめた。

この発端は、ひと月ほど前に城を訪れた画家のセールト＝テックス。彼がヴェクフィルに、自らが描いた最高傑作を見せたらしい。それは、神の如く翼を生やした全裸のユリスであったという。

「それはもう本当に美しくて、僕は鼻血をとめることができませんでした！」

ベッドに腰掛け、丁寧な言葉で語るヴェクフィルの顔が、ポツと赤く染まる。

(まさかのエロガキか！)

バランス的には大変ショックな出来事であった。しかし、それでも恥ずかしそうに俯くヴェクフィルを見ていると、やっぱり自分の顔も熱くなってくるから仕方がない。

(くそ〜、ユリスさえいなければ、俺に抱きついてくれたのにつ)

憎らしげな視線をユリスに向けてみても、ユリス自身がいちばん困惑した顔をしていたから、却って憐れに思えてくるのだった。それにそもそも、ユリスがいなければここに来ることもなかっただろう。

なぜなら――

「つまり、ヴェクフィルさまの病気の原因は、『恋煩い』じゃったということによろしいのですか？」

まとめたテフシャの言葉に、ヴェクフィルが「きゃー」と自分の顔を手で覆い隠す。

「そのようにはっきり言われると恥ずかしいです。簡単に言えばそうなんですけど」

曰く、絵のなかのユリスを忘れることができず、ずっと夢のなかで逢瀬を繰り返していたのだと。

「目をつむれば、いつでも簡単に会うことができました。だから寝てばかりいたんです」

「もしかして、胸の辺りが痛いと言っていたのは……？」

おそるおそる問いかけたのは、アスティナだ。さすがに呆れているようだった。

「恋とはこんなにも胸が苦しくなるものなんですね……僕、知りませんでした」

聞いていた一同がいっせいに、深いため息を吐き出す。

「しかしまあ、魔術だの呪いだのとは、やはり関係がなかっただけよかったな」

精一杯のフォローを見せたバランスに、アスティナも頷いて、喜ぶように手を叩いた。

「そ、そうですよね！ これでヴェクの病気は治ったも同然なのですから」

それにぎょっと目を見開いたのはユリスだ。

「待ってよ、それってあたしにこの子とつきあえとか、言ってるんじゃないわよね？」

「ああ、そうか。つきあったらずっとテフシャと一緒にいられるぞ？」

「う……っ」

開きなおったバランスは、もうからかいモードに入っている。

「そ、それは魅力的だけど、あたしはあんたと違って子どもなんて対象外なのっ」

「ええっ、そんなあ〜」

「ああもう、こんなことで泣かないでよ！」

ユリスは思い切り頭を抱えた。

(なんなのよ、この状況)

ヴェクフィルの病気の原因が簡単にわかったのはよかった。けれど、それを治すために犠牲になれといわれても、心から困るのだ。テフシャとずっと一緒にいられるというのは、確かに魅力的ではある。あるが、それとてテフシャ自身も望んでいなければ意味がない。

そんなことを考えながら、ちらりとテフシャのほうを見やったら、一瞬目が合った。

(えっ?)

珍しく、やさしい顔をしていた。

「――ヴェクフィルさま。どうしたら諦められそうです？」

その唇がゆっくりと動き、ヴェクフィルに最後の選択を迫る。

ヴェクフィルは「うっ」と呟いたあと、熱のこもった視線でユリスを見あげて、

「ほっぺに、キ、キスをさせてくれたら……きゃっ」

また両手で自分の顔を隠した。

次にみなが注目するのは、言われたユリスだ。

「なっ、なによその目はあ〜！」

それで丸く収まるんだから我慢しろと、言われているような気がした。

(でも、あたしだけ我慢するなんて不公平じゃない!?)

そもそもこの事態は、セールのせいであってユリスのせいではないのだ。

そこでユリスは、あることを思いついた。

「それなら、テフシャお姉さまもあたしにキスさせて！ だったらいいわよ」

「なにっ？」

飛びあがったのはテフシャ。

(この条件なら断れないでしょ?)

ユリスは心のなかでニヤリと笑う。

「お願いしますわ、テフシャお姉さま〜。あたし、好きでもない男に唇を奪われて傷心中なんですの」

さらに駄目押しをしたら、テフシャの瞳が少し揺れた。視線はユリスから balan へと移り、「本当か？」と尋ねているようだった。

今度は balan が加勢して、神妙な表情で頷く。

それでテフシャの心は決まったようだ。

「……いいじゃろう」

吐いた息とともに応える。

(ありがとう balan!)

そう感謝したのも束の間。

「じゃあ俺は王子きゅんにチューする！」

部屋のなかに響き渡ったのは、とても三十男のものとは思えない台詞だった。

(バ、balan……)

辺りは騒然となり、みなが呆れた顔をして balan を見つめている。

その中心で balan は、ぼりぼりと頭を搔くと、

「いや、えっと、その……俺もそれで諦めるから。駄目かな★」

お茶目に舌を出しても、全然かわいくないのがいっそ清々しい。

そこに、

「で、でしたらわたくしも、参加したいです！」

意外にもアスティナのフォローが入る。

「わたくし、バランさんに……」

「えっ、俺？」

「本気!？」

バラン以上に驚いたのは、ユリスのほうだった。

(はあー……人の好みって、わからないものねえ)

ユリスがバランとアスティナの顔を交互に見比べていると、ポンと手を叩く音が聞こえた。犯人は、ヴェクフィルだった。

「わかりましたよ！ これでテフシャがねえさまにキスしたら、一周するじゃないですか？ みんな平等ですっ」

一同から、「おおーっ」と声が漏れる。

頭を抱えているのは、テフシャだけだ。

しかしやがて、このバカバカしい空間に慣れてきたのか。

「――ではみなさん、それでいいですね!？」

最後にまとめたのも、やっぱりテフシャだった。

(ああ～、王子きゅんのほっぺ柔らかかったなあ～……)

感触を思い出しながら、バランはひとり遅めの夕食にありついていた。

ここはグサラの食堂。そう、宿の隣にある美味しい食堂だ。

あの奇妙な儀式のあと、アスティナに勧められ、ふたりは昼過ぎまで城内で休憩していた。それからグサラに戻ってきたため、着いた頃にはもう夕方で。ラサギーに書かせた二枚の書類を持って、例の店へと向かったものの、扉は固く閉ざされていたのだった。

ちなみにユリスは、睡眠が足りないと言って早々に眠ってしまった。

(まあ、俺よりもダメージ大きそうだし、不貞寝したい気持ちはわかるがな)

勝手に裸の絵を描かれたあげく、それに惚れられたのでは防ぎようがない。美しいものが大好きなセールトは、以前からユリスを美しい人間とくっつけようとしていた。それでいろんな国の美形王子に、ユリスの絵を見せて歩いているらしいのだ。それはセールト本人がユリスとくっつこうとするよりも、ある意味やっかいな話だった。

(仕方ない、起きたらまた奢ってやるか)

『運命の人(ラーティフェン)』探しでは、結局どちらも振られてしまった。それならより不幸なほうを、労ってやるのが筋というものだろう。

実際のところ、バラン自身も深く傷ついていたのだ。助けられなかった少年たちの問題で。しかし、それについてはユリスも腹を立てていたことに、ちゃんと気づいていた。普段はクールなように振る舞っていても、ユリスの根っこはちゃんと熱い。だからこそ、一緒にいられる。それが苦ではないのだ。

そんなふうな、考えごとをしながら手を動かしていたバランは、珍しく周囲に気を配っていなかった。そのため、誰かが向かいの席に座ろうとするまで、近づいてくる存在に気づかずにいた。

ぎいと椅子が引かれた音に、

「ユリーーあ？」

てっきりユリスだと思って顔をあげたバランは、手をとめる。

そこにいたのは、あまりにも予想外な人間であった。

「てめえ……なにしに来やがった？ 奢らないぞ」

バランが睨みながら告げると、視線の先の口もとが「ふっ」と笑う。

「期待してないさ。それに、私を捜していたのはきみたちのほうだろう？」

「む」

確かにそうだった。

バランはまだ懐にしまったままだった文書を取り出し、飛ばしやすいよう縦長に折ると、その男――ティレイデスに向かって投げつける。

「なんの真似だ？」

「城から飛んできた手紙だ」

陽気な振りをして答えたバルンに、ティレイデスは不思議そうな目を向ける。テーブルから外れ、足もとに落ちたそれを拾いあげると、広げて目を細めた。

「ほう、やるじゃないか。報酬は黒仕事屋(リズ・セトゥリカ)のほうで受け取ってくれ」

出てきたのは、そんな言葉だ。

「あれは注文ばかり多く、金払いの悪い客だった。仕事を取りさげてもらえるのは正直助かる」

そんなことで感謝されても、まったく嬉しくない。

(いかん、冷静になれ、俺！)

ともすれば暴れ出してしまいそうな心を抑えこみ、バルンはゆっくりと言葉を紡ぐ。手もとのスプーンはもう、置いていた。

「――少年ばかり集めていた業者というのは、おまえたちのことなのか？」

「そうだ」

間髪入れずにティレイデスは答える。まるでそれが正義だとでも言うように。

「なぜ？」

「需要があるから、としか言えないね」

それが商売。

けれど、バルンは割り切れない。

「みんな殺しているのか？」

「殺されない子もいるさ」

「ダウォンから連れ去られた五人は？」

「それは殺した」

思わず椅子から立ちあがるバルン。今大剣を背負っていたら、おそらく振っていただろう。

そんなバルンを目にし、ティレイデスは含み笑いを浮かべると、

「なぜ怒る？ きみたちは黒仕事屋の仕事を容認しているのだろう？ それは我々の仕事を容認しているのと同じことだ」

さも楽しげに告げた。

バルンはぎりりとこぶしを握りしめ、テーブルを叩きつける。

「それでも！ おまえたちがこっちの目の届く場所で悪事を働くなら、容赦なく邪魔させてもらうっ」

世のなか綺麗事だけでは生きていけない。

バルンとユリスが黒仕事屋を容認しているのは、ただそれだけの理由なのだ。当然許せる悪事もあれば、許せない悪事もある。黒仕事屋のすべてを許しているわけではない。

テーブルを叩いた音と怒鳴り声で、周囲の視線がバルンに集まる。

バルンは「ゴホン」とわざとらしく咳をすると、椅子に座りなおしてから続けた。

「いずれは、おまえを倒すことになるだろう」

もう何人も、罪のない子どもを殺していることは明白なのだ。放っておくわけにはいかない。業者というからにはある程度の規模があるのだろうし、これからも被害者は増えつづけるだろう

(今捕まえられたら、いちばんいいんだがな)

残念ながら、 balan は勝てる気がしなかった。ユリスがいたら作戦でどうにかなったかもしれないが、おそらくまだ爆睡中。おまけにここは食堂だ。こんな場所で戦うわけにはいかない。もしかしたら、ティレイデスがわざわざ出向いてきたのも、戦いを避けるためであったのかもしれない。

(この策士め！)

睨む balan の視線の先で、今度はティレイデスが立ちあがる。

「楽しみにしているよ」

柔らかく笑うと、周囲から女性たちのため息が漏れていた。

相変わらず微塵も感じさせない気配で、 balan の真横を通りすぎようとした、そのとき。

「――そうだ。きみに恋人はいるのかね？」

「は？」

あまりにも予想外なことを訊いてきたものだから、 balan は思い切り間抜け顔を浮かべてしまった。

(なんだ？ 急に……)

とことんバカにするつもりなのか？

相手の意図が読めず、 balan が答えられないでいると、

「きみはわりと、私の好みだ」

ティレイデスはやはりさらりと、衝撃的なことを口にする。

balan は咄嗟に身体を仰け反らせ、ティレイデスとのあいだに距離をつくった。

「お、おまえっ、ユリスにちょっかい出してたじゃないか!？」

「あれはきみの反応を見たかっただけさ。――もっとも、きみは私の期待とは逆のほうに嫉妬していたようだがね」

「しっ、嫉妬って……あのなあ！」

balan にとっては、別に嫉妬をしたわけではない。ただユリスを守ろうとしたただけだ。誰だって、相棒が嫌な目に遭っていたら嫌だろう。

「だいいち、俺が好きなのは美少年だ！ おまえみたいなおっさんは眼中外!!」

びしっと指を差し、自分のことは棚にあげて言ってやったら、ティレイデスは肩をすくめた。

「それなら、次に会うときはとびきりの美少年を用意しておいてやろう」

「な……やめろ！」

それはどう考えても逆効果であった。

不覚にも殴りかかってしまったこぶしを、簡単に受けとめるティレイデス。その口もとは、楽しそうに歪んでいる。

(やろう、俺を挑発したな!?)

balan がそう考えているあいだに、ぐいと身体を押されて、 balan は椅子ごと後ろに転がった。

「どわっ!？」

そして体勢を立てなおす前に、ティレイデスは背を向ける。

「また会おう」

――それは本当に、不愉快な出来事であった。

翌朝同じ場所で、やっと起きたユリスにそれを教えたら、

「なるほど、ティレイデスに愛の告白をされた、と」

「納得してほしいのはそこじゃないぞ！」

なんともユリスらしい切り返しだ。しかしそれがユリスなりの慰めだということはわかっていたから、バランはそれ以上少年たちのことを口にしなかった。

その後有翼神(ソアイゼ)像広場へと行き、黒仕事屋から報酬を受け取ったふたりは、グサラをあとにする前に正規の仕事屋(セトゥリカ)にも立ち寄る。黒仕事屋と繋がっていたらしい窓口の老人――カウスンがどうなったのか気になっていたのだ。

「あっ、おはようございます！」

入っていくと、真っ先に明るい笑顔であいさつしてきたのはユーノ。素早くその隣に目を走らせると、前と変わらない姿がそこにはあった。

バランとユリスは目を合わせ、こっそりと安堵の息を吐く。直接は関係のない相手ではあるものの、なにかあってはいい気がしない。

(さて、どう切り出そうかしら?)

できればカウスンに詳しい話を聞いてみたかったユリスは、ユーノの退出を画策する。

が、それよりも早く声をかけてきたのは、そのユーノであった。

「聞きました? ユリスさん。おふたりの協力で捕まえた例の犯人たち、脱獄してしまったそうなんです！」

「あらら」

(やっぱりね)

逃げ出す自信があったからこそ、おとなしく捕まったのだろう。それは予想どおりのことだった。

しかしユーノは、不満そうに口を尖らせる。

「全然驚きませんね。また誰かが襲われるかもしれないのに……」

そこでユリスは、隣のカウスンをちらちらと見ながら、にっこり笑顔で安心させてやった。

「それは大丈夫だと思いますわ。戦ったときに、理由をもとから絶っておきましたもの」

それは嘘だ。しかし、ユリスたちが理由を絶ったのは本当で。ラサギーへの配達仕事がなくなった以上、彼らがこの地で誰かを試す理由は、今のところないはずだった。

(ほら、カウスンさんもこっそり頷いてるし)

ユーノにばれないよう、微かにではあったが、ユリスにはわかった。おそらく向こうも、こちらが気づいていることに気づいているのだろう。

「なるほど、それなら安心ですね！」

なぜかユリスを信じ切っているユーノは、心から嬉しそうに手を叩いた。それからふと、思い出したように、

「そういえばユリスさん、ストーカーさんとはもう会ってしまいましたか？」

聞き間違いであつたらいいのにと、全力で思わざるをえない言葉を繋いでくる。

「えっ？」

「ここに絵を預けたままになっていたのを思い出したそうで、昨日取りにいらしてたんですよ。それで、僕がうっかり『ユリスさんに言われて燃やしてしまった』と言ってしまって……あっ、でもすぐに『もうこの町にはいない！』と言っておきましたから、もしまだ見つかっていないのであれば、すぐに出たほうが――」

そう言っているあいだに、聞こえてくる。

「むっ？ むむっ？ むむむむむむっ!? 近くに我が愛しき女神の匂いを感じるぞ！」

ドアの向こう、それは間違いなくセールのものだった。

(冗談じゃないわよっ！)

迷っている暇はない。

「バラン！ 行くわよ!!」

ユリスは素早くまわれ右をすると、ドアで攻撃するように、思い切り開いてやった。

「ぐへえっ!？」

変な声が聞こえても、気にせず走り出す。

その背中を頼もしく感じながらも、あとを追うバラン。

「待あー……てえー……」

途切れ途切れの声が聞こえなくなるまで、ふたりは走りつづけた。

――それはそれは本当に、愉快的な出来事であった。

(了)